

い の うら つじ の た
井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群

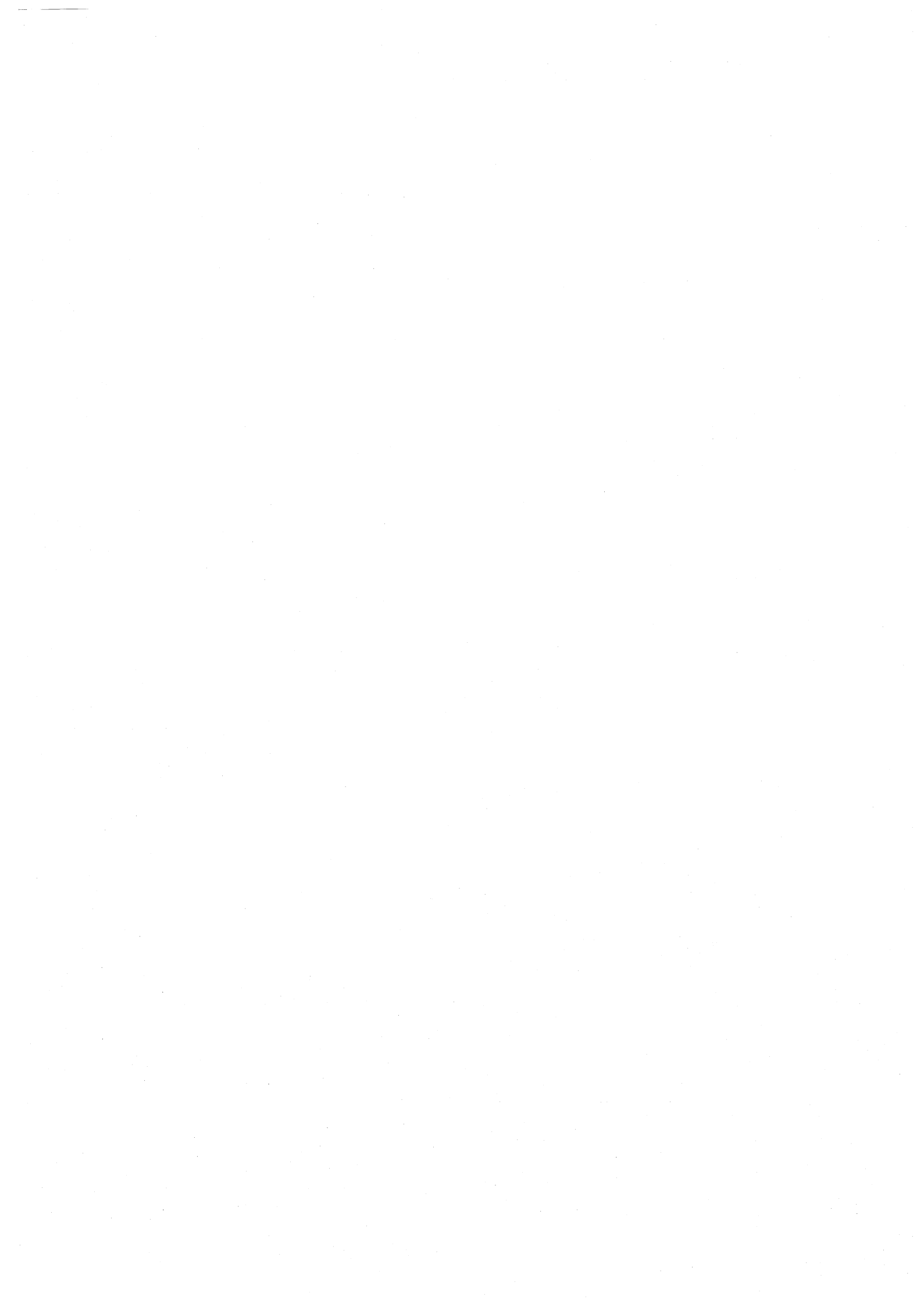
とみ ほん
福岡県前原市大字富、本所在の遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第 53 集

1994

前原市教育委員会



井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群

福岡県前原市大字富、本所在の遺跡の調査

前原市文化財調査報告書

第 53 集



序

私たちが暮らすこの糸島地方は、今から約二千年前、中国の歴史書である魏志倭人伝に記された「伊都国」の地として、その地理的条件から、大陸文化の入口として、あるいは海外交流の拠点として、繁栄していました。

中でも、前原市は、「伊都国」の中心とされ、この国を支配したであろう「王」たちが眠っていると考えられている三雲南小路遺跡・井原鎌溝遺跡・平原遺跡などをはじめとして、数多くの重要な遺跡や遺物が存在しています。

前原市教育委員会では、この豊富で貴重な文化財を、人類共有の財産として保護・保存し、活用して行くため、積極的に取り組んでおります。

しかし一方で、現在の前原市は、福岡都市圏のベッドタウンとして人口急増地域の一つとなっており、それに伴うさまざまな開発が行なわれ、事業地内に存在する文化財をどのように保護・保存して行くかが大きな課題となっているのも事実です。

開発によって影響を受ける文化財のすべてを完全な形で残すことは現実的には不可能であり、現状保存することを原則として関係者間での協議を重ねたうえで、現状変更をせざるを得ないものについて調査し、記録保存という形を採っております。

本書において報告する発掘調査も、ゴルフ場建設にともなって影響を受ける遺跡に対し、設計変更などによって可能なかぎりの現状保存の方策を採った上で、止むを得ず破壊することとなったものについて行なったものであります。

残念ながら記録保存とせざるを得なかった発掘調査ではありますが、今回出土した遺構や遺物も、私たちの郷土の歴史を明らかにするうえで、貴重な手掛かりを提供してくれています。

本書が、考古学的資料として活用されるとともに、文化財の保護・保存を考えていただく一助となれば幸いです。

また、今回の調査を実施するにあたり、設計変更や作業工程、さらには費用負担の面でご協力いただいた株式会社ソロンをはじめとする関係のみなさんに対し、この場をお借りして、感謝申し上げます。

平成6年3月31日

前原市教育委員会

教育長 榑 木 昭 生

例 言

1. 本書は、前原ゴルフ場（営業名称；ザ・クィーンズヒル・ゴルフクラブ）建設地内の、福岡県前原市大字富に所在する井ノ浦古墳と、大字本に所在する辻ノ田古墳群の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、前原ゴルフ場建設にともなう発掘調査である。
3. 調査は、前原市教育委員会（調査当時は前原町）が主体となって実施した。
4. 本書に用いた地図は、前原市都市計画課保管の地図である。
5. 本書に掲載した実測図は、林 覚が実測・製図した。
6. 写真撮影は、気球による空中写真撮影を（有）空中写真企画に依頼し、その他を林が行なった。
7. 本書の執筆・編集は、林が行なった。

本 文 目 次

I. 調査にいたる経過	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の記録	4
1. 概 要	4
2. 井ノ浦古墳の調査	5
3. 辻ノ田1号墳の調査	11
4. 辻ノ田2号墳の調査	21
5. 辻ノ田3号墳の調査	27
IV. ま と め	30

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図（1／50,000）	2
第2図 開発の範囲と調査地点（1／7,500）	折り込み
第3図 井ノ浦古墳地形測量図（1／100）	4
第4図 井ノ浦古墳土層断面実測図（1／80）	5
第5図 井ノ浦古墳石室実測図（1／50）	6
第6図 井ノ浦古墳墳丘北側埋納土器実測図（1／3）	7
第7図 井ノ浦古墳墳丘南側埋納土器実測図（1／3）	8
第8図 井ノ浦古墳周溝内出土土器実測図①（1／3）	9
第9図 井ノ浦古墳周溝内出土土器実測図②（1／3）	10

第10図	井ノ浦古墳出土鉄器実測図(1/2)	11
第11図	辻ノ田1号墳地形測量図(1/100)	12
第12図	辻ノ田1号墳土層断面実測図(1/80)	13
第13図	辻ノ田1号墳石室実測図(1/50)	13
第14図	辻ノ田1号墳封土内出土土器実測図①(1/3)	15
第15図	辻ノ田1号墳封土内出土土器実測図②(1/3)	16
第16図	辻ノ田1号墳墳丘上出土土器実測図(1/3)	17
第17図	辻ノ田1号墳石室内出土土器実測図(1/3)	折り込み
第18図	辻ノ田1号墳出土鉄器実測図(1/2)	19
第19図	辻ノ田1号墳出土装身具実測図(1/2)	20
第20図	辻ノ田2号墳石室実測図(1/50)	21
第21図	辻ノ田2号墳石室内出土土器実測図①(1/3)	22
第22図	辻ノ田2号墳石室内出土土器実測図②(1/3)	折り込み
第23図	辻ノ田2号墳出土鉄器実測図(1/2、1/3)	25
第24図	辻ノ田2号墳出土装身具実測図(1/2)	25
第25図	辻ノ田3号墳現況測量図(1/100)	26
第26図	辻ノ田3号墳トレンチ内検出状況(1/100)	27
第27図	辻ノ田3号墳石室実測図(1/50)	28
第28図	辻ノ田3号墳石室内出土土器実測図(1/3)	折り込み
第29図	辻ノ田3号墳出土鉄器実測図(1/2)	30
第30図	辻ノ田3号墳出土装身具実測図(1/2)	30

表 目 次

第1表	辻ノ田1号墳出土ガラス製小玉計測表	20
-----	-------------------	----

図 版 目 次

図版1	井ノ浦古墳から北西を望む
図版2	調査区とその周辺
図版3	井ノ浦古墳全景(南から) 井ノ浦古墳石室全景
図版4	井ノ浦古墳石室(入口側から奥壁を望む) 同上(奥壁側から入口を望む)

- 図版5 井ノ浦古墳北側埋納土器出土状況
井ノ浦古墳南側埋納土器出土状況
- 図版6 井ノ浦古墳北側埋納土器
- 図版7 井ノ浦古墳南側埋納土器
- 図版8 井ノ浦古墳周溝内出土土器①
- 図版9 井ノ浦古墳周溝内出土土器②
井ノ浦古墳出土鉄器
- 図版10 辻ノ田1号墳調査前全景
辻ノ田1号墳から北西を望む
- 図版11 辻ノ田1号墳全景
辻ノ田1号墳石室全景（羨道側から）
- 図版12 辻ノ田1号墳石室全景（奥壁側から）
辻ノ田1号墳石室右袖部石組近景
- 図版13 辻ノ田1号墳入口部閉塞状況
辻ノ田1号墳閉塞部礫石除去状況（板状石露出）
- 図版14 辻ノ田1号墳閉塞部完全除去状況
辻ノ田1号墳玄室側から閉塞部を望む
- 図版15 辻ノ田1号墳封土除去状況
辻ノ田1号墳玄室内土器出土状況
- 図版16 辻ノ田1号墳左袖部土器出土状況
辻ノ田1号墳右袖部土器出土状況
- 図版17 辻ノ田1号墳封土内出土土器①
- 図版18 辻ノ田1号墳封土内出土土器②
辻ノ田1号墳墳丘上出土土器①
- 図版19 辻ノ田1号墳墳丘上出土土器②
- 図版20 辻ノ田1号墳石室内土器出土①
- 図版21 辻ノ田1号墳石室内土器出土②
- 図版22 辻ノ田1号墳出土鉄器
辻ノ田1号墳出土ガラス小玉
辻ノ田1号墳出土装身具
- 図版23 辻ノ田2号墳石室全景
辻ノ田2号墳土器出土状況
- 図版24 辻ノ田2号墳右袖部土器出土状況
辻ノ田2号墳太刀出土状況
- 図版25 辻ノ田2号墳出土土器①
- 図版26 辻ノ田2号墳出土土器②
- 図版27 辻ノ田2号墳出土土器③
- 図版28 辻ノ田2号墳出土土器④

- 図版29 辻ノ田2号墳出土土器⑤
- 図版30 辻ノ田2号墳出土鉄器
辻ノ田2号墳出土装身具
辻ノ田2号墳出土太刀
- 図版31 辻ノ田3号墳調査前近景
辻ノ田3号墳石室全景
- 図版32 辻ノ田3号墳奥壁
辻ノ田3号墳北トレンチ検出状況
- 図版33 辻ノ田3号墳西トレンチ検出状況
同上近景
- 図版34 辻ノ田3号墳東トレンチ検出状況
同上（上から）
- 図版35 辻ノ田3号墳土器出土状況（羨道部から）
同上（玄室から）
- 図版36 辻ノ田3号墳出土土器①
- 図版37 辻ノ田3号墳出土土器②
- 図版38 辻ノ田3号墳出土土器③
- 図版39 辻ノ田3号墳出土土器④
辻ノ田3号墳出土鉄器
辻ノ田3号墳出土装身具

I. 調査にいたる経過

1988年（昭和63年）3月に前原町（現前原市；以下同じ）国土利用計画の変更が決定され、国土利用計画の中にゴルフ場建設が位置づけられた。これによって、前原町大字富・多久・東・本地区でのゴルフ場及びレジャーランドの建設計画が具体化し、1989年（平成元年）に株式会社ソロンから埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受けて、当教育委員会とソロン及び施工を担当する株式会社佐藤工業は、対応についての協議を開始した。

その中で、まず現状を把握することが必要ということで、教育委員会による建設予定地内の踏査を実施することになり、1989年の秋に実施したところ、現地はみかん畑として大規模な造成がなされているものの、遺構の存在が予想される地点が27ヶ所に及ぶことが判明したため、それらについての試掘調査の開始を決定するとともに、できる限り現状保存をして調査範囲を狭くするため、残置森林などについての設計変更を教育委員会から申し入れた結果、18ヶ所について重機及び人力による試掘調査を行なうこととなった。なお、調査に要する費用はすべてソロンが負担することとして、契約締結後ただちに試掘調査に取りかかることとなった。

この試掘調査の結果、みかん畑の造成のため、原地形をとどめている範囲が予想以上に狭く、遺構の存在は極めて少なく、最終的に4基の古墳について本調査を実施し、その他は、事業の進捗状況にあわせて立ち会い調査を行なうこととなった。

それぞれの古墳の発掘調査の期間は、富井ノ浦古墳が1990年（平成2年）5月24日から7月24日まで、本辻ノ田1号墳が同年8月6日から10月10日まで、辻ノ田2号墳が同年10月11日から11月5日まで、辻ノ田3号墳が同年12月20日から翌年2月13日までである。

なお、今回の調査の組織は、次のとおりである。

調査主体 前原町教育委員会（現前原市教育委員会）

総 括 教育長 河原 吉美（1990年11月まで）
橋木 昭生（1990年12月から）

文化課長 加幡怡都城

文化財係長 吉村 耕二

庶 務 文化振興係長 中園 俊二

調 査 文化財係主事 林 覚

調査・整理作業員

青木敦子・青木輝代・青柳玲子・市丸千賀子・井上カツ子・井上ハルエ・
井上モモエ・川上久美子・小金丸利枝・柴田タツノ・谷山セツ子・
東司テルコ・中村照子・野村松枝・橋本仁志・原野スミ・平山富士子・
藤森啓子・本田タツ子・牧井定代・松崎和枝・三島久子・三島美也子・
八木やすの・柳原きみ子・山崎しなの



- | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|------------|------------|
| 1. 前原ゴルフ場建設地域 | 2. 有田古野遺跡 | 3. 原口遺跡 | 4. 上籬子遺跡 | 5. 多久口木古墳群 |
| 6. 奈良尾遺跡 | 7. 東真方古墳群 | 8. 長野宮前遺跡 | 9. 東二塚古墳 | 10. 長石二塚古墳 |
| 11. 一貴山銚子塚古墳 | 12. 釜塚古墳 | 13. 浦志遺跡 | 14. 志登支石墓群 | 15. 高上石町遺跡 |
| 16. 三雲南小路遺跡 | 17. 雷山神籠石 | 18. 本遺跡群 | 19. 東遺跡群 | 20. 荻浦遺跡群 |
| 21. 大浦遺跡群 | 22. 曾根遺跡群 | | | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

II. 位置と環境

井ノ浦古墳は前原市大字富字井ノ浦454番地に位置し、辻ノ田古墳群は前原市大字本字辻ノ田1069番地（1号墳）・996番地（2号墳）・995番地（3号墳）に位置している。前原ゴルフ場は、前原市域のほぼ中央に広がる丘陵の一部を利用して建設されており、その丘陵の東西には、それぞれ雷山川と長野川という、前原市の南に連なる脊振山系の内の雷山（海拔955m）に源を発する二つの河川が北流している。

今回調査した遺跡は、丘陵の中央部に近く、「平野部を広々と見下ろす尾根上に作られた古墳」といった趣はない。

この丘陵には中央に東西に走る谷部があって、ゴルフ場は南側部分に建設されているが、北側には国道202号今宿バイパス（福岡前原道路）が走っており、その建設にともなう調査によって、鍛冶関連遺構や火葬土壌が確認された奈良尾遺跡や小型倣製鏡が出土した真方古墳群などの存在が明らかとなった（註1）。また、これらの他、古墳時代の集落跡が確認された上罐子遺跡（註2）もこの沿線にあまっている。

西側を流れる長野川の流域には、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や弥生時代終末期の方形周溝墓が発見された東遺跡群（註3）や、銅製鋤先が出土した弥生時代後期の大溝が確認された本遺跡群（註4）、さらに上流域の標高約35mの地点には弥生時代早期の支石墓が確認された長野宮ノ前遺跡（註5）を含む長野・飯原遺跡群などが存在している。また、中・下流域の丘陵上には、東二塚古墳、一貴山銚子塚古墳、釜塚古墳（註6）などの古墳の他、小規模な古墳群が点在している。さらに、長野川の源流地域である雷山の中腹、標高約400mのところには、7世紀に築造されたと考えられる朝鮮式山城である雷山神籠石の列石群や水門が残っている。

北側には、長野川の支流である多久川が流れる谷をはさんで、標高約70mの独立丘陵があり、そこには、大浦遺跡群・荻浦遺跡群が存在し、弥生時代から歴史時代にかけての住居跡や古墳群が確認されている（註7）。その丘陵の北麓に接する形で前原の市街地が広がっており、さらにその前面には「糸島水道」の伝承のある低地帯がつづいている。

東方に目をやると、雷山川をはさんで、通称「曾根丘陵」があり、そこには、平原遺跡をはじめとする国指定史跡「曾根遺跡群」（註8）がある。

註1. 中間研志編「奈良尾遺跡」（今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 第13集 福岡県教育委員会 1991年）

角 浩行「今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ」（前原市文化財調査報告書 第39・42・47・48集 1992年～1993年）

註2. 川村 博「上罐子遺跡」（前原町文化財調査報告書 第3集 19年）

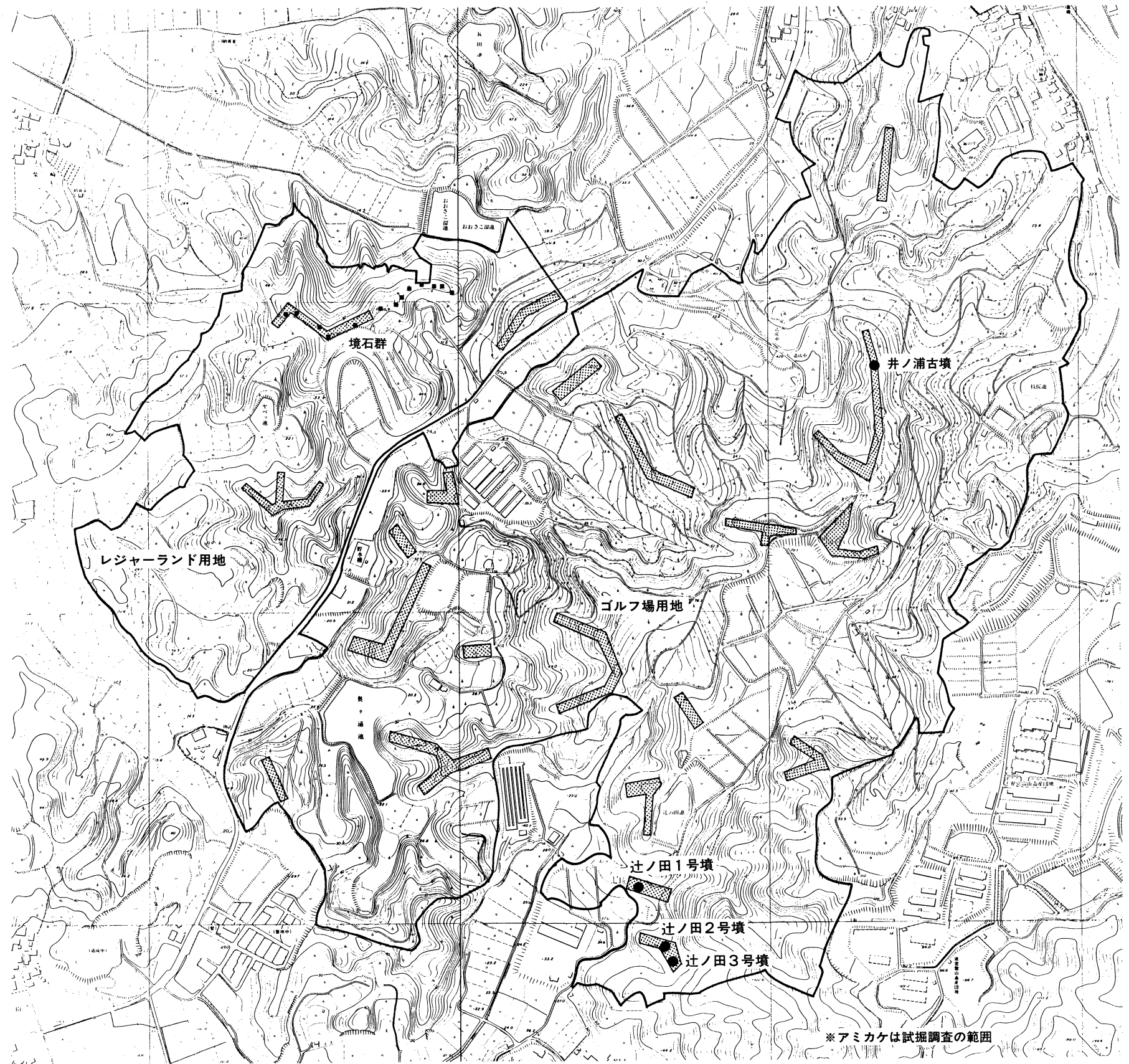
註3. 岡部裕俊「長野川流域の遺跡群Ⅱ」（前原町文化財調査報告書 第33集 1990年）

註4. 角 浩行「本田孝田遺跡・東スス町遺跡」（前原市文化財調査報告書 第49集 1993年）

註5. 岡部裕俊「長野川流域の遺跡群Ⅰ」（前原町文化財調査報告書 第31集 1989年）

註6. 石山 勲「釜塚」（前原町文化財調査報告書 第4集 1981年）

註7. 川村 博「大浦遺跡群発掘調査概報」（前原町文化財調査報告書 第26集 1987年）



第2図 開発の範囲と調査地点 (1/7,500)

岡部裕俊「荻浦の文化財」(前原町教育委員会 1992年)

註8. 林 覚編「曾根遺跡群」(前原町文化財調査報告書 第7集 1982年)

鍋島さとみ編「曾根遺跡群Ⅲ」(前原町文化財調査報告書 第14集 1984年)

林 覚編「曾根遺跡群Ⅳ」(前原町文化財調査報告書 第27集 1988年)

林 覚「高上石町遺跡」(前原市文化財調査報告書 第44集 1993年)

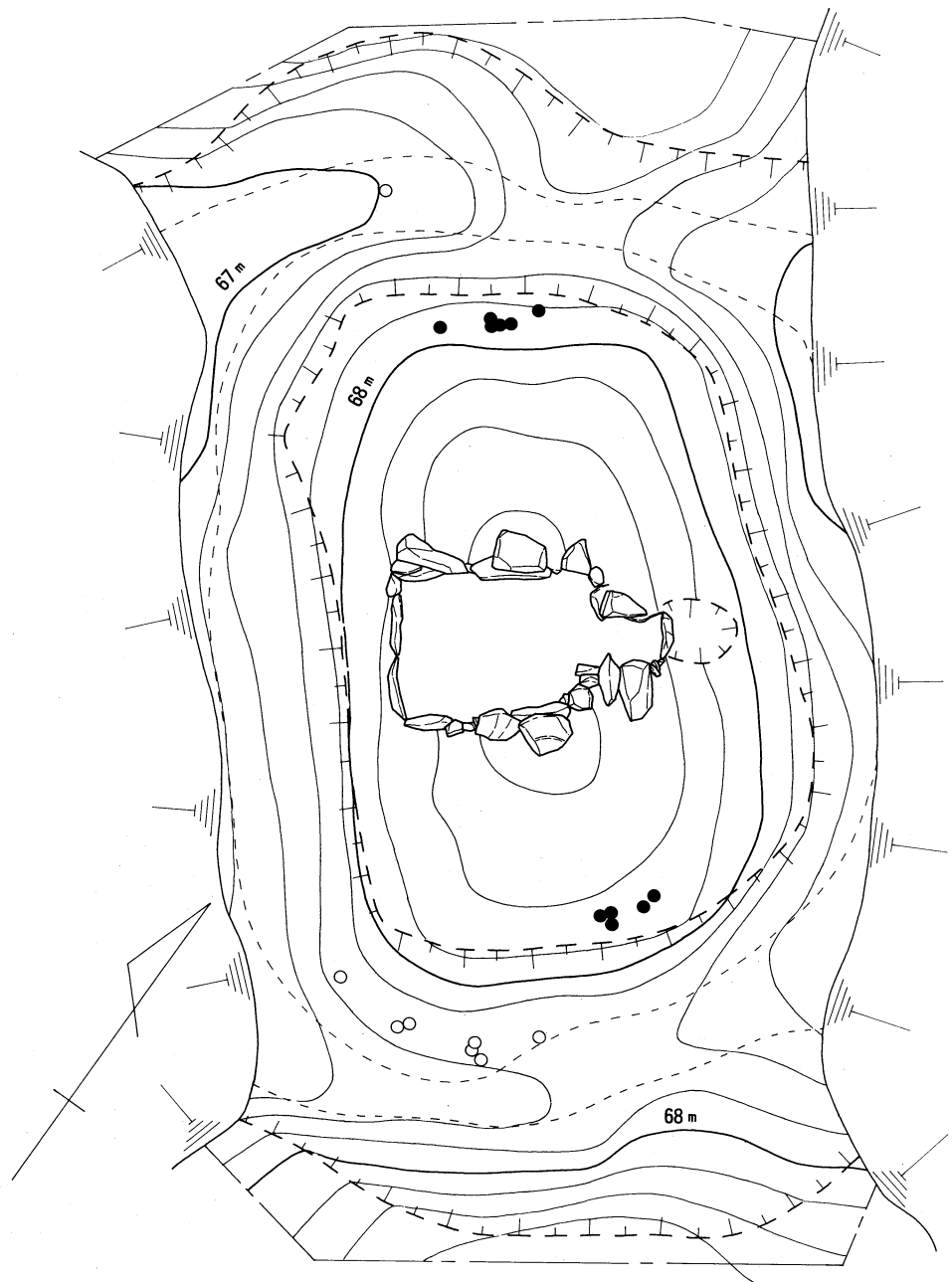
岡部裕俊・角 浩行「平原周辺遺跡(1)~(4)」(前原市文化財調査報告書 第34・36・43・50集 1990年~1993年)

Ⅲ. 調査の記録

1. 概要

先述のとおり、ゴルフ場建設用地はその大半がみかん畑として造成されており、その中でも尾根部分を中心に原地形が残っているのではないかとされる18地点について試掘調査を行なったが、予想を上回る規模で造成が行なわれており、最終的には井ノ浦古墳・辻ノ田1号墳・辻ノ田2号墳・辻ノ田3号墳の4基の古墳を確認するにとどまり、この4基について本調査を実施することとした。

また、この他の地点については造成工事に立ち会う



第3図 井ノ浦古墳地形測量図(1/100)

形で調査を実施したが、遺構や遺物を検出することはできなかった。

なお、井ノ浦古墳と辻ノ田1・2号墳は工事の過程において破壊せざるを得なかったが、辻ノ田3号墳は残置森林の境界にかかっていたため若干の設計変更によって現状のまま保存されることとなった。

2. 井ノ浦古墳の調査

(1) 立地と現況 (第2・3図 図版1・2)

井ノ浦古墳は、標高94mの峰から北に伸びた尾根の先端部近く、標高69mの地点に位置しているが、古墳が存在するのではないかと考えられた峰の部分を含めてこの尾根上には遺構は確認できなかった。同じ峰からは北西にも尾根が伸びているが、そこにも遺構は確認されなかった。また、古墳は尾根の最先端に築かれていると判断して調査にのぞみ、現に予想された地点に石の露頭が見られたので、2基の古墳が存在するのではないかと当初は考えていた。しかし、先端部の石の露頭は自然のものであることが明かとなり、古墳は1基だけ、しかも本来は先端部に築造すべきところを、自然石の露頭のためそれを避ける形で選地されていることがわかった。また、この尾根も、例にもれず造成によって削られていて、両側面は崖状を呈している。

側壁に使用された石材の一部が露出していた古墳であるが、天井石を含めて石室の上半は失われており、同様に封土も下半を残すのみであった。

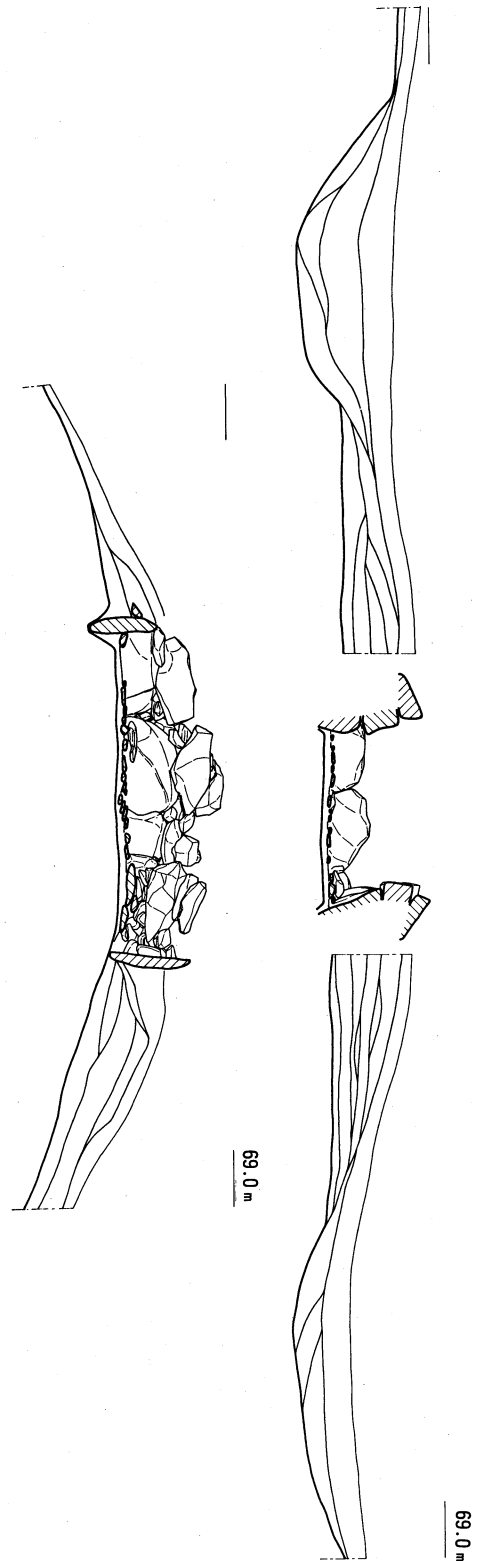
(2) 墳丘 (第3・4図 図版3)

尾根の両側面が削られているため、現状では方墳のように見えるが、実際は径約10.5mの円墳であったと考えられる。

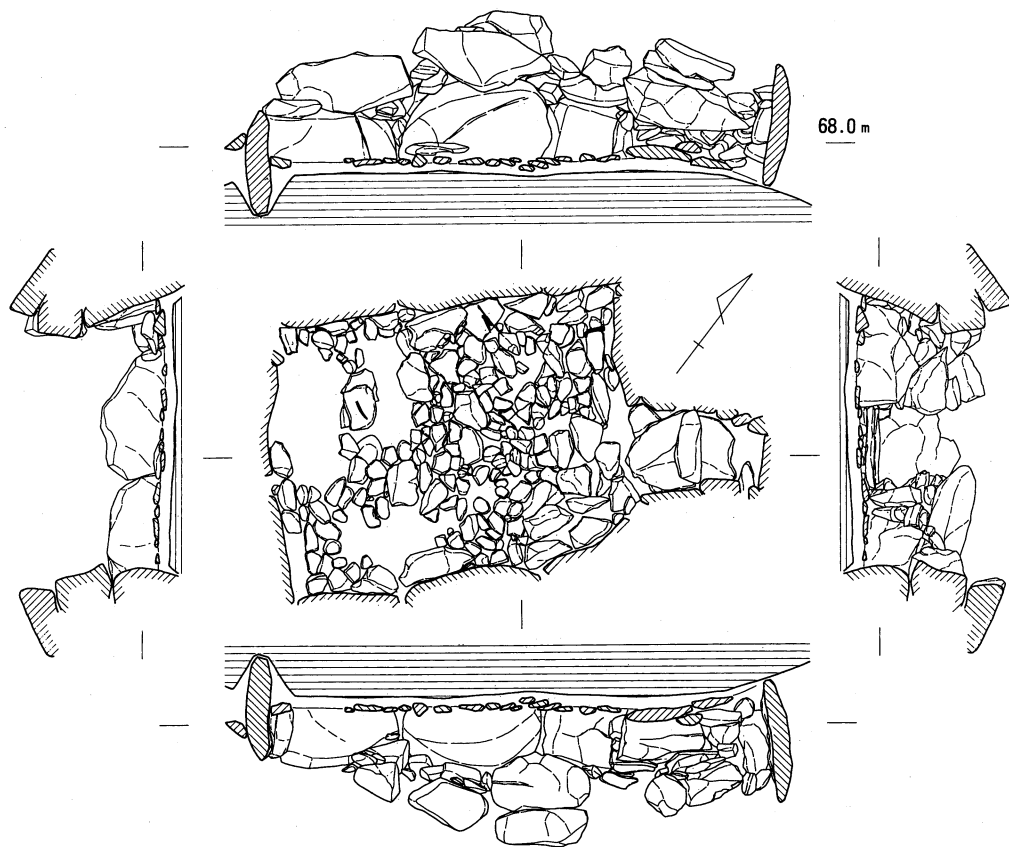
築造にあたって、尾根を横断するように2ヶ所で切断して南北の周溝とし、その際生じた土砂によって墳丘を築いたと見られるが、先述のとおり既に上半は失われており、残存しているのは石室に近い部分で地山から90cmたらずであった。

周溝は、北側が幅約3.3m・深さ約0.4m、南側が幅約3.3m・深さ約0.8mを測る。また、墳丘部の地山は、南北方向ではほぼ水平に整形が施されているが、東西方向(尾根を横断する方向)にはその整形は石室部分のみのようである。

封土の土層には、版築のようなものは見られないが、地山から0.25~0.3mの高さのところに土層の不整合面が見られ、少なくとも二度に別けて墳丘が築かれている。



第4図 井ノ浦古墳土層断面図(1/80)



第5図 井ノ浦古墳石室実測図(1/50)

(3) 石室(第5図 図版3・4)

北東に開口する、単室・片袖の横穴式石室である。上部の大半が失われており、ほとんど腰石部分のみが残存しているという状態であった。

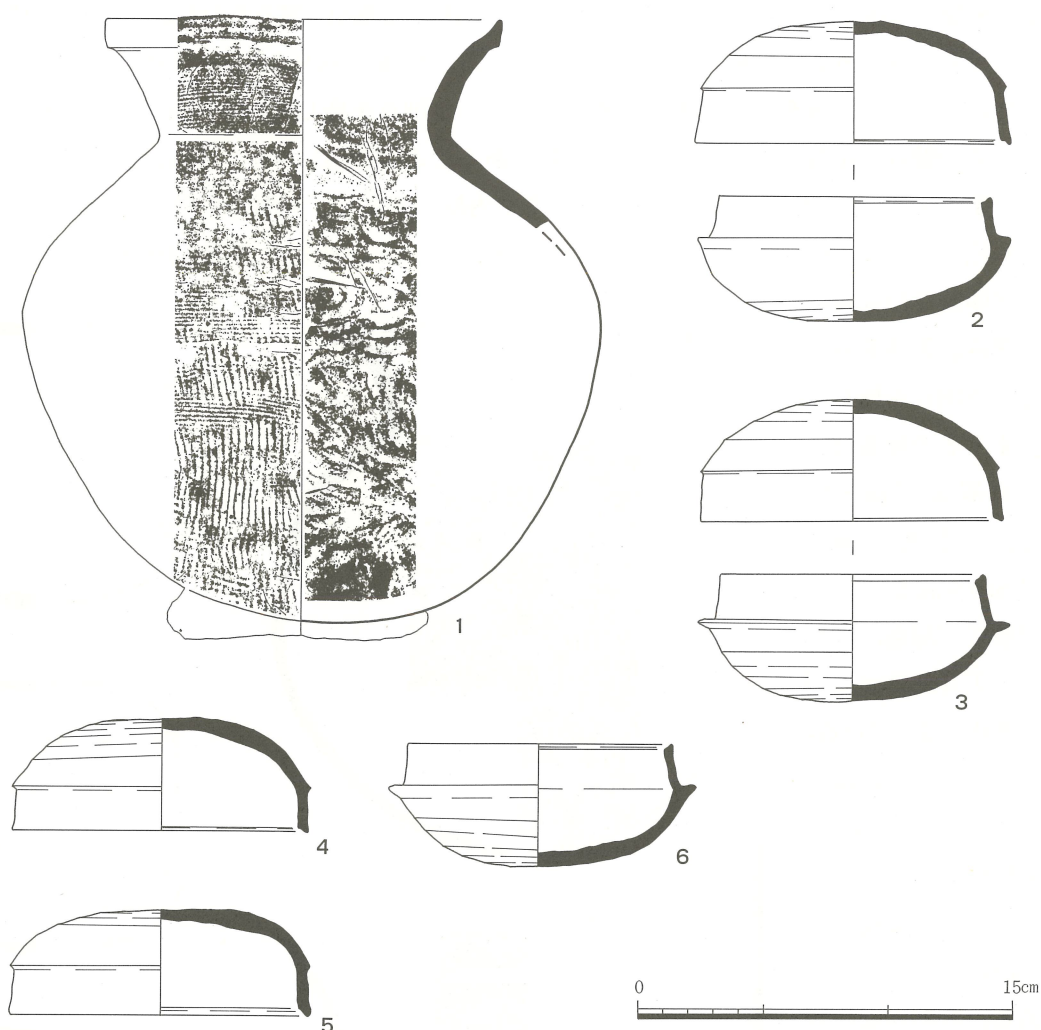
玄室はほぼ長方形を呈し、床面での規模は、長さは右側壁長2.38m・左側壁長2.36m、幅は奥壁側1.91m・玄門側1.61m、玄門幅0.62m、羨道部長(閉塞石まで)0.96mを測る。

羨道部については、閉塞石の外側には壁状の石組は見られず、入口部の土層断面から見てもこれ以上の羨道部はなかったと考えられ、「横口式」の石室といえることができる。

奥壁の腰石には2枚の板状の石を使い、両側壁は3個ずつの石を使って腰石としていて、いずれも床面からほぼ0.4mの高さにそろえている。

玄室の床面は、地山の上に8cmほど粘土を敷いて整地し、その上に10~40cmの大きさの板状の石を敷き詰めているが、大小の石が入り混じっており、玄門付近に大きな石が使われているという印象以外、そこには規則性は見出せない。羨道部の床面には、大き目の板状の石を2枚使い、その隙間を埋めるように細長い石を置いていて、玄室の床面とは明かに区別されている。玄室の床面には盗掘によると思われる敷石の欠けた部分が見られる。

入口部の閉塞には、高さ0.85m・幅0.64m・厚さ0.13mの石を1枚だけ使っており、この石の両端を羨道部側壁に立て掛けて、外側から土砂によって固定していたと考えられる。



第6図 井ノ浦古墳墳丘北側埋納土器実測図(1/3)

(4) 出土遺物

土器は、周溝内から出土したもの(第3図に○印で図示)と墳丘に埋納された状態で出土したもの(同じく●印で図示)がある。

石室内からは、鉄器のみが出土し、土器は出土しなかった。出土した鉄器は、鉄族4・鉄鎌1・刀子2であった。

墳丘北側埋納土器(第6図 図版5・6)

墳丘の北側に埋納された状態で出土した土器は、すべて須恵器であった。

1は、器高24.2cm・口径15.7cm・胴部最大径23.0cmを測る壺形土器である。暗緑色の自然釉が大量に生じており、外面では頸部のから胴部上半にかけて一部は下半にまで流れ、内面では頸部と胴部下半に見られる。頸部外面にカキ目を施し、胴部外面上半は縦方向の平行叩きの後器体を一周する横方向のカキ目を間隔を開けて施し、胴部外面下半も平行叩きを施すが上半ほど方向は一定しておらず所々に短いカキ目が見られる。内面は、頸部はナデ、胴部に見られる同心円状の当て具痕は上半では明瞭であるが下半では軽くナデ消されている。底部外面には、焼成の時に生じた粘土の癒着が見られる。2の杯身と杯蓋は、蓋をした状態ではないがどちらも上向きに蓋を下にして重なって出土したもので、そのサイズや調整からして対であることは間違いない。杯身は器高5.0cm・口

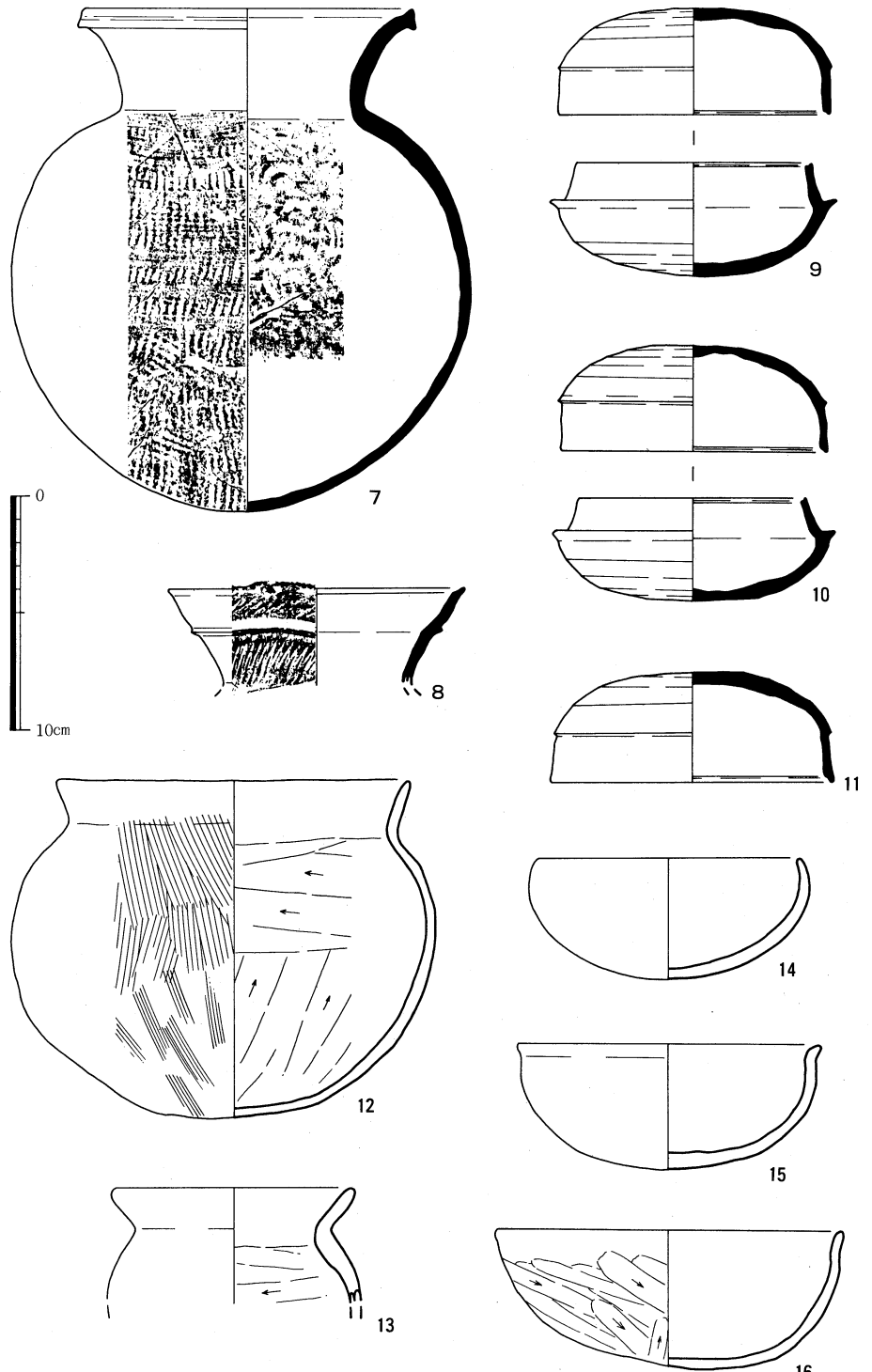
径10.8cm・受け部径12.5cmを測る。立ち上がりはやや内傾して端部に窪みを有し、受け部はややシャープさに欠ける。底部外面に回転ヘラ削りを施している。杯蓋は器高4.9cm・口径12.6cmを測る。稜は明瞭で口縁端部に窪みを有し、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。3の杯身と杯蓋も、他の土器とやや離れて重なって出土しており、対であることは間違いない。杯身は器高5.1cm・口径10.5cm・受け部径12.5cmを測る。立ち上がりはやや内傾して長く、端部はやや窪み、受け部はシャープに張り出している。底部外面に回転ヘラ削りを施している。杯蓋は器高4.9cm・口径12.0cmを測る。稜は明瞭で口縁端部はやや窪み、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。4・5の杯蓋は、それぞれ器高4.5cm・口径11.6cm、器高4.2cm・口径11.8cmを測る。共に、稜は明瞭で口縁端部はやや窪み、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。6の杯身は、器高4.9cm・口径10.5cm・受け部径12.2cmを測る。立ち上がりはやや内傾して端部は僅かに窪み、受け部もシャープである。底部外面に回転ヘラ削りを施している。

墳丘南側埋納土器

(第7図 図版5・7)

墳丘の南側に埋納された状態で出土したのは、須恵器(第7図7~11)と土師器(同12~16)であった。ただし、8は他の土器とは離れて出土しており、同様に埋納土器とするには、やや問題がある。

7は、器高21.7cm・口径13.8cm・胴部最大径19.6cmを測る壺形土器で



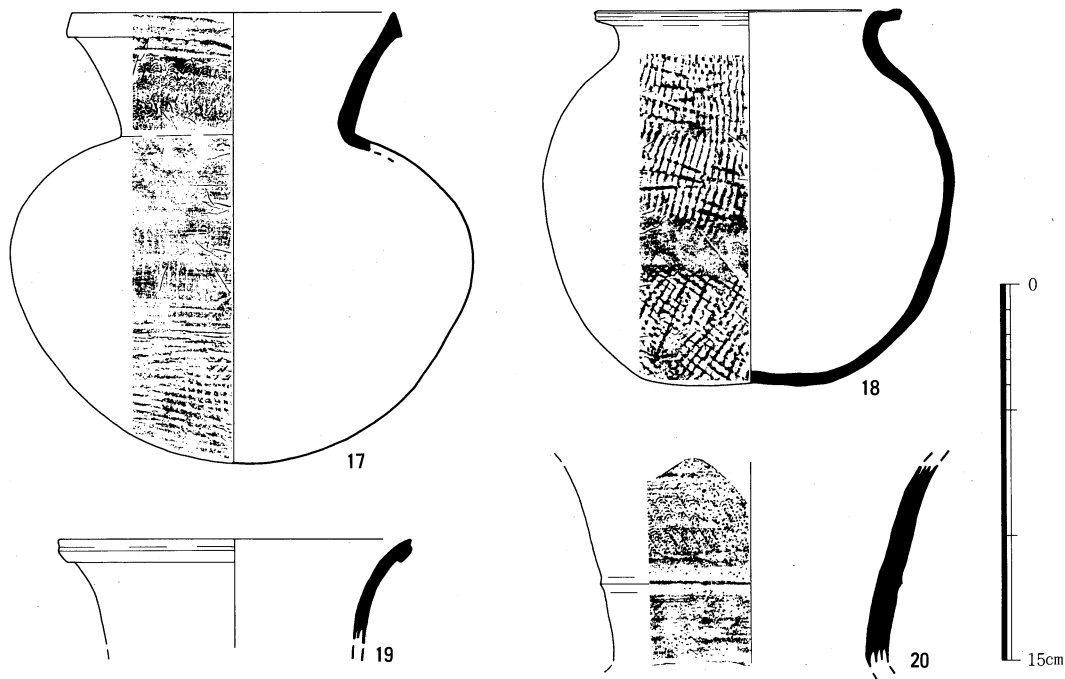
第7図 井ノ浦古墳墳丘南側埋納土器実測図(1/3)

ある。球に近い胴部に緩やかに外反する頸部を有し、口縁端部は肥厚させ外側に沈線に近い窪みが見られる。胴部外面上半は縦方向の平行叩きの後間隔を開けて横方向にナデ消し、胴部外面下半は不定方向の平行叩きを施している。胴部内面上半には同心円状の当て具痕が見られるが、下半のそれは丁寧にナデ消されている。8は、長頸壺か甗の頸部と見られ、復元口径12.6cmを測る。口縁端部に弱い窪みが見られ、中位やや上方に三角突帯を巡らして区画し、上下に波状文を施しており、一部に自然釉が生じている。9・10はいずれも蓋をした状態で出土した。9の杯身は、器高5.0cm・口径9.9cm・受け部径12.2cmを測る。立ち上がりはやや内傾して端部は窪み、造りはシャープで、底部外面に回転ヘラ削りを施している。杯蓋は、器高4.6cm・口径11.5cmを測る。稜は明瞭で、口縁端部は窪み、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。10の杯身は、器高4.4cm・口径9.6cm・受け部径12.0cmを測る。立ち上がりはやや内傾して端部は窪み、造りはシャープで、底部外面に回転ヘラ削りを施している。杯蓋は、器高4.5cm・口径11.3cmを測る。稜は明瞭で、口縁端部は窪み、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。11の杯蓋は、器高4.7cm・口径11.9cmを測る。稜は明瞭で、口縁端部は窪み、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。12の広口壺は、器高14.5cm・口径15.0cm・胴部最大径18.0cmを測る。胴部外面にハケ目を施した後下半はナデ消し、内面にはケズリを施している。13は小型の壺の上半のみであるが、復元口径10.3cmを測る。頸部及び外面はナデで仕上げ、内面はケズリを施している。14~16は、椀である。14は、器高5.1cm・口径11.1cmを測り、口縁部は内湾し、内外面ともにナデで仕上げている。15は、器高5.4cm・口径12.9cmを測り、口縁端部は強く外反し、内外面ともに丁寧なナデで仕上げている。16は、器高6.0cm・口径14.8cmを測り、口縁部は僅かに外反し、口縁部から内面はナデで仕上げ、外面にはケズリを施している。

周溝内出土土器 (第8・9図 図版8・9)

17の壺形土器のみ北側周溝内から出土し、他はすべて南側周溝内からの出土である。

17は、器高18.0cm・口径12.8cm・胴部最大径18.4cmを測る。頸部は外反し、肥厚させた口縁端部



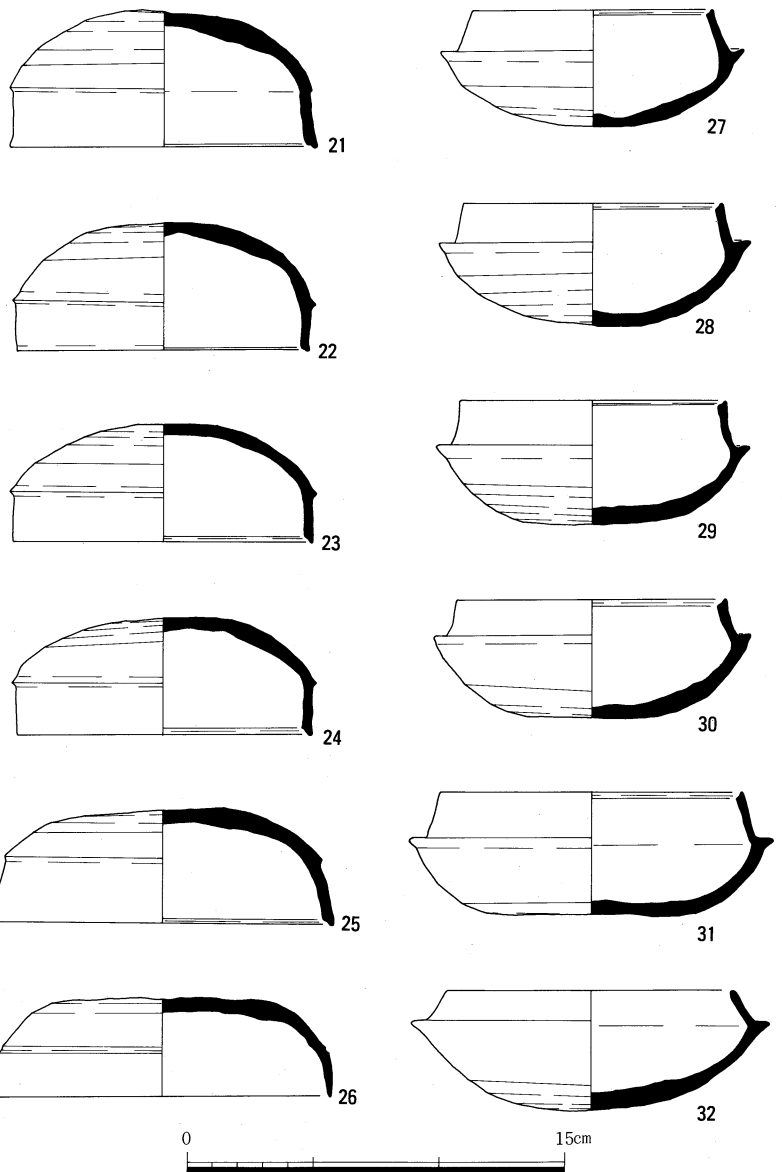
第8図 井ノ浦古墳周溝内出土土器実測図 (1/3)

はシャープで、頸部外面には波状文を施している。体部外面は、上半は縦方向の叩きの後横ナデを施し、下半は平行叩きを残している。内面は、当て具痕をナデ消している。18の短頸壺は、器高15.0cm・口径12.2cm・胴部最大径16.3cmを測る。大きく外反する口縁端部の上面はやや窪んだ平坦面を呈し、外面にも窪みが見られる。胴部外面には叩き目が見られるが、胴部中位やや下方の横ナデをはさんで、上はいわゆる鳥足状の叩き目を施し、下は格子状の叩き目を施している。内面は丁寧にナデで仕上げている。19は、口縁部の小片で、復元口径13.9cmを測る。20は、長頸広口壺の頸部の破片で、中位やや下方に小さな三角突帯を付し、その上方に二段の波状文を施している。内外面ともに暗緑色の自然釉が生じている。周溝内から出土した杯蓋は3タイプに大別できる。21~24は、器高4.7~5.7cm・口径11.5~12.1cm測り、造りはシャープで天井部外面に回転ヘラ削りを施している。25は、稜は残るものの前者に比べるとややシャープさに欠け、体部は外反して径も大きくなっている。天井部外面は回転ヘラ削りを施している。26は、稜は無くなって小さな沈線を施し、径も大きい。天井部外面の回転ヘラ削りも部分的で、頂部には見られない。杯身も、杯蓋と同様に3タイプに大別することができる。

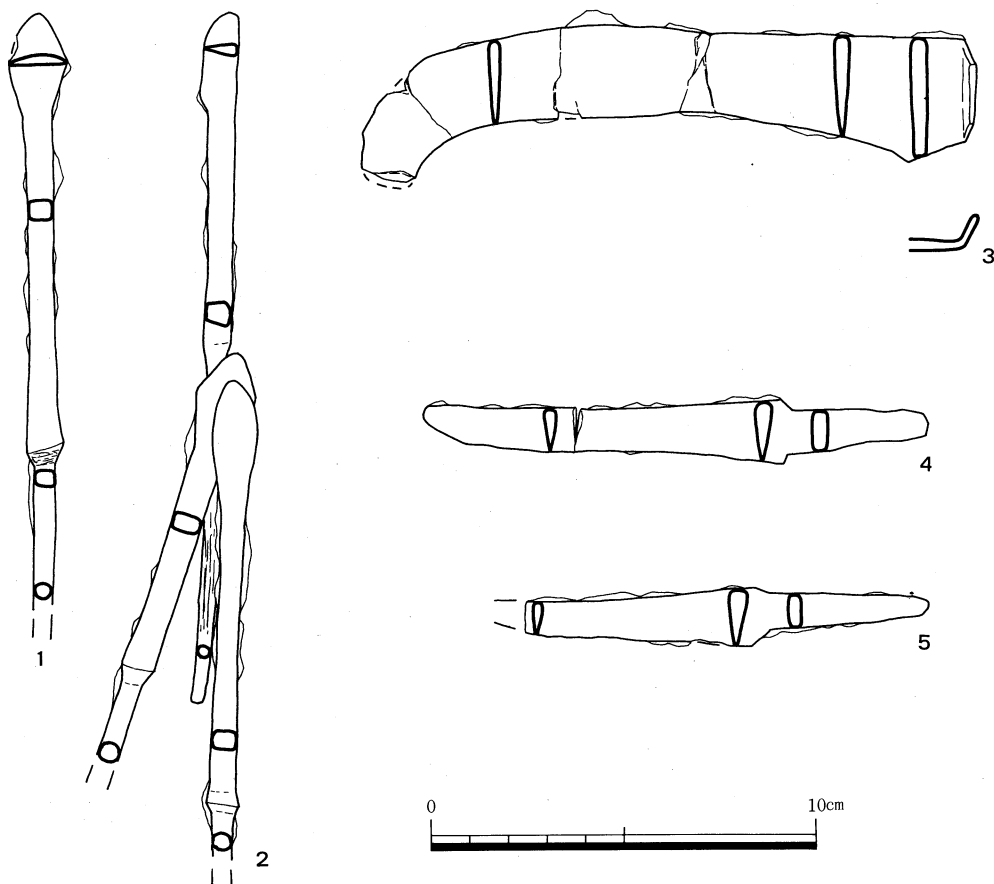
27~30は、器高4.6~4.9cm・口径9.5~10.6cm・受け部径12.0~12.5cmを測り、造りはシャープで、底部外面に回転ヘラ削りを施している。31は、シャープさは保っているものの、径が大きくなっている。底部外面は回転ヘラ削りを施している。32は、立ち上がりの内傾の度合いが強くなり、端部のシャープさも失われて、且つ大型である。底部外面は回転ヘラ削りを施している。

鉄器 (第10図 図版9)

1・2は鎌で、2は錆によって癒着しており、破壊を最小限にとどめるためそのまま図示した。1は茎が中途から失われているが、尖根式で、錆が激しく先端部分の形状がやや不確実ながら片丸式のようなものである。長い篋被の茎との境の部分にわずかに木質が残っている。2も尖根式で、片刃式のものだが完形で全長18.1cmを測る。この鎌の茎にも木質が残っている。3は鎌で、先端部をわずかに欠き、



第9図 井ノ浦古墳周溝内出土土器実測図② (1/3)



第10図 井ノ浦古墳出土鉄器実測図(1/2)

基部は折り曲げている。4・5は刀子である。4は折れているが完形に復元でき、全長13.1cm・刃部長9.4cm・関部幅1.8cmを測る。

3. 辻ノ田1号墳の調査

(1) 立地と現況(第11図 図版10)

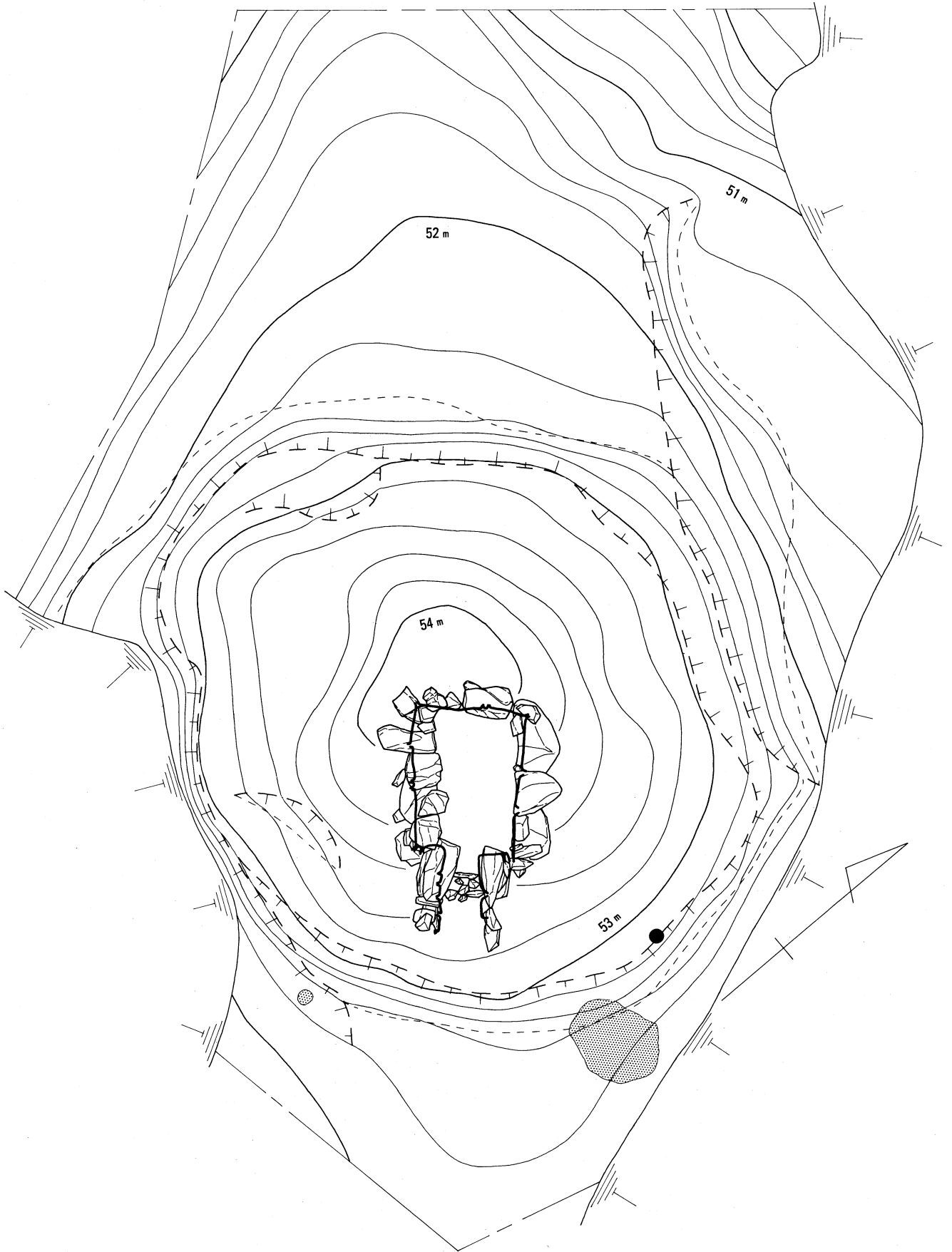
辻ノ田1号墳は、丘陵端部から北西方向に小さく延びた標高約54mの尾根上に位置する。この尾根も墳丘を挟んで両側が大きく削られていて、それは封土にも及び封土内に埋納されたと考えられる須恵器片が露出していた。また、墳丘上部も大きく削られ、石室の壁の上部が露出し、天井石に使われたと思われる扁平な大石が玄室内に落下した状態であった。

(2) 墳丘(第12図 図版10・11)

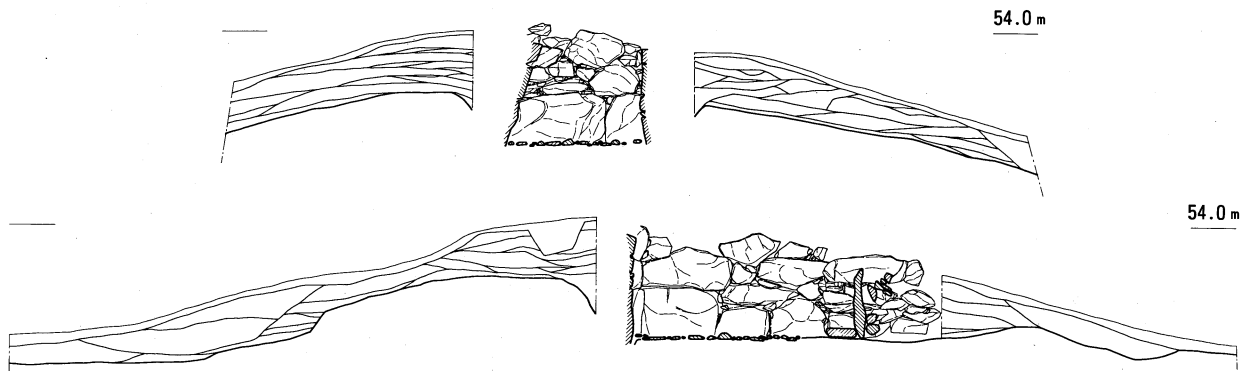
尾根が削られたときに墳丘にも影響が及んでやや歪ではあるが、主軸方向には原地形が比較的良く残っており、断面での地山及び封土の観察によって、直径約12.6mの円墳であったことがわかる。

先述のとおり、墳丘の上半は失われており、封土が残っているのは地山から約80cmであった。

築造にあたって、地山を石室床面まで約90cm掘り下げ、羨道床面までほぼ水平に整形して石室を築いている。墳裾部分も、地山整形の後盛土によって墳丘を形づくっているが、主軸方向では地山を大きく削っているのに対し、それに直行する方向では尾根の形をほぼそのまま使っている。土層の断面はかなり細分化することができ、黒色土・暗褐色土・明褐色土が互層をなしていて、さほど緻



第11图 辻ノ田1号墳地形測量図(1/100)



第12図 辻ノ田1号墳土層断面図 (1/100)

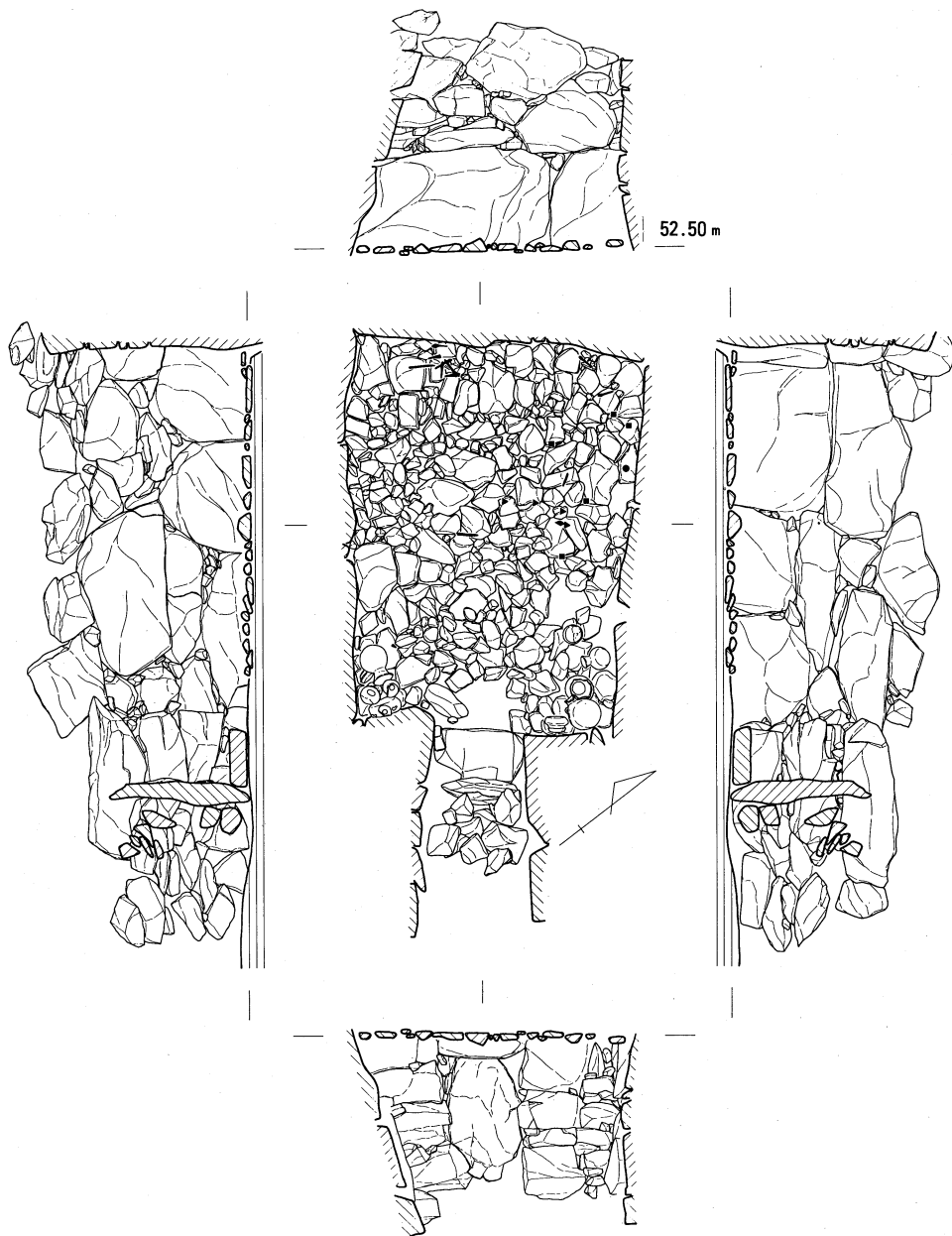
密ではないが版築を行なっている。

(3) 石室 (第
13図 図版11・
12・13・14・15)

南東に開口する
単室両袖の横穴式
石室である。天井
部上を含む石室上
部を失っており、
玄室各壁は現況で
は床面から約1.4
mの高さまでが遺
存している。

玄室はほぼ長方
形を呈し、床面で
の規模は、長さは
右側壁長2.51m・
左側壁長2.60m、
幅は奥壁側1.94m
・玄門側1.71m、
羨道部長 (左側壁残
存部) 1.49mを測
る。

奥壁の腰石には、
床面からの高さを
約0.7mにそろえ
た2枚の大石を使
い、その上に幅80



第13図 辻ノ田1号墳石室実測図 (1/50)

cm～40cm・高さ50～20cmの石材を積み重ねて壁面を形づくっている。側壁も基本的には奥壁と同様の構造であるが、奥壁に向かって左側壁よりも右側壁のほうが使われた石材の大きさがそろっており、そのせいか壁面の傾きが左側壁のほうが大きくなっている。この他、玄室の壁面で目につくのは、右側壁と袖部が作るコーナー部分の石組みで、両方に持ち送らせて丁寧な石組みがなされていて、この様な構造は左側には見られない。壁面の石組みも含めて、左側よりも右側のほうが丁寧に作られているという印象を受ける。

玄室の床面には大小の比較的偏平な石を敷いているが、明かに床面を区画したような状態ではないが、強いていえば、奥壁と右側壁にそった所に比較的大きな石を使っているといった程度である。

羨道部側壁は、玄門部で左右とも高さ30cm・長さ80cm前後の石を3段に積んでその外側の壁には30～40cmの石を使っている。玄門部の3段目の石は、下の2段に比べやや長めのものが使われており、閉塞石の高さからしても、この上に羨道部の天井が架されていたと考えられる。

羨道部の床面は、玄門部に60cm×40cm×12cmの板石を置き、そのすぐ外側に閉塞石が立てられている。

入口部の閉塞には、高さ0.95m・幅0.51m・厚さ0.16mの板石を使い、その外側を礫石が支えているが、礫石は上部に集中しており、閉塞は主に土砂によって行ない、礫石を補助的に使用している。

(4) 出土遺物

土器は、封土内(第11図に●印で図示)・石室入口側の墳丘上(同じくアミカケ)・石室内から出土した。

また、石室内からは、土器のほか、鉄器類や装身具が出土した。

封土内出土土器(第14・15図 図版17・18)

土器は、墳丘東側の墳裾に近いところの、削られて生じた崖面に露出した状態で発見された。出土したのは、いずれも須恵器で、頸部の付け根に4個の取っ手を有する大型の横瓶と、甕形土器である。

両者は、それぞれの破片が折り重なるように出土したが、いずれも完形であったものが土中で破壊されたものではなく、最初から破片の状態で見つかったものである。

封土内に埋納される土器は、蓋杯を中心とする小型のしかも完形のもので一般的であるが、その意味では、今回の大型で破片の状態というのは特異といえる。しかし、集中的に出土していることからして、偶然に埋土に混入したのではなく、意識的に埋納されていることは明かであり、意味するものは他の例と同様であると考えられる。

1は、器高48.9cm・口径16.1cm・胴部長径(復元)63.2cm・胴部短径(復元)43.4cmを測る。頸部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚させ直下に一条の三角突帯をめぐらせて断面が「M字」状をなし、やや角ばっている。頸部の付け根には、頸部を取り囲むように同一方向に(長径の軸に平行に)4個の取っ手を配している。胴部は卵形を呈している。胴部外面には横方向の叩きの後縦方向にカキ目を施しているが、そのカキ目は、胴部の大きく膨らんだ側にはほぼ全体に見られるが、しぼんだ側には端に近いところに間隔をあけて施されており、横方向の叩き目のみの部分も見られる。胴部内面は、ほぼ全体に同心円状の当て具痕が残っている。表面には暗緑色の自然釉が生じており、大量に生じたところでは胴部の膨らんだ側へ流れていて、この土器が



第14图 辻ノ田1号墳封土内出土土器 (1/3)

焼成時には膨らんだ側を下にして置かれていたことがわかる。また、自然釉によるものと考えられる他の土器の癒着も見られ、同心円状の当て具痕のある径7cmほどの破片などがある。2は、器高40.3cm・口径19.5cm・胴部最大径34.7cmを測る。口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部下方には小さな三角突帯を付して、シャープさにやや欠ける。胴部外面には全体に縦方向の平行叩きを施し、内面は全体に同心円状の当て具痕が見られる。

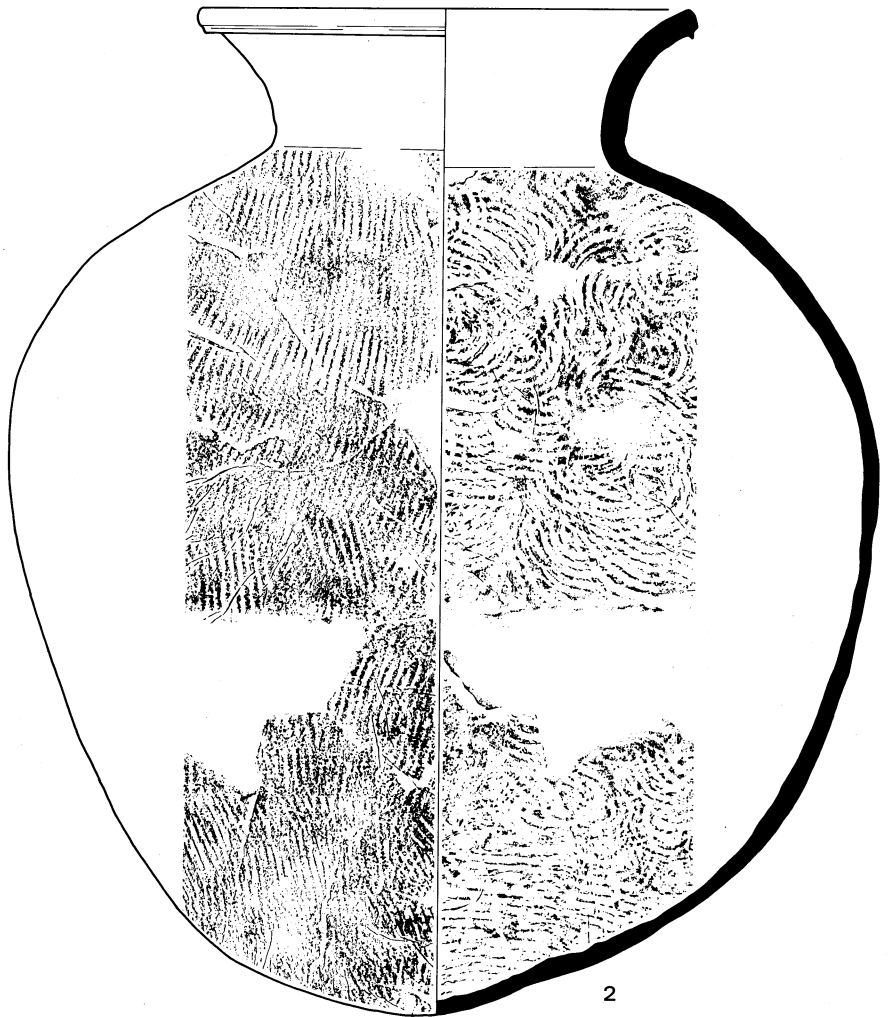
墳丘上出土土器(第16図 図版18・19)

封土内出土の土器に対して、墳丘上出土と

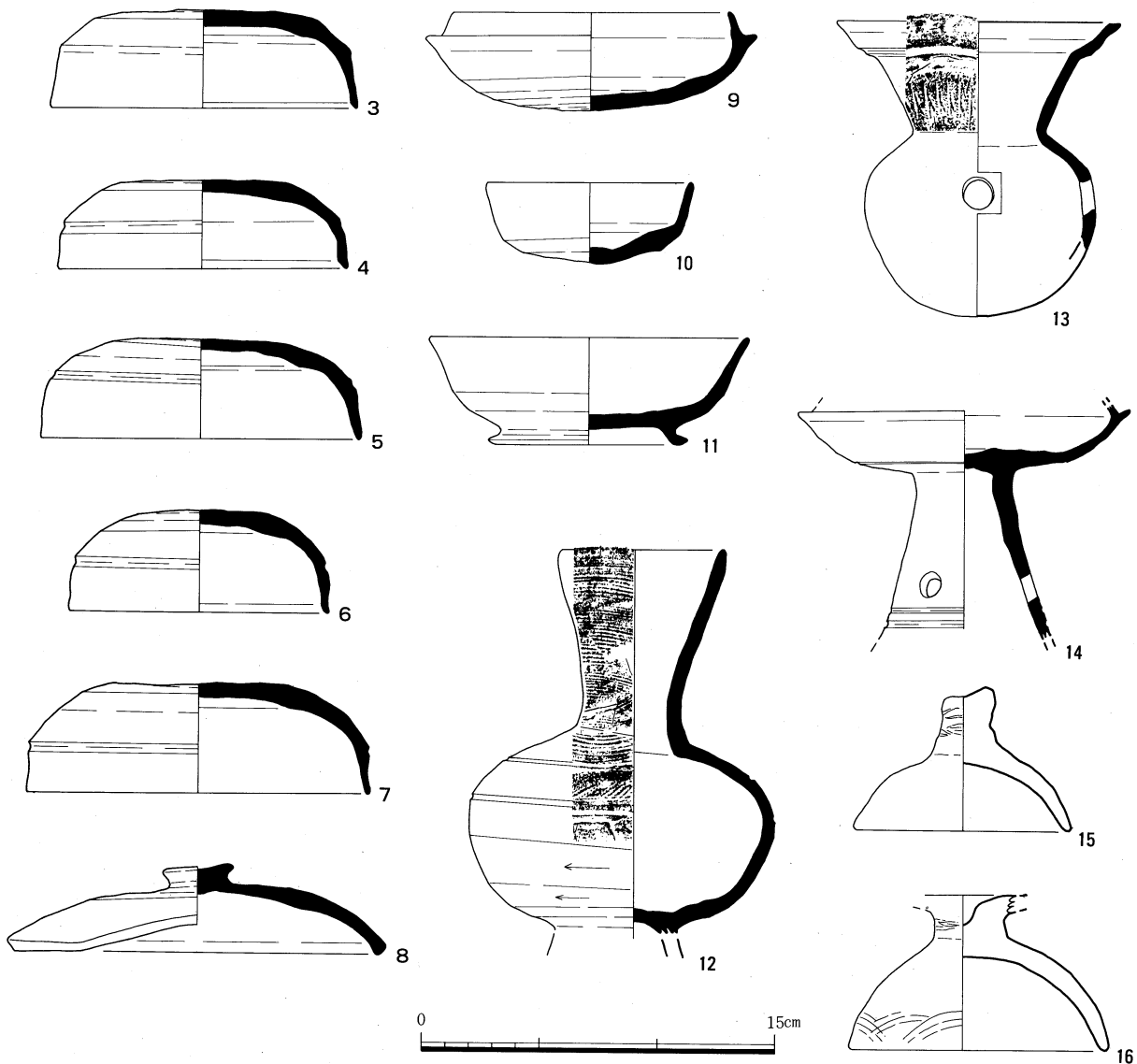
したが、出土した位置は墳裾の部分からである。石室の入口を挟むような形で出土したが(第11図のアミカケ部分)、東側の一群のほうが圧倒的にその量は多く、西側から出土したのは図示したものうち6・7・9の三点のみである。

3～8は、杯蓋で、8はつまみを有するもので、他は天井部と体部の明瞭な稜が失われて境の部分に沈線がめぐるものである。3～7は、いずれも天井部外面にヘラ削りを施している。3は、器高4.2cm・口径(復元)13.0cmを測る。稜の部分にやや角ばった感じが残り、沈線も浅い。4は、器高(復元)3.8cm・口径(復元)12.2cmを測る。5は、器高4.3cm・口径13.5cmを測る。赤褐色を呈しているが、いわゆる「赤焼き」とは異なり、土師器と同じ焼き上がりとなっている。6は、器高4.4cm・口径10.9cmを測る。他に比べて口径が小さいこともあって、天井がやや高く、丸みをおびている。7は、器高4.6cm・口径14.4cmを測る。8は、器高3.8cm・径16.1cmを測る。中央が窪んだ扁平なつまみを有し、天井部外面にヘラ削りを施している。器体の歪みが著しい。

9～11は、杯身である。9は、器高4.2cm・口径11.7cm・受け部径14.0cmを測る。立ち上がりは短く、内傾し、口縁端部は丸く仕上げられている。底部外面にはヘラ削りを施している。10は、器高3.5cm・口径8.7cmを測る。仕上げはやや雑で、高杯の杯部の様な印象を受けるが脚の痕跡は見ら



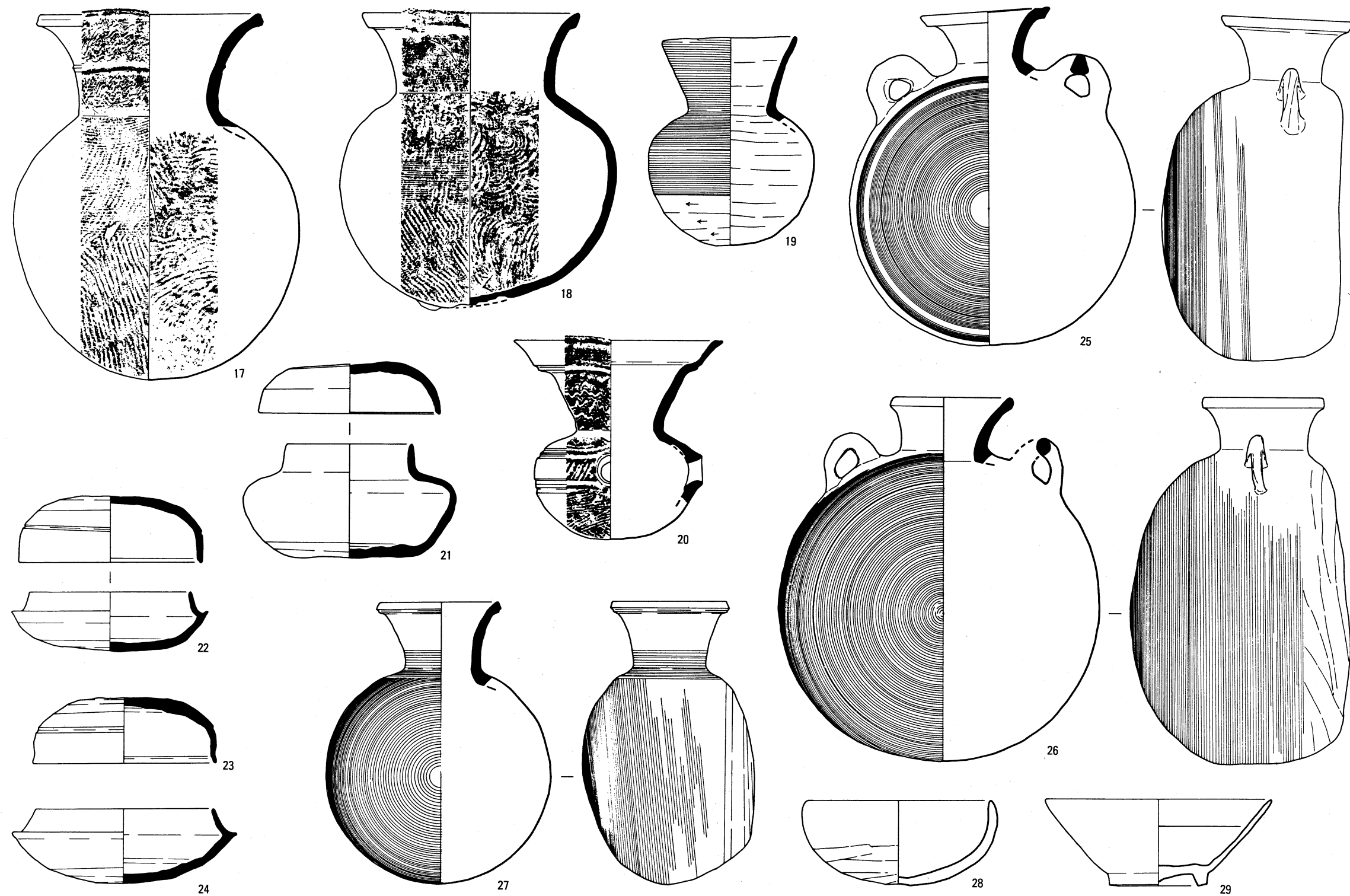
第15図 辻ノ田1号墳封土内出土土器 (1/3)



第16図 辻ノ田1号墳丘上出土土器(1/3)

れない。11は、器高4.6cm・口径13.6cmを測る。口縁部はわずかにS字状を呈しながら緩やかに外反し、高台はハの字形を呈し端部は外側に強く張り出している。

12は、口径6.8cm・胴部最大径13.0cmを測る脚付長頸壺であるが、脚部は失われている。頸部は、付け根から一旦すぼまった後外反しながら立ち上がり最後にわずかに内湾して終わる。胴部の上半には二条の沈線がめぐり、その間を刺突文で埋めている。頸部から上位の沈線までの外面には回転カキ目調整を施している。沈線より下の胴部中位はナデているが、胴部下半は回転ヘラ削りを施している。また、胴部下半から脚部の付け根にかけて、×状のヘラ記号が見られる。12は、器高12.6cm・口径12.0cm・胴部最大径9.8cmを測る甕である。体部はほぼ球形をなし、口頸基部はやや太い。口頸部は外反しながら立ち上がった後さらに大きく外反して段をなし、端部は水平でわずかに窪んでいる。胴部やや上位の最大径の位置に穿孔している。体部は横方向のナデで仕上げられ、頸部には丁寧な波状文が施されている。胴部や頸部の一部には、わずかに生じた自然釉による光沢が見られる。14は、高杯であるが、杯の立ち上がりと脚の下部は失われている。杯底部が立ち上がる位置に一条の沈線がめぐり、脚には3ヶ所に円形の穿孔を施しその下に二条の沈線がめぐっている。



第17图 辻ノ田1号墳玄室内出土土器(1/3)

15・16はいずれも土師質の土器で、蓋であると考えられる。15は、器高6.1cm・口径（復元）9.2cmを測る。全体はナデで仕上げられているが、つまみの部分には、整形時の圧痕が見られる。16は、つまみの部分をわずかに欠いているが、器高6.6cm・口径11.0cmを測る。つまみの形状は、15と異なって大きく外反しているため、高杯の脚部ではないかとも考えたが、その屈曲の度合いや全体のバランスからして、蓋として捉えるほうが妥当であろう。口縁部外面には、残りは良くないが、3～4条の孤状の文様が連なっている。

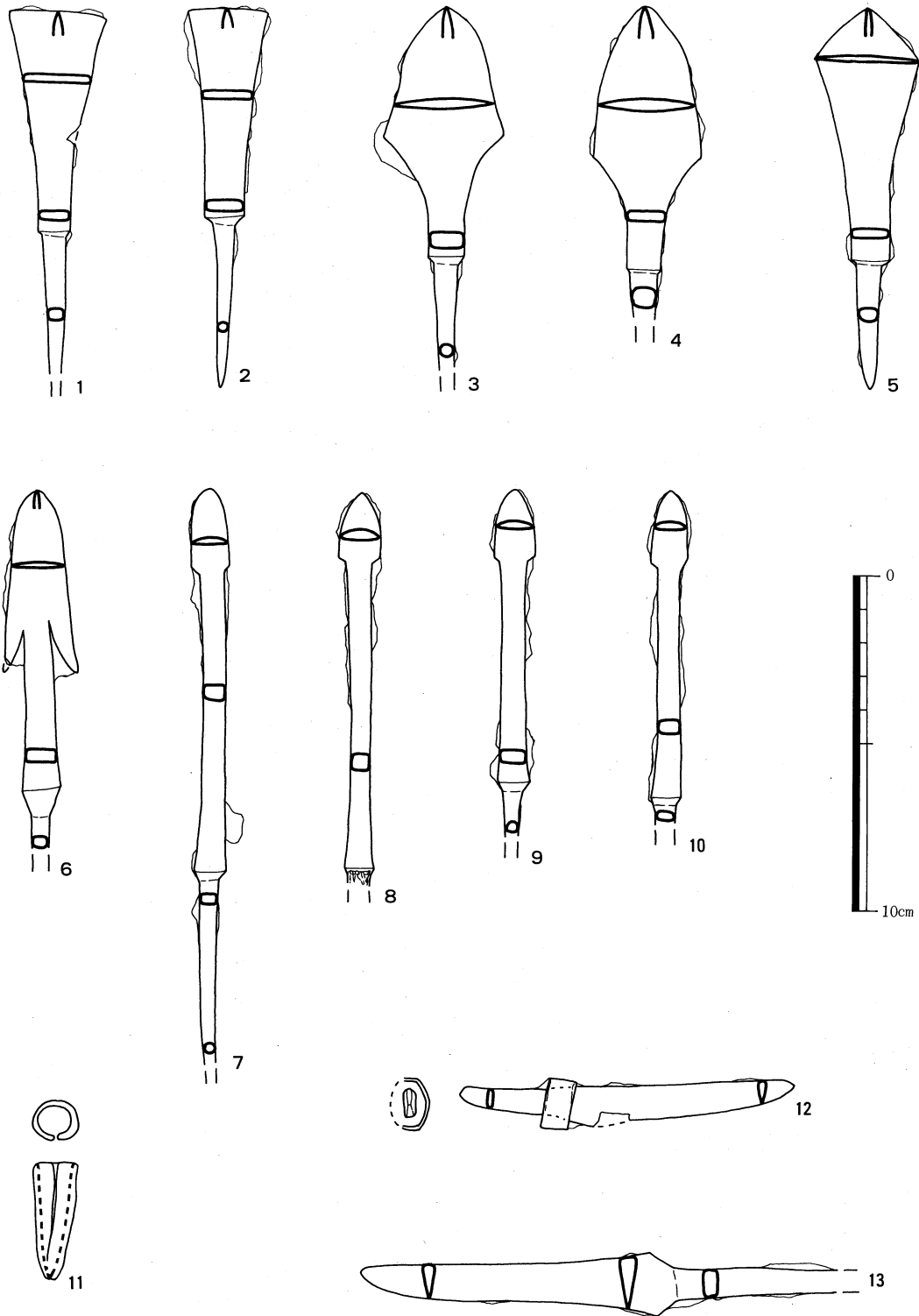
石室内出土土器（第17図 図版20・21）

石室の床面からは、須恵器と土師器が出土したが、土師器は1点のみであった。また、崩落した天井石を排除する過程で石室の埋土中から白磁碗が1点出土したが、これは、後世に石室が墳墓として利用されたときに副葬されたものであろうが、天井石除去中の出土であったため、その遺構を確認することができなかった。床面から出土した土器は、左右の袖部に集められたような状態で検出され、右袖から18・21・23・24・26・27・28、左袖から17・19・20・22・25であった。

17・18は、甕形土器である。17は、器高24.6cm・口径14.6cm・胴部最大径19.1cmを測る。口頸部は緩やかに外反しながら立ち上がり、端部はさほど肥厚せぬまま終わる。口頸部の中位には一条の三角突帯がめぐり、その上下に、目は粗いが丁寧な波状文が施されている。胴部外面は、縦方向の平行叩きの後上半にカキ目を施しており、叩き目の方向も、上半が左下がりであるのに対し、下半はおおむね右下がりとなっている。胴部内面には、波状（同心円状）の当て具痕が見られる。18は、器高19.8cm・口径14.4cm・胴部最大径18.5cmを測る。口頸部はわずかに外半しながら立ち上がり端部は外側に肥厚して終わる。頸部外面にはカキ目を施す。胴部外面は、17と同様に縦方向の平行叩きの後上半にカキ目を施しており、平行叩きの方向も17と同様である。胴部内面には同心円状の当て具痕が見られる。焼成時に多量の暗緑色の自然釉が生じており、外面に流れたり、内面の底部付近に溜まりができたりにしている。また、その自然釉によって癒着した土器片や、それを取り去ったときに生じたと思われる欠損部が見られる。

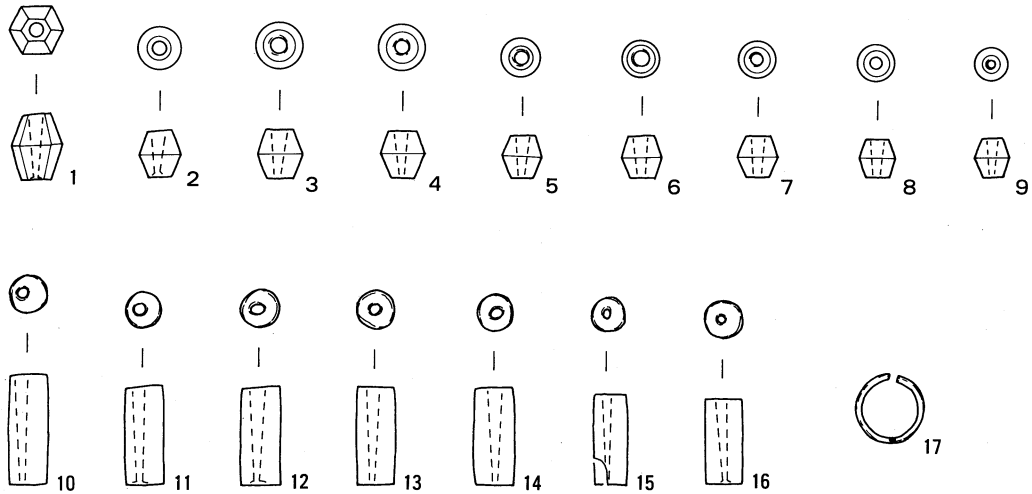
19は壺形土器で、器高14.0cm・口径8.9cm・胴部最大径11.2cmを測る。口頸部はゆるやかに外半しながら立ち上がり、口頸部外面から胴部外面上半にかけてはカキ目を施し、下半は回転ヘラ削りを施している。内面は、丁寧にナデ消している。20は壺で、器高13.4cm・口径14.0cm・胴部最大径10.2cmを測る。口頸部は、外反しながら立ち上がった後さらに大きく外反して段をつくり、端部はわずかに窪んだ水平面を呈している。段より下の頸部外面には、やや雑な印象は受けるが、びっしりといった感じの波状文が見られる。胴部最大径の位置に穿孔し、その上下にそれぞれ二条の沈線をめぐらし、その間に刺突文を施しており、胴部下半にはカキ目が見られる。21は、蓋付きの短頸壺で、蓋をした状態で出土した。身は、器高7.7cm・口径8.3cm・胴部最大径14.2cmを測る。口頸部は短く直立し、体部は扁平で肩が張っていて、底部外面には回転ヘラ削りが見られる。蓋は、器高3.5cm・口径12.0cmを測る。口縁端部にはわずかに窪みが見られ、天井外面には回転ヘラ削りを施している。身の頸部付近には蓋のものであろう円形の痕跡が見られ、重ねて焼成されている。

22～24は、蓋杯である。22は、蓋をした状態ではなかったが重なって出土しており、セットであることは確実である。杯身は、器高4.0cm・口径10.8cm・受け部径13.2cmを測る。立ち上がりは内傾して端部は丸く収まり、底部外面に回転ヘラ削りを施している。杯蓋は、器高4.4cm・口径12.2cmを測る。体部と天井部の境には沈線がめぐり、天井外面には回転ヘラ削りが見られる。23は、



第18図 辻ノ田1号墳出土鉄器(1/2)

器高4.4cm・口径12.2cmを測る。口縁端部は段をなし、体部と天井部の境には沈線がめぐり、天井部外面には回転ヘラ削りが見られる。24は、器高5.0cm・口径11.9cm・受け部径15.0cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部外面に回転ヘラ削りを施している。25～27は提瓶で、25は器高22.4cm・口径8.8cm・胴部径19.3cm・胴部厚12.0cm、26は器高24.4cm・口径7.7cm・胴部径21.7cm・胴部厚14.7cm、27は取っ手を持たず器高18.8cm・口径7.9cm・胴部径15.0cm・胴部厚11.5cmを測る。28は器高5.6cm・口径12.3cmを測る土師器の椀で、29は器高5.7cm・口径15.2cmを測る白磁椀である。



第19図 辻ノ田1号墳出土装身具実測図(1/2)

鉄器(第18図 図版22)

石室内から出土した鉄器は、鉄鏃(1~10)、石突(11)、刀子(12~13)である。

鉄鏃は、方頭系・三角系・圭頭系の広根鏃、柳葉系尖根鏃、細根鏃が出土した。

11は石突で、長さ3.4cm・基部の径1.25cmを測る。鉄板を円錐状に丸めて作っている。

12・13は刀子で、12には責金具が半分残っており、茎との間にわずかに木質が残っていた。

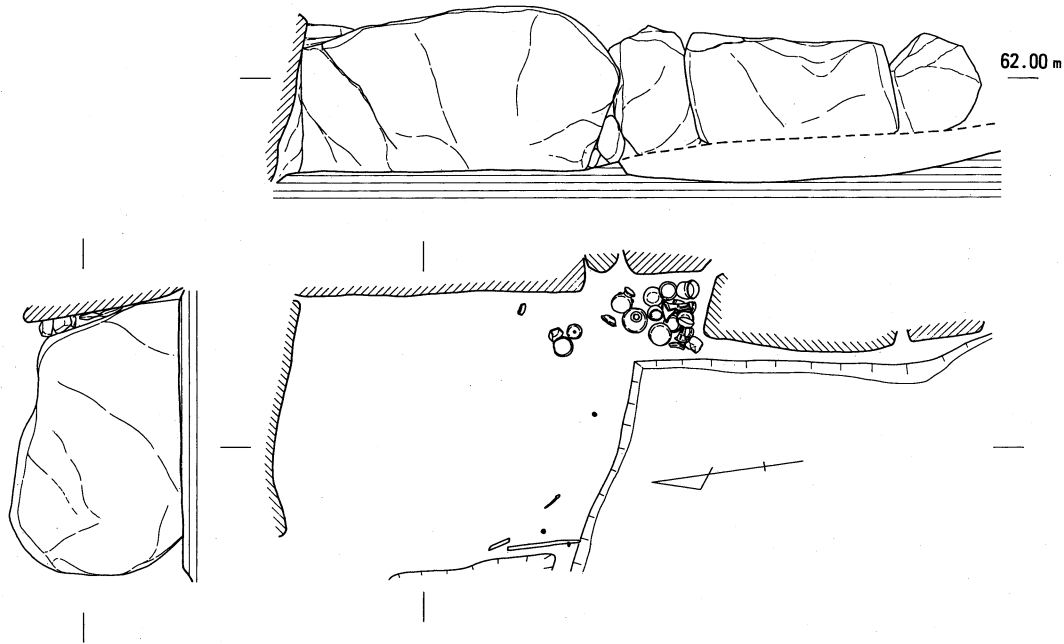
装身具(第19図 図版22)

石室内から出土した装身具は、水晶製切子玉1・水晶製ソロバン玉8・碧玉製管玉7・ガラス製小玉65以上・純銀環1であった。なお、小玉以外の、床面から出土したものについては、第13図の

番号	種類	材質	径	長	色調	番号	種類	材質	径	長	色調	番号	種類	材質	径	長	色調
1	切子玉	水晶	13.00	17.40	無色透明	29	小玉	ガラス	3.40	2.20	グリーンブルー	57	小玉	ガラス	3.40	2.25	ネイビーブルー
2	算盤玉	"	10.60	12.90	"	30	"	"	3.85	2.25	"	58	"	"	3.35	2.50	"
3	"	"	11.90	12.85	"	31	"	"	3.25	2.20	"	59	"	"	5.00	3.05	"
4	"	"	11.45	12.80	"	32	"	"	3.55	1.95	ライトブルー	60	"	"	3.50	2.55	"
5	"	"	10.45	11.10	"	33	"	"	2.75	2.05	ブルーグリーン	61	"	"	3.90	2.20	"
6	"	"	10.45	11.10	"	34	"	"	3.35	2.45	"	62	"	"	3.50	2.85	"
7	"	"	10.40	10.70	"	35	"	"	4.10	3.20	"	63	"	"	3.65	3.10	"
8	"	"	9.90	10.15	"	36	"	"	3.80	1.85	"	64	"	"	3.50	2.65	"
9	"	"	9.05	9.75	"	37	"	"	3.95	1.85	"	65	"	"	4.40	3.35	"
10	管玉	碧玉	9.60	28.35	淡緑色	38	"	"	3.20	2.40	"	66	"	"	3.75	3.10	"
11	"	"	9.90	26.00	濃緑色	39	"	"	3.80	3.15	"	67	"	"	3.95	2.85	"
12	"	"	25.80	25.80	"	40	"	"	4.20	3.35	"	68	"	"	3.55	2.95	"
13	"	"	25.35	25.35	"	41	"	"	3.80	3.45	ブルー	69	"	"	3.20	2.00	"
14	"	"	25.20	25.20	"	42	"	"	3.55	2.25	"	70	"	"	3.80	2.45	"
15	"	"	23.90	23.90	"	43	"	"	3.65	2.20	"	71	"	"	4.55	2.80	"
16	"	"	22.60	22.60	淡緑色	44	"	"	3.35	2.45	"	72	"	"	3.55	3.05	"
17	(銀環)	-	-	-	-	45	"	"	3.35	2.20	"	73	"	"	4.00	1.80	"
18	小玉	ガラス	5.30	5.30	グリーンブルー	46	"	"	3.40	2.20	"	74	"	"	3.80	2.20	"
19	"	"	2.55	2.55	"	47	"	"	3.40	2.45	"	75	"	"	3.15	3.00	"
20	"	"	3.10	3.10	"	48	"	"	3.95	2.65	"	76	"	"	4.20	2.90	"
21	"	"	2.55	2.55	"	49	"	"	3.80	2.40	"	77	"	"	4.40	2.80	"
22	"	"	2.05	2.05	"	50	"	"	3.40	2.90	"	78	"	"	3.30	3.30	"
23	"	"	2.40	2.40	"	51	"	"	3.70	2.65	"	79	"	"	3.90	3.10	"
24	"	"	2.35	2.35	"	52	"	"	4.55	3.30	ネイビーブルー	80	"	"	4.20	2.00	"
25	"	"	3.15	3.15	"	53	"	"	3.10	2.45	"	81	"	"	3.90	2.80	"
26	"	"	2.40	2.40	"	54	"	"	4.20	2.85	"	82	"	"	4.00	2.55	"
27	"	"	2.30	2.30	"	55	"	"	3.15	3.15	"						
28	"	"	2.65	2.65	"	56	"	"	3.50	2.25	"						

(単位: mm)

第1表 辻ノ田1号墳出土玉類計測表



第20図 辻ノ田2号墳石室実測図(1/50)

中に、切子玉=◆・ソロバン玉=▲・管玉=■・銀環=●で図示した。純銀環は、白銀色を呈し、径18mm・太さ1.85mmを測る。その他の玉類の計測値は第1表のとおりである。

4. 辻ノ田2号墳の調査

(1) 立地と現況

1号墳と同じ丘陵から西に延びた標高約60mの別の尾根上に位置している。しかし、この尾根は、建物を建設するために上面を大きく削られており、墳丘の状況や規模を確認することはできなかった。石室も、大半が失われており、わずかに奥壁や右側壁の一部、それも腰石部分のみが残っている状態であった。

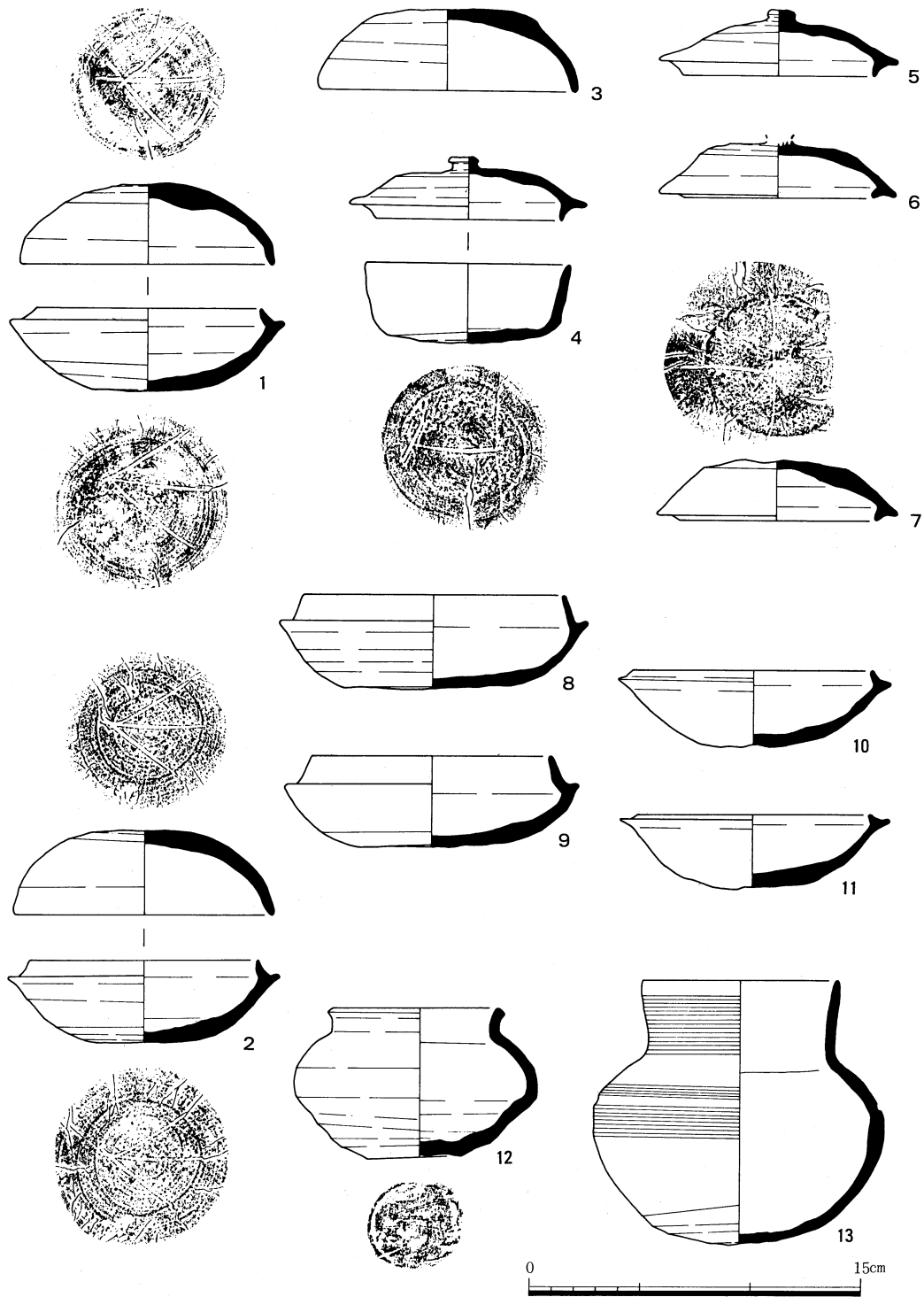
(2) 石室(第20図 図版23)

先に述べたとおり、古墳自体が大きく削られているため、主体部の石室も大部分が失われており、奥壁と、玄室と羨道部の右側壁の腰石を残すのみである。

南に開口する横穴式石室で、現況で80cmほど地山を掘り下げて、石室を築造している。左側の壁は不明であるが、両袖式であったと思われる。

玄室は長方形であったと考えられ、床面での規模は、長さは右側壁長2.73m、奥壁幅1.82mを測る。羨道部の残存部分は1.84mを測る。玄室の築造には大石を使用しており、奥壁は一枚の大石を腰石として使い、側壁もそのほとんどを大石一枚で構成し、袖部に小振りの石を一枚使っている。また、羨道部にも大きな石を用いている。そして、それぞれの石材の上端を玄室床面から約1mの高さにそろえて一段目を築いている。

玄室の床面はほぼ原状を保っているが、羨道部については、側壁の石材の状況からして、かなり削られており、築造時の羨道は入口に向かって上がっていたと思われる。



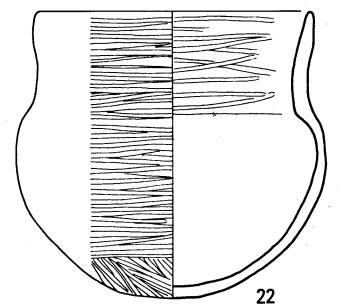
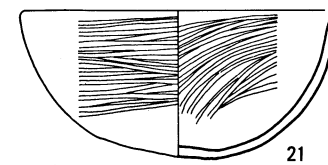
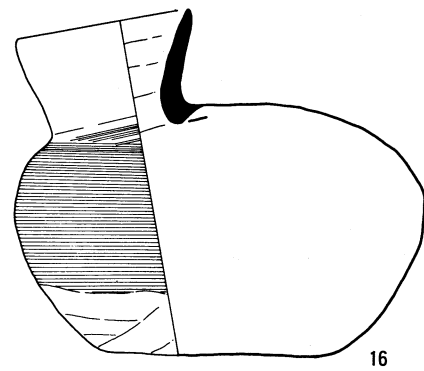
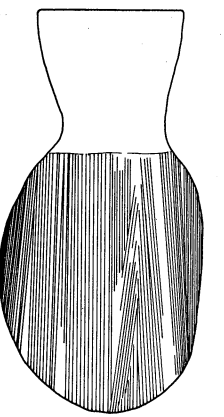
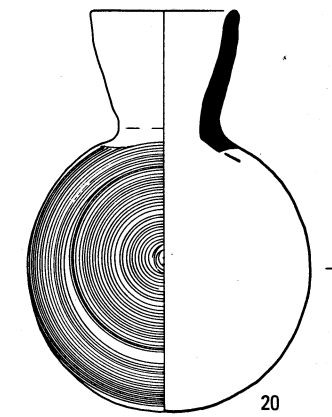
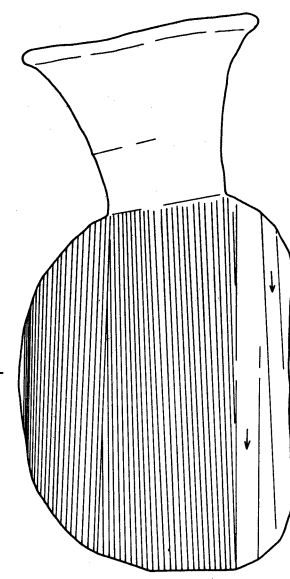
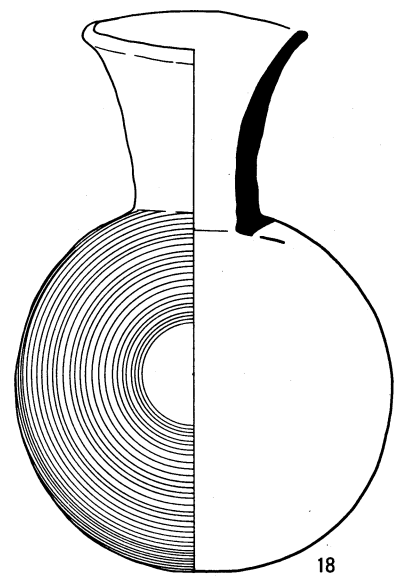
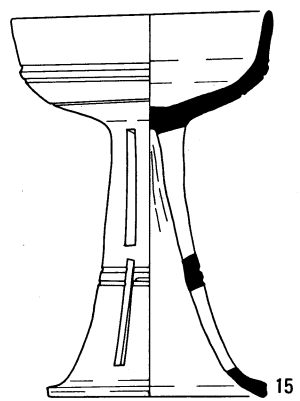
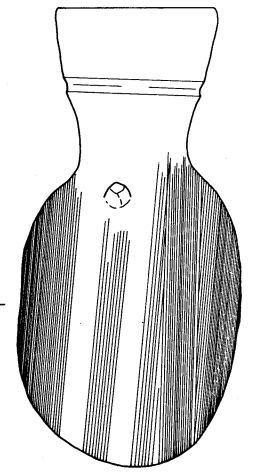
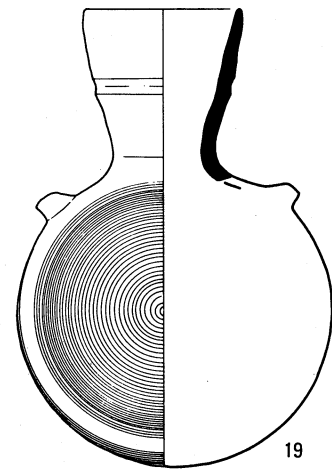
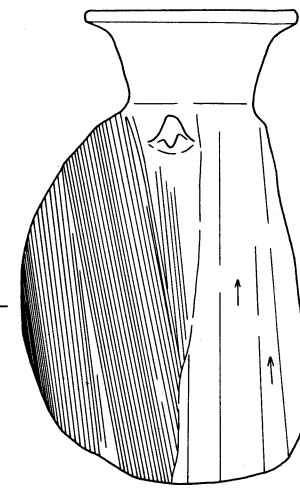
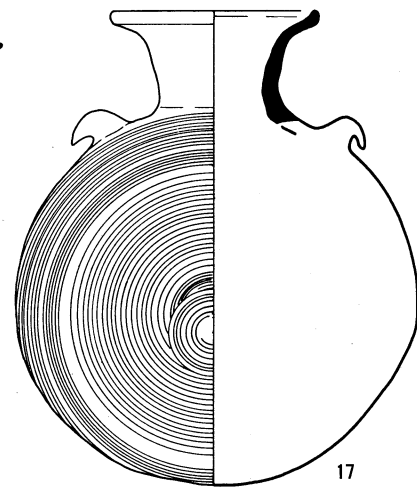
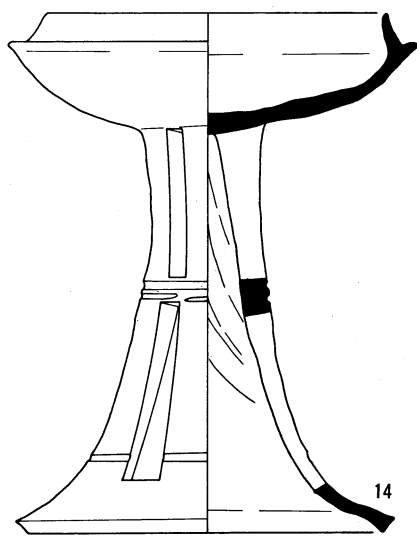
第21図 辻ノ田2号墳石室内出土土器実測図①(1/3)

(3) 出土遺物

辻ノ田2号墳からは、土師器・須恵器・鉄器・装身具などが、すべて玄室内から出土した。原位置を比較的保っていた土器類は右袖部に集中して、同じく鉄刀は左側側壁に沿って検出された。

土器類(第21・22図 図版23~29)

1~11は、須恵器の蓋杯である。1・2は、出土位置とヘラ記号や大きさによってそれぞれをセットと断定した。1の杯身は器高3.8cm・口径10.1cm・受け部径12.4cmを測る。立ち上がりは短く内



第22图 辻ノ田2号墳玄室内出土土器②(1/3)

傾し、底部外面に回転ヘラ削りを施している。1の杯蓋は器高3.7cm・口径11.3cmを測り、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。内外面に、焼成時に生じたと思われるコブが見られる。2の杯身は器高3.8cm・口径10.3cm・受け部径12.3cmを測る。立ち上がりは短く内傾し、底部外面に回転ヘラ削りを施している。2の杯蓋は器高3.8cm・口径11.6cmを測り、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。3の杯蓋は器高3.7cm・口径11.5cmを測る。灰白色を呈し、焼成も甘く、天井部外面のヘラ削りも見られない。4も、出土位置と大きさからセットと断定した。4の杯身は器高3.7cm・口径9.2cmを測る。底部外面に回転ヘラ削りが見られ、ヘラ記号を施している。4の杯蓋は器高2.9cm・口径8.4cm・受け部径10.8cmを測る。中央部のやや窪んだツマミとかえりを持つもので、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。5～7はかえりを持つ杯蓋で、5・6にはツマミがつく（6は痕跡）。5は器高3.0cm・口径8.7cm・受け部径10.8cmを測り、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。6は口径8.5cm・受け部径10.7cmを測り、天井部外面に回転ヘラ削りを施している。7は器高2.8cm・口径8.9cm・受け部径10.9cmを測る。天井部外面に回転ヘラ削りが見られ、ヘラ記号を施している。8は器高4.3cm・口径（復元）11.7cm・受け部径（復元）13.9cmを測り、立ち上がりは内傾している。底部外面のヘラ削りは見られず、底部内面には同心円状の当て具痕が見られるなど、雑な作りのものである。9は器高4.1cm・口径10.8cm・受け部径13.3cmを測り、立ち上がりは内傾している。底部外面に回転ヘラ削りを施し、8ほど明瞭ではないが底部内面に同心円状の当て具痕が見られる。10・11は立ち上がりが短く内傾するもので、10は器高3.5cm・口径10.8cm・受け部径12.3cmを測り、11は器高3.3cm・口径10.5cm・受け部径12.3cmを測る。いずれも、ヘラ削りは見られず、灰白色を呈して焼成が甘いところから、3の杯蓋と対応するものと考えられる。11の底部外面には、器表が摩滅してやや不鮮明であるが、ヘラ記号が見られる。

12・13は、須恵器の短頸壺である。12は器高6.7cm・口径8.0cm・底径4.3cm・胴部最大径10.9cmを測る。平底で、頸部は短く外反しながら立ち上がる。焼成はやや甘く、色調は白っぽく、外面の器表には胎土の密度の差によって生じたと思われる斜め方向の縞模様が見られる。13は器高12.0cm・口径8.8cm・胴部最大径13.1cmを測る。長めの頸部は、わずかに外反しながら立ち上がる。肩部に一条の沈線が見られ、頸部外面と肩部にカキ目を施している。底部外面にはヘラ削りを施している。焼成時に、自然釉のように胎土中の成分が表面に出ているが、底に溜まったものや外面を流れたものを観察すると、赤茶色を呈しており、おそらく胎土中の鉄分による現象ではないかと考えられる。それによって他の土器の癒着が見られ、さらに、それが生じた部分の器表は荒れて、ざらざらの状態である。

14・15は須恵器の高杯である。14は有蓋高杯で、器高21.1cm・杯部口径13.7cm・受け部径16.5cm・底径15.1cmを測る。脚部には長方形の透かしを縦方向に2段・3方向に穿ち、上下の透かしの間に二条・ラッパ状に広がった脚裾に近い部分に一条の沈線が廻っている。15は無蓋高杯で、器高15.4cm・杯部口径10.4cm・底径9.8cmを測る。脚部には長方形の透かしを縦方向に2段・3方向に穿ち、杯部外面下半に二条と一条・下段の透かしの上部にかかる位置に二条の沈線が廻っている。杯底部外面にヘラ記号が見られる。

16は平瓶で、器高13.9cm・口径7.0cm・胴部最大径16.4cmを測る。器表が摩滅しやや不鮮明であるが、胴部外面上半にカキ目を施し、下半にはケズリを施している。口頸部の内外面には、縦方向の二条の沈線（ヘラ記号？）が見られる。

17～20は提瓶である。17は、器高19.3cm・口径8.1cm・胴部最大径16cm・胴部最大厚11.2cmを測る。カギ状の小さな把手が付き、背部にカキ目、腹部にヘラ削りが見られ、腹部には3本の直線を交差させたヘラ記号が認められる。18は、把手のないもので、器高21.7cm・口径9.0cm・胴部最大径15.1cm・胴部最大厚11.0cmを測る。胴部の背面と側面にはカキ目を施し、腹部にヘラ削りが見られる。背部は灰白色を呈すのに対し、腹部は黒色を呈している。19は、器高18.6cm・口径6.2cm・胴部最大径12.6cm・胴部最大厚8.8cmを測る。名残りを留める程度の把手が付けられ、口頸部外面には一条の沈線が廻り、胴部には背部腹部ともにカキ目を施している。これも背部は灰白色、腹部が黒色を呈しているが、背部には胎土の密度差によって生じたと思われる渦巻き状の斑文が見られる。20は、把手を持たないもので、器高16.1cm・口径6.0cm・胴部最大径11.4cm・胴部最大厚8.1cmを測る。胴部全体にカキ目を施している。

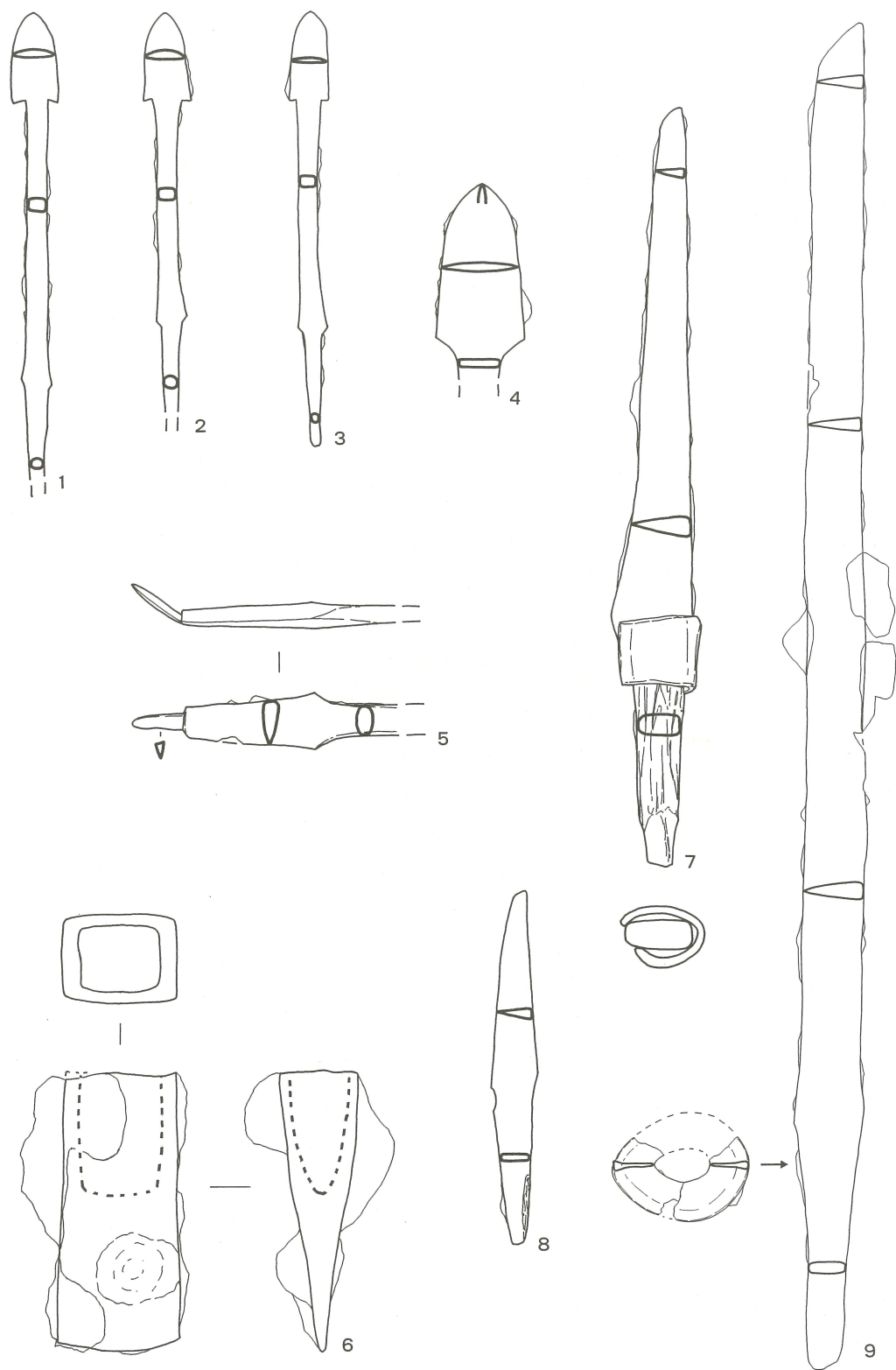
21は、土師器の椀で、器高5.9cm・口径（復元）12.5cmを測る。ない外面ともにヘラ磨きが見られる。22は、土師器の小型壺で、器高11.5cm・口径10.9cm・胴部最大径11.4cmを測る。外面全体と口頸部内面にヘラ磨きが見られる。

鉄器類（第23図 図版30）

1～3は片丸式の尖根鏃で、3は完形で全長13.0cmを測る。4は三角系の広根鏃で、刃部長4.6cm・刃部幅2.6cmを測る。5は鏃で、楕円形の断面を持つ基部から最初の刃部が始まり、先端の小さな刃部は斜め方向に立ち上がっている。最大幅1.7cmを測る。6は鉄斧で、全長8.4cm・基部幅3.3cm・刃部幅3.6cmを測る。7は刀子で、刃部長15.1cmを測る。関部分には柄金具が残っており、断面長方形の茎にはわずかに木質が認められる。8は、全長10.5cmを測る刀子で、茎にわずかな木質が残る。9は鏢付きの太刀で、全長60.9cm・刃部長49.7cmを測る。鏢には透かしは認められず、全長6.1cm・全幅（復元）4.9cm、孔部は縦2.6cm・幅（復元）1.5cmを測る。

装身具（第24図 図版30）

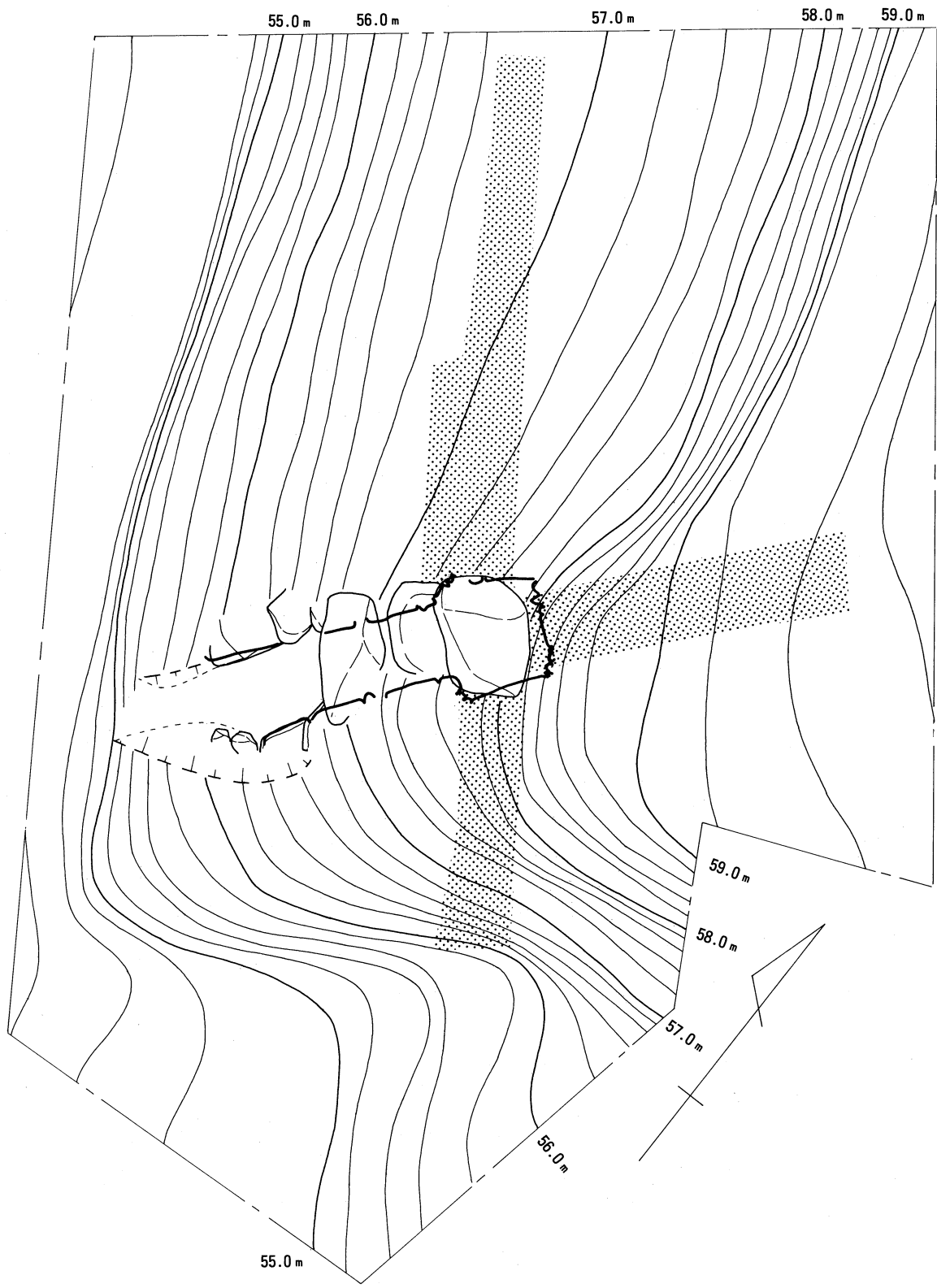
1・2は石製小玉で、1は径6.85mm・厚さ4.95mm、2は径6.15mm・厚さ5.30mmを測る。
3は金環で、径2.3cmを測る。4は銀環で、径2.4cmを測る。



第23図 辻ノ田2号墳出土鉄器実測図（1/2、大刀は1/3）



第24図 辻ノ田2号墳出土装身具実測図（1/2）



第25図 辻ノ田3号墳現況測量図(1/100)

5. 辻ノ田3号墳の調査

(1) 立地と現況 (第25図 図版31)

辻ノ田3号墳は、2号墳が築かれている尾根の南側斜面の谷間に築かれている。露出していた天井石上面の標高が57.97mで、2号墳との距離は水平距離で、約12mである。周辺は杉林として造成されており、踏査の段階で、羨道部の入り口の石材が露出し、開口していた。現況測量によっても、墳丘を想定できるようなデータを得ることはできなかった。

(2) 墳丘 (第26図 図版32・33・34)

造林によって原地形に大きく手が加えられていることは明らかで、トレンチを設定して墳丘の確認を試みたが、盛土部分を確認することはできなかった。ただし、古墳築造の選地の状況からして、当初からさほど大きな墳丘を持っていたとは考えにくく、おそらくは、石室を覆うに足る程度の墳丘であったと考えている。

トレンチは、玄室を中心に3本設定した。それぞれのトレンチからは、相当量の石が検出され(第26図のアミカケ部分)、それ等が古墳の築造に使用された可能性が高いと考えられたが、整然とした石組として検出されたのは南側トレンチ内のもので、これについては、原位置を保っていると考えてよい。

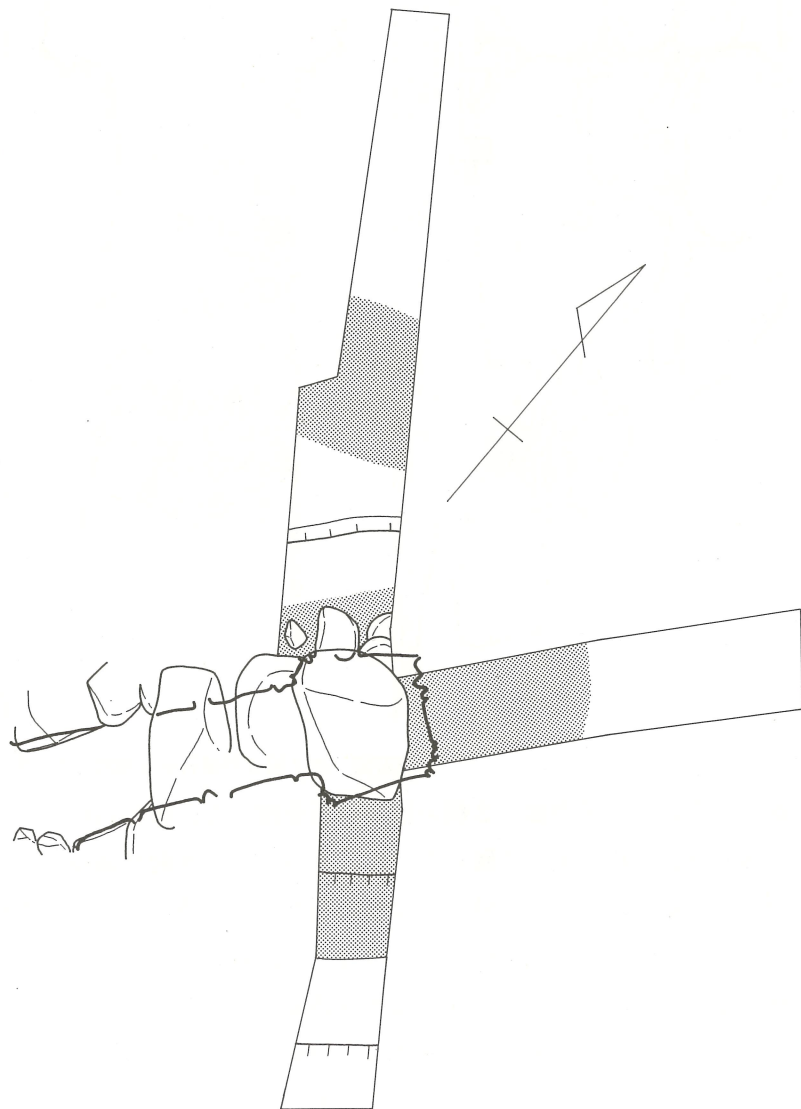
ただし、先に述べたとおりこの古墳は保存されることになったため、3本のトレンチ以外には外部構造についての調査は実施しなかった。

(3) 石室 (第27図 図版31・32)

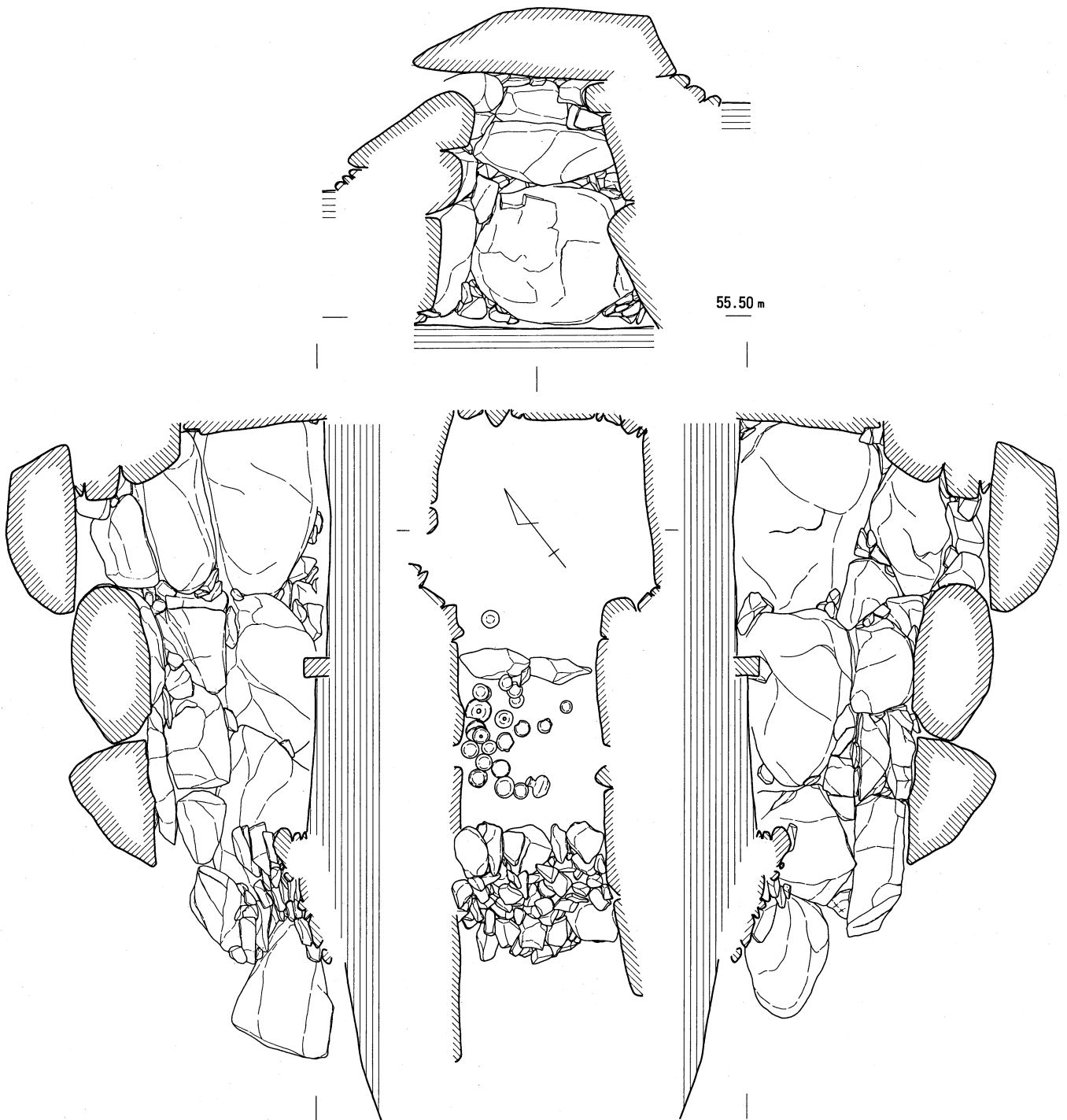
南西に開口する、単室・両袖の横穴式石室である。石室の残存状況は比較的良く、失われていたのは羨道部の閉塞部より外側の部分であった。

玄室は正方形に近く、玄門側がわずかに開く台形状の平面プランを持ち、床面での規模は、長さが右側壁長1.31m・左側壁長1.38m、幅は奥壁側1.52m・玄門側1.82m、玄門幅1.15m、残存羨道部長(左側壁長)3.64mを測る。

床面には敷石は見られない



第26図 辻ノ田3号墳トレンチ内検出状況 (1/100)

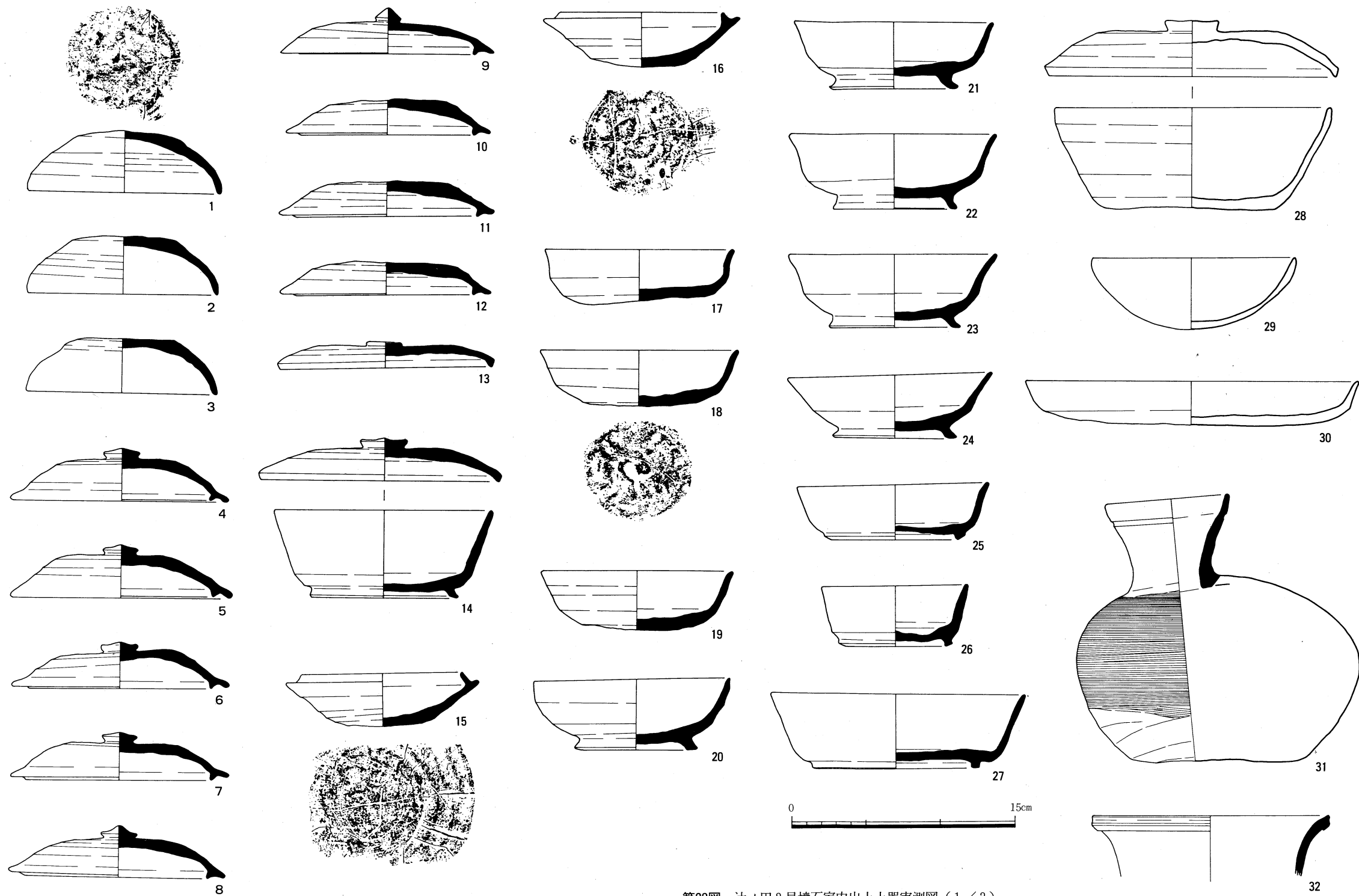


第27図 辻ノ田3号墳石室実測図(1/50)

が、玄門のやや羨道側に2個の細長い石を使った、敷居石が認められる。

奥壁は、一枚の大石を腰石として、その上に厚さ約45cmの石を二段目・同じく約30cmの石を三段目として積み重ね、その間に小ぶりの石をはさみ込んでいる。また、側壁も、奥壁と同じく左右とも腰石には一枚の大石を使い、二段目・三段目もほぼ奥壁と同様の築き方をしている。なお、右側壁の腰石と二段目の石の間にはさみ込まれている石は、右袖部を跨ぐように右袖の腰石の上にも載せられており、このような構造は左側壁には見られない。玄室の天井石には一枚の大石を使っており、床面から天井までの高さは約2mである。

羨道部の側壁も、基本的には玄室と同様に築かれており、羨道の場合は天井が二段目の上に架け



第28图 辻ノ田3号墳石室内出土土器実測図(1/3)

られている。

閉塞に使われた石は、玄門から約1.8mのところから、幅約1.1m・高さ約40cmにわたって検出された。

(4) 出土遺物

辻ノ田3号墳の石室内からは、須恵器や土師器の土器、鉄器、装身具が出土した。このうち土器はそのほとんどが敷居石と閉塞石のあいだの羨道部からの出土であるが、鉄器と装身具については石室埋土からの発見である。

土器類 (第28図 図版35~39)

1~13は、須恵器の杯蓋である。1~3は、返りは持たず、天井部外面の回転ヘラ削りも見られないもので、器高3.6~4.1cm・口径12.5~12.6cmを測る。1・2は土師質のもので、1にはヘラ記号が見られる。4~9は返りを持ちやや偏平になった天井にツマミが付くものである。ただし、ツマミの形態には差異が見られる。器高3.1~3.5cm・口径11.2~12.2cm・受け部径14.3~14.8cmを測るが、9の口径がやや小さいこととツマミの形態の差異を除けば、ほぼ同一規格とすることができる。10~12は、前者とほぼ同じ体部にツマミを持たないもので、器高2.2~2.4cm・口径11.5~12.1cm・受け部径13.7~14.4cmを測る。これらもまた同一規格とできると同時に、4~9の杯蓋からツマミを取っただけといった形のものである。13は、偏平な天井に偏平なツマミが付き、返りがなくなって口縁端部を内側に屈曲させて終わるものである。器高1.8cm・口径14.5cmを測る。

14は、蓋がされた状態で出土したものではないが、出土状況とその大きさから、セットである可能性が高い。直線的に外反しながら立ち上がる体部と高台を持つ杯身は、器高5.8cm・口径14.6cm・高台径9.9cmを測る。ツマミを持ち返りを有しない杯蓋は、器高2.8cm・口径15.9cm・を測る。

15~27は、須恵器の杯身である。15・16は短く内傾する立ち上がりを持つもので、底部外面の回転ヘラ削りは見られない。それぞれ、器高3.5cm・口径10.7cm・受け部径12.9cm、器高3.7cm・口径10.9cm・受け部径13.2cmを測る。どちらにも、底部外面にヘラ記号が見られる。17~19は立ち上がりを持たない杯身で、体部が直立して口縁端部で外反する17に対し、18・19はゆるやかに外反しながら立ち上がる。17は器高3.7cm・口径12.7cmを測り、18・19は、それぞれ、器高3.7cm・口径13.3cm、器高4.0cm・口径12.8cmを測る。18・19には底部外面にヘラ記号が見られ、19の口縁部外面にわずかな範囲であるが櫛歯状の工具による刺突文が見られる。20~27は、高台が付く杯身である。20は、わずかに内湾する体部に、外側に広がった高台を持つもので、器高4.7cm・口径13.1cm・高台径8.2cmを測る。21~24は、口縁部がS字状に開く体部に、外側に広がった高台を持つもので、器高4.2~5.0cm・口径13.4~14.0cm・高台径8.3~8.8cmを測る。25~27は、直線的に外反する体部に、角張った小さな高台が付くもので、大きさにばらつきがあり、25は器高3.7cm・口径12.9cm・高台径9.4cm、26は器高4.0cm・口径9.9cm・高台径7.6cm、27は器高4.9cm・口径17.0cm・高台径11.2cmを測る。高台の位置も、25・26が屈曲部に近いところに付くのに比べ、27は底部のやや内側よりに付けられている。

28~30は、土師器である。28の杯身は器高6.9cm・口径18.5cm・底径11.2cmを測り、杯蓋は器高3.8cm・口径19.5cmを測る。どちらも、ナデを施しているが、凸の部分には光沢があり、ミガキに近い仕上がりとなっている。29の椀は、器高4.8cm・口径13.4cmを測る。30の皿は、器高3.0cm・口径22.2cmを測り、外面に丹の塗布が見られる。

31は須恵器の平瓶で、器高17.9cm・口径8.0cm・胴部最大径18.8cmを測る。胴部外面上半にカキ目を施し、下半にはケズリを施している。口縁部に近いところに、一条の沈線が見られる。32は須恵器壺の口縁部で、復元口径15.5cmを測る。

鉄器類 (第29図 図版39)

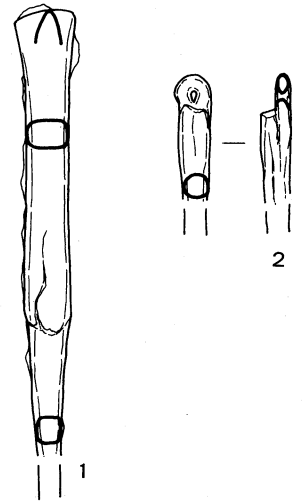
1は鑿で、刃幅1.6cm・残存長11.8cmを測る。2は不明鉄器で、残存長3.3を測る。丸い端部には孔が見られる。

装身具 (第30図 図版39)

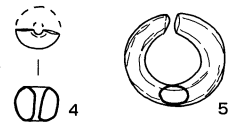
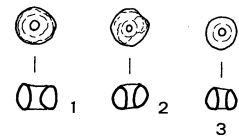
1～3は、ガラス製丸玉である。いずれも、風化が著しく表面は乳白色を呈すが、2・3の胎内には緑色の色調が残っている。それぞれ、径1.05cm・長0.70cm、径1.03cm・長0.62cm、径0.845cm・長0.54cmを測る。

4は透明感のある緑色を呈する硬玉製の丸玉で、復元径1.20cm・長0.88を測る。

5は銀環で、径2.585cmを測る。



第29図 辻ノ田3号墳出土
鉄器実測図(1/3)



第30図 辻ノ田3号墳出土
装身具実測図(1/2)

IV. ま と め

以上に述べた調査結果を踏まえて、井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群それぞれの造営時期と使用期間について整理して、まとめとしたい。

井ノ浦古墳

井ノ浦古墳では、封土内および周溝内から土器が出土しており、それらのうち蓋杯によって古墳造営の時期と使用期間を考えることにする。

封土の北側と南側に埋納されていた蓋杯は、まったく同タイプのもので、当然のことながら、古墳造営の時期を示していると考えられる。すなわち、それらの蓋杯は、具体的には、陶邑編年のI型式5段階に相当するものである。

一方、周溝内から出土した蓋杯を見てみると、杯蓋では21～24・杯身では27～30が埋納土器と同タイプのもので、築造当初の供献土器であったと考えられる。また、25の杯蓋は陶邑編年のII型式1段階・26の杯蓋は陶邑編年のII型式2段階に相当し、それぞれ、31と32の杯身に対応するものである。

したがって、井ノ浦古墳の造営・使用期間は、陶邑編年のI型式5段階～II型式2段階(九州の小田編年ではII期～III A期)とすることができ、絶対年代としては、5世紀末頃～6世紀前半にかけての古墳とすることができる。

また、南側の周溝内から出土した広口短頸壺18は、朝鮮半島系のもので、出土状況からして築造当初に供献されたものと考えている。

なお、先に述べたとおり、周溝内の土器はそのほとんどが南側からの出土であり、古墳の対する祭祀が南側において営まれていたことも想像に難くない。

主体部の型式からすると、いわゆる「竪穴系横口式石室」であるが、壁の構造が古いものに見ら

れるような「板石の小口積み」ではなく、この型式の石室の中でも新しいもので、次の段階への過渡的な構造と捉えることができる。

辻ノ田古墳群

1号墳

石室内から出土した土器群は陶邑編年のⅡ型式2段階に位置付けられるもので、他には異なる型式の混在は見られず、追葬の実施を示す確実な手掛かりを見出すことはできない。

また、墳丘上から出土した土器群を見ても、そのほとんどが石室内のものと同じⅡ型式2段階のもので、わずかに8の杯蓋と10・11の杯身が異なる型式で、8・11はⅣ型式1段階ぐらいまで下るものである。この場合、8・11を古墳に伴うものとする、期間的にかなりの長期に渡ることになる。

しかし、石室内の土器出土状況や、墳丘上出土の土器にⅡ型式2段階からⅣ型式1段階までの間を埋めるものが存在しないことを考えると、この古墳の築造は6世紀前半から中頃で短期間で使用されなくなったとした方が自然である。

なお、墳丘上の土器群中から出土した土師質の土器15・16については、いずれも蓋であると判断し、身については確認できなかったが、これ等はその形態から朝鮮半島系の土器を模して作った土器であろうと考えている。

2号墳

石室内から出土した蓋杯を観察すると、次のように位置づけることができる。すなわち、8・9は陶邑編年のⅡ型式5段階、1～3・10・11はⅡ型式6段階、4～7はⅢ型式1段階に対応すると考えられる。

その他の主な器種については、高杯は14・15ともにⅡ型式5段階、提瓶は大きさの差はあるが退化しながらも把手が付くものを古く位置付けて把手の無いものとの時間差があると考えている（Ⅱ型式5段階～6段階）。

以上のことから、辻ノ田2号墳は、九州での小田編年のⅢB期～V期とすることができ、絶対年代では、6世紀末頃に築造されて以降7世紀前半にかけて少なくとも2度の追葬が行なわれたと考えられる。

3号墳

3号墳についても、石室内から出土した土器の大部分を占める蓋杯によって、その築造・使用時期について考えることにする。

具体的には、1～3の杯蓋と15・16の杯身は陶邑編年のⅡ型式6段階、4～12の杯蓋と17～24の杯身はⅢ型式2段階、13・14の蓋杯と25～27の杯身はⅣ型式1段階にそれぞれ位置づけられるものである。

すなわち、辻ノ田3号墳は、小田編年のⅣB期～Ⅵ期にかけてのものであり、絶対年代では、7世紀前半頃に築造されて7世紀末頃まで使用されたと考えられ、その間、最低2度の追葬が行なわれている。

以上、今回調査した4基の古墳について報告を行ってきたが、ゴルフ場造成という開発の性格上、井ノ浦古墳と辻ノ田1・2号墳は調査終了後破壊せざるを得なかったのは、先に述べたとおり

である。そして、計画の一部変更によって、辻ノ田3号墳が現状保存できたのがせめてもの救いであつた。

また、破壊せざるを得なかつた古墳についても、厳しい状況のもとで、事業主体者である株式会社ソロンや施工を担当した株式会社佐藤工業からは全面的な協力を得ることができ、十分な成果をあげることができたと自負しているところである。

さらに、今回のゴルフ場開発に伴うレジャーランド建設の予定地内には、江戸時代の領地境石の石列の存在が確認されており、今後はそれらに対する調査・保存のあり方についての対応が重要な位置を占めることになり、関係団体との協議を尽くし、協力を得ながら、最善の方策を求めて努力する所存である。

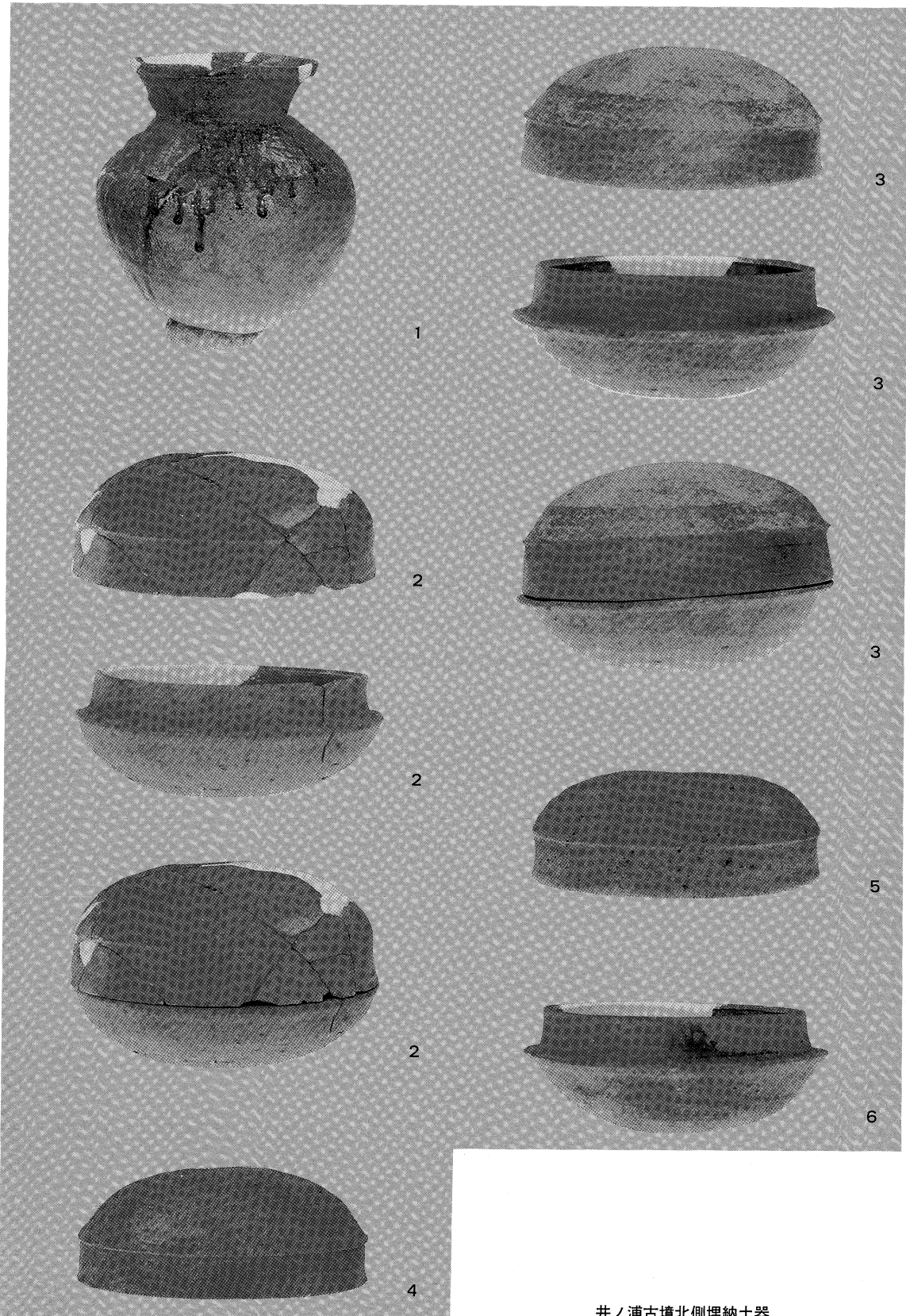
末筆ながら、今回の調査を実施するにあたって、ご協力いただいた各位に対し謝意を表して、報告を終える。

圖

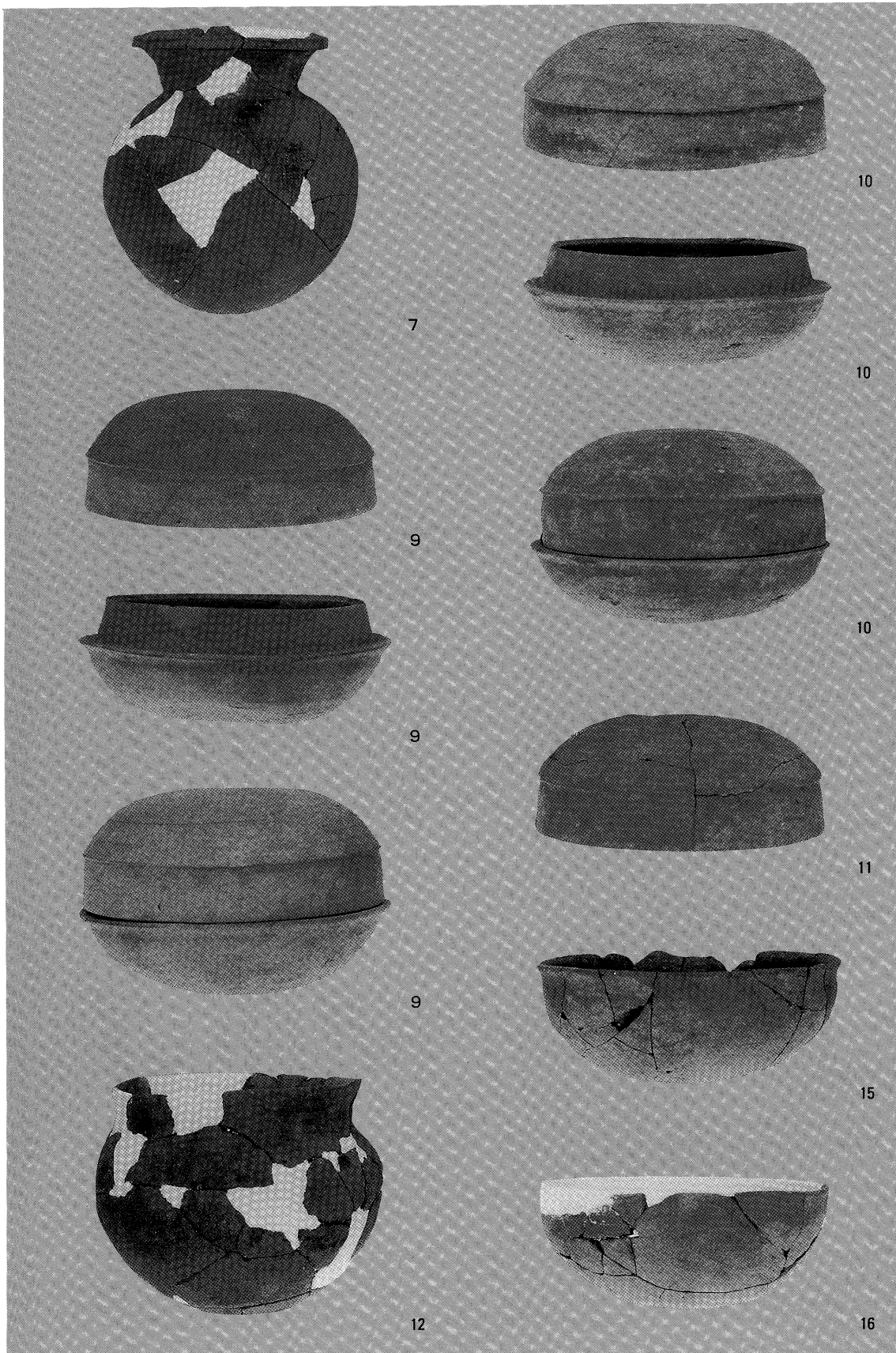
版



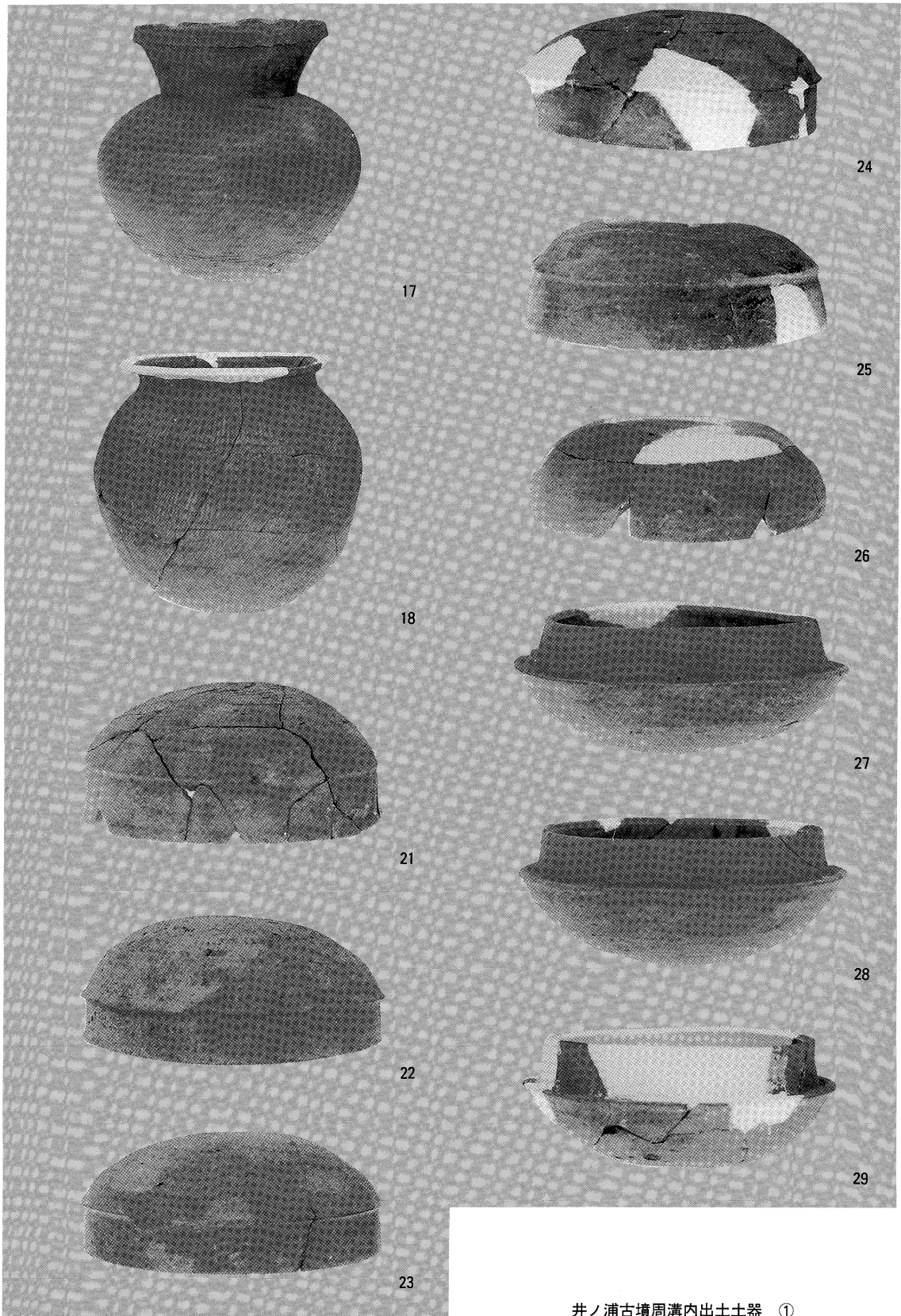
井ノ浦古墳から北西を望む（中央は可也山）



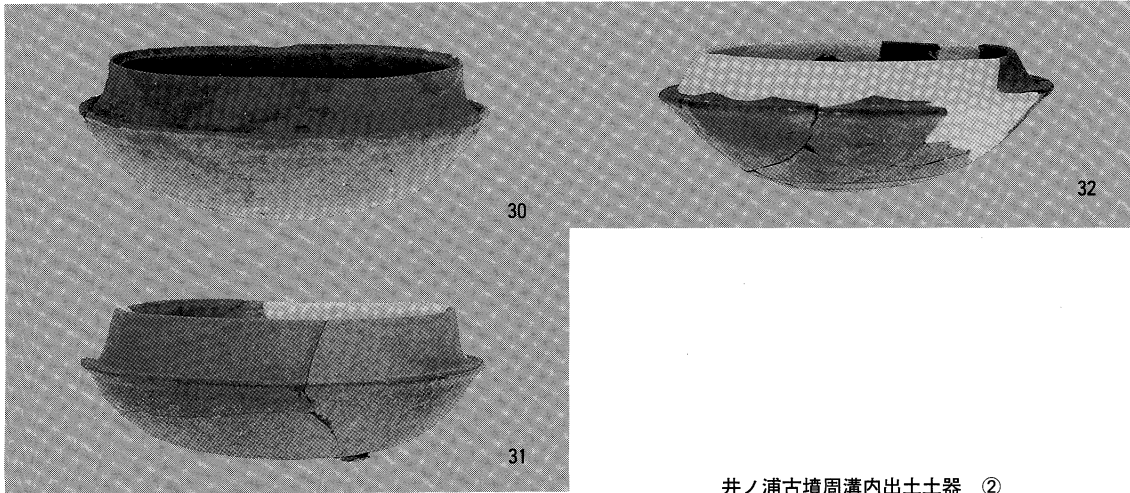
井ノ浦古墳北側埋納土器



井ノ浦古墳南側埋納土器



井ノ浦古墳周溝内出土土器 ①



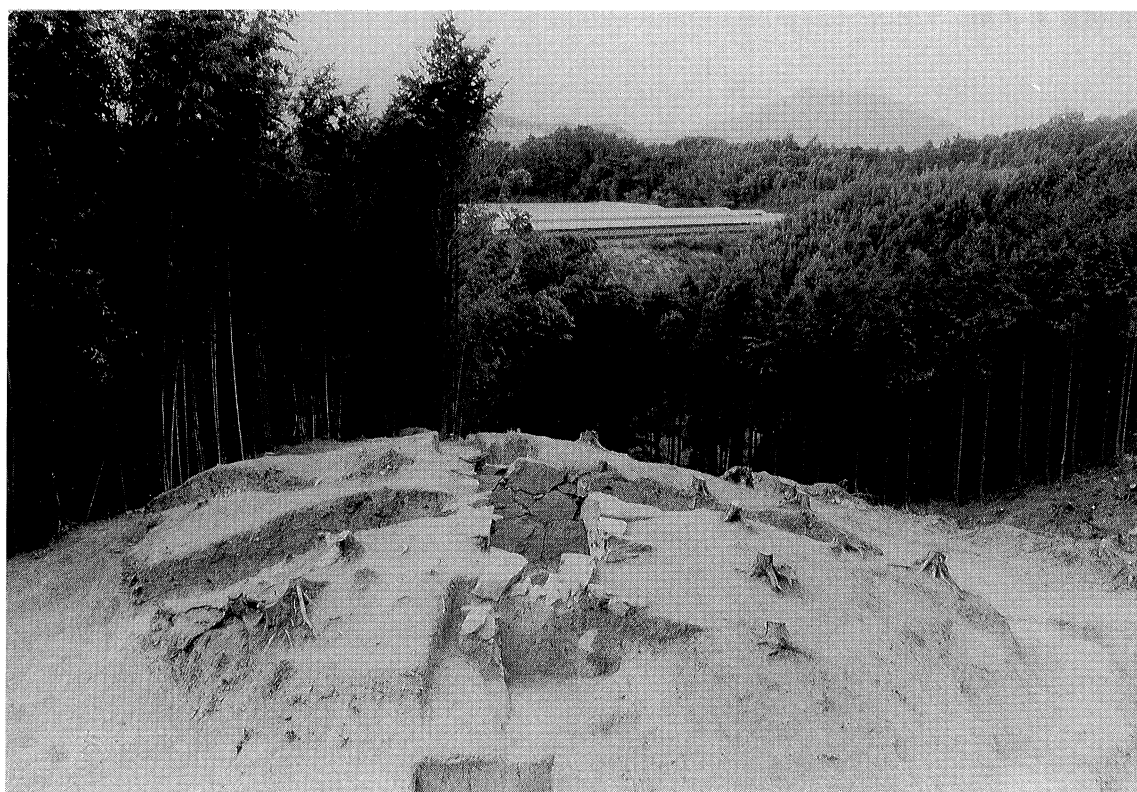
井ノ浦古墳周溝内出土土器 ②



井ノ浦古墳出土鉄器



辻ノ田1号墳調査前全景



辻ノ田1号墳から北西を望む（遠方の山は可也山）



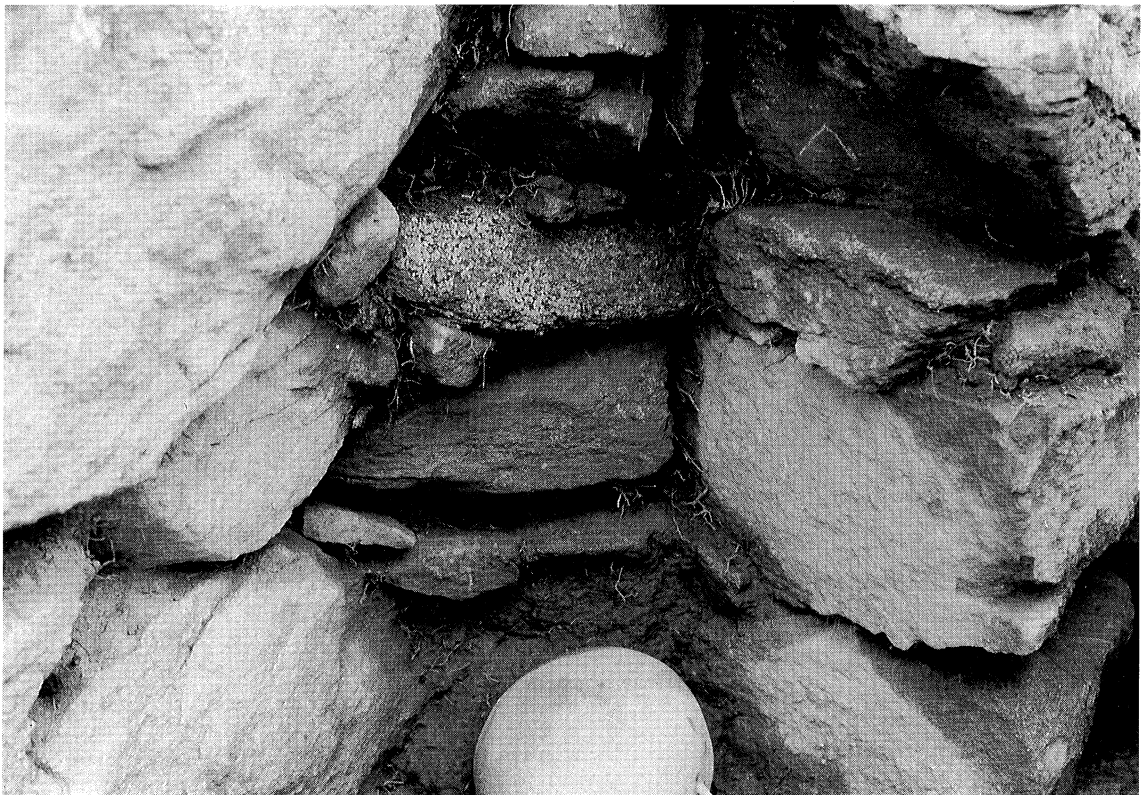
辻ノ田1号墳全景



辻ノ田1号墳石室全景（羨道側から）



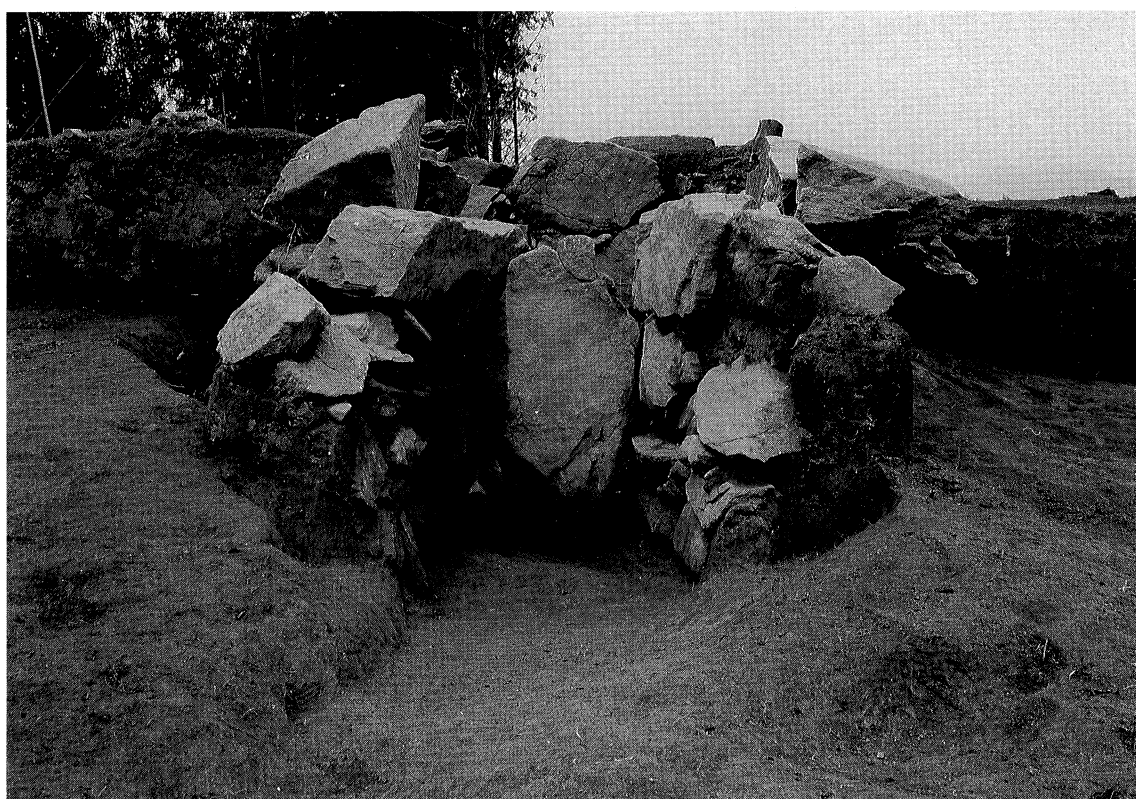
辻ノ田1号墳石室全景（奥壁側から）



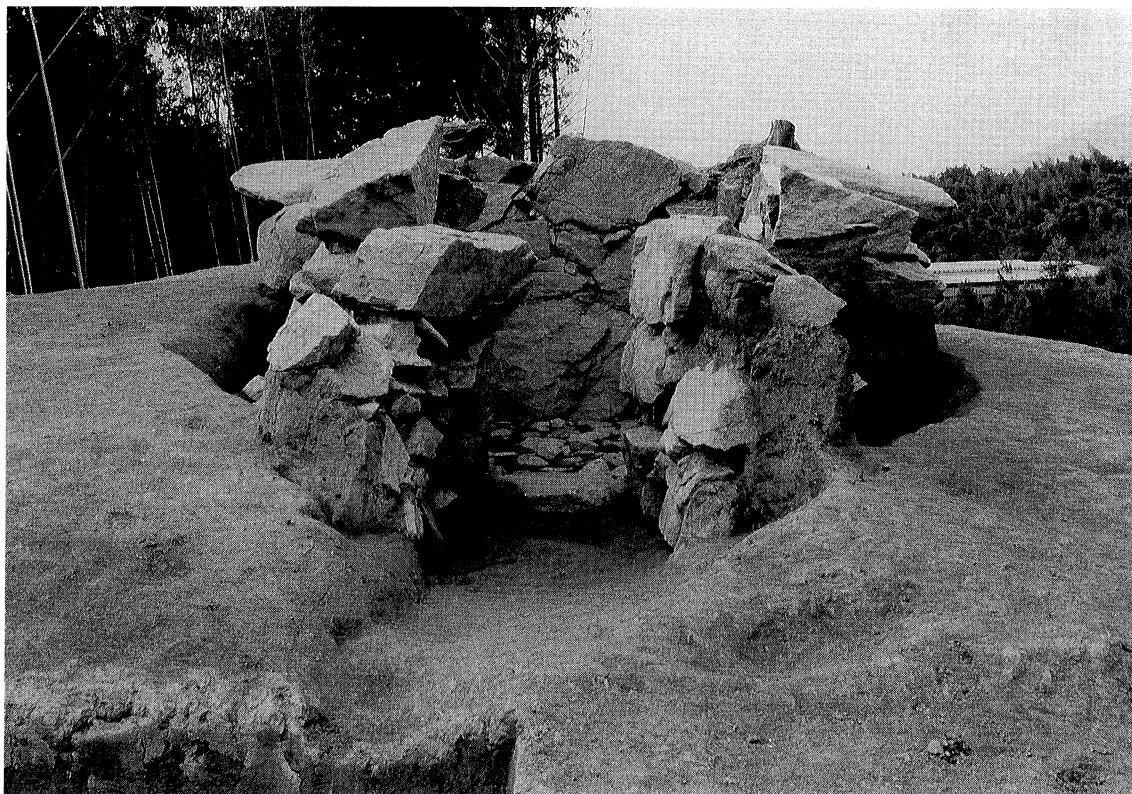
辻ノ田1号墳石室右袖部石組近景



辻ノ田1号墳入口部閉塞状況



辻ノ田1号墳閉塞部礫石除去状況（板状石露出）



辻ノ田 1号墳閉塞部完全除去状況



辻ノ田 1号墳玄室側から閉塞部を望む



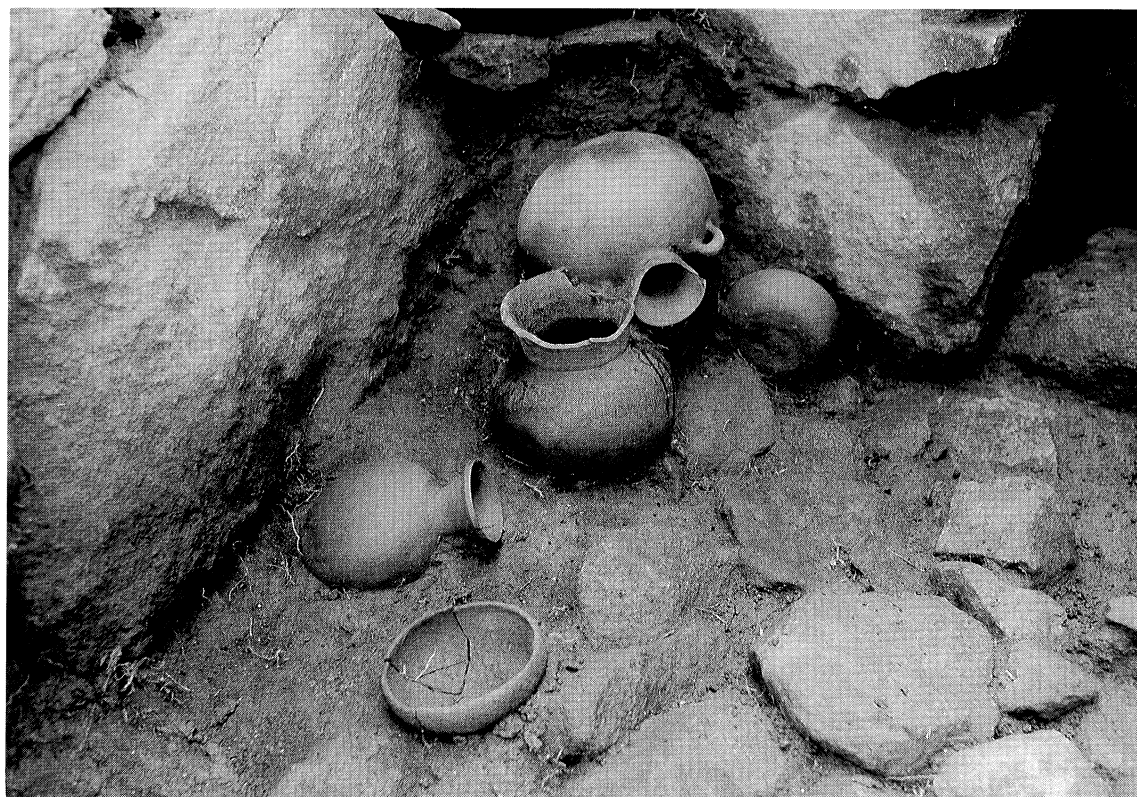
辻ノ田1号墳封土除去状況



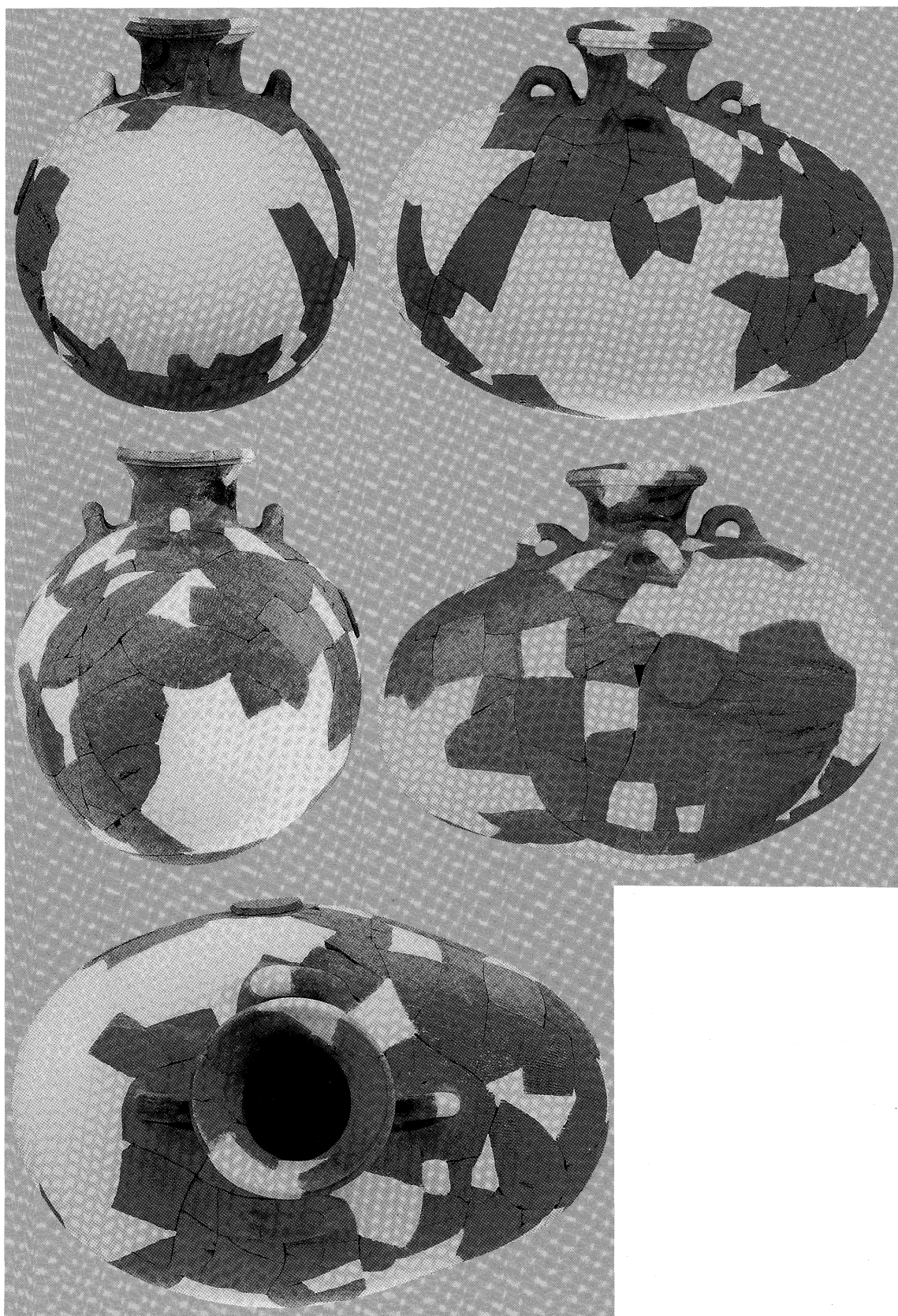
辻ノ田1号墳玄室内土器出土状況



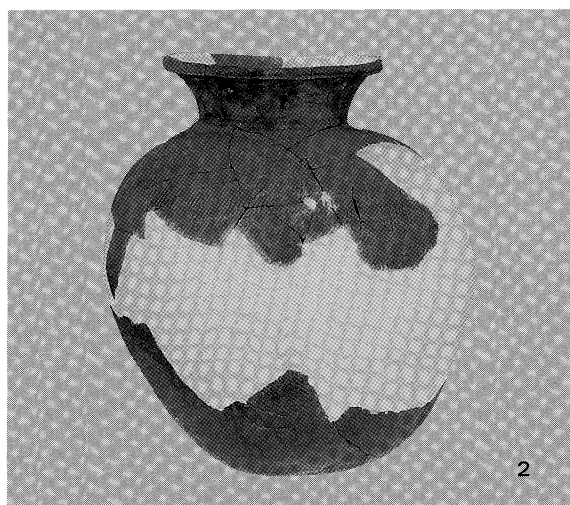
辻ノ田 1 号墳左袖部土器出土状況



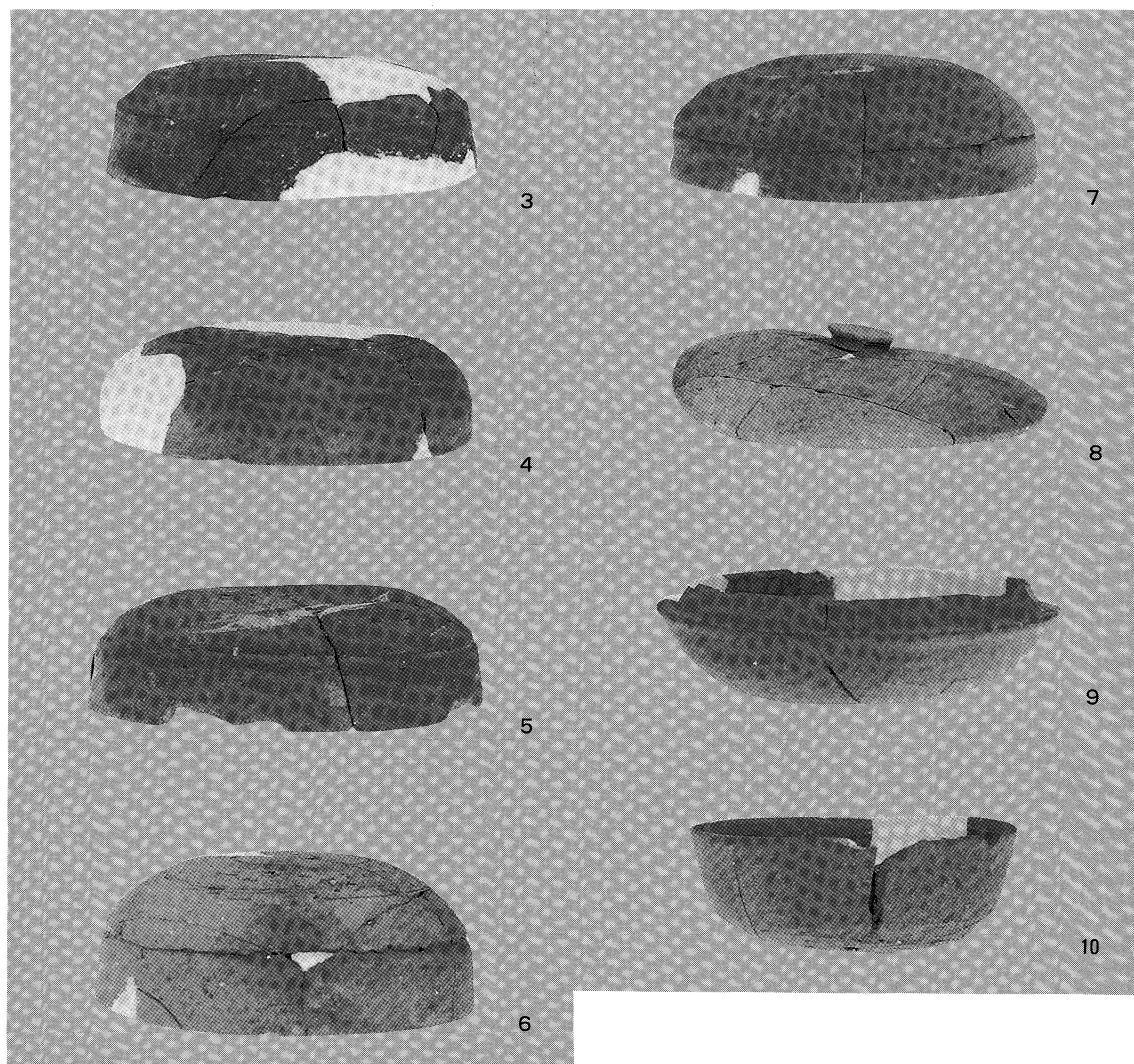
辻ノ田 1 号墳右袖部土器出土状況



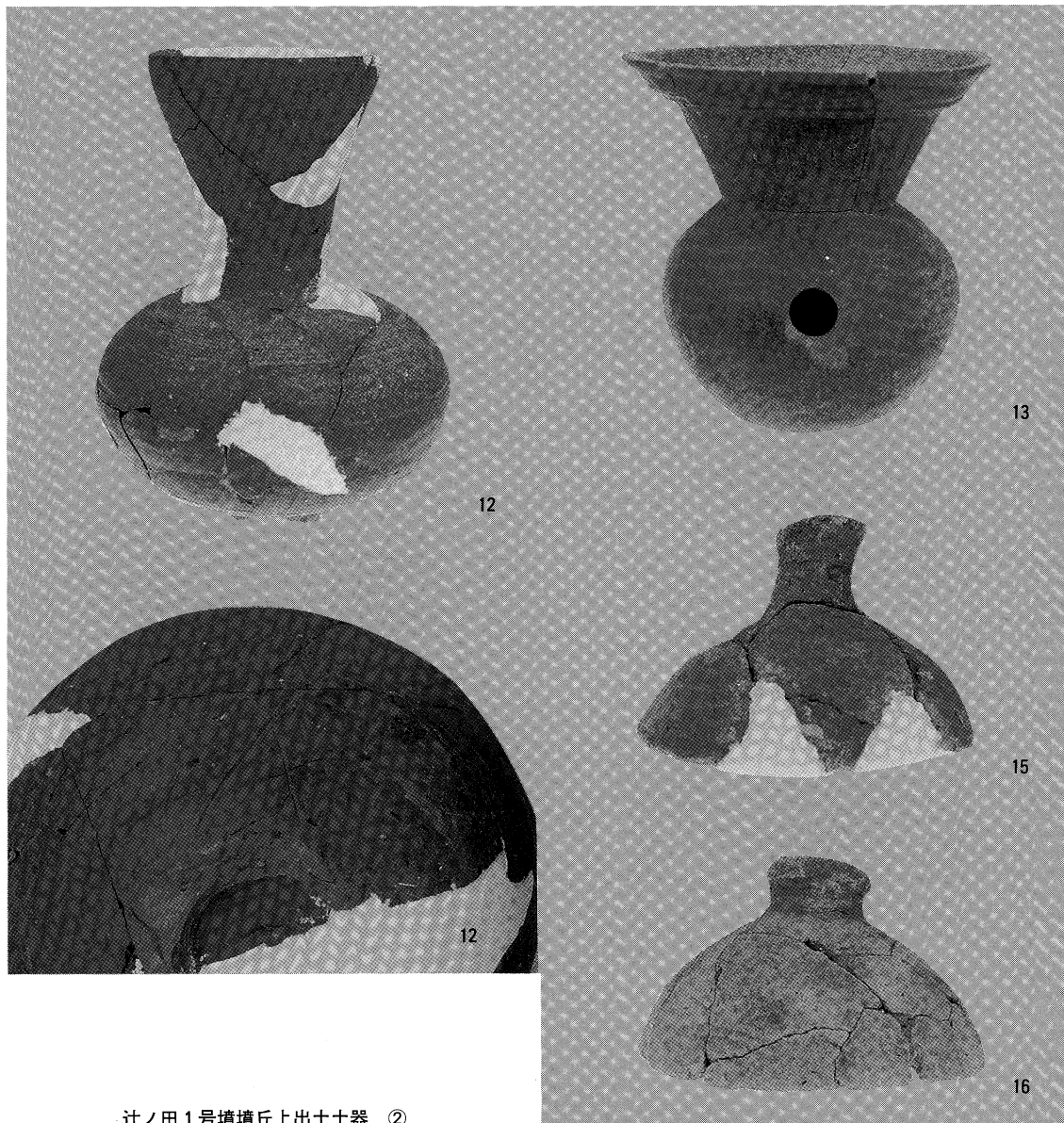
辻ノ田1号墳封土内出土土器 ①



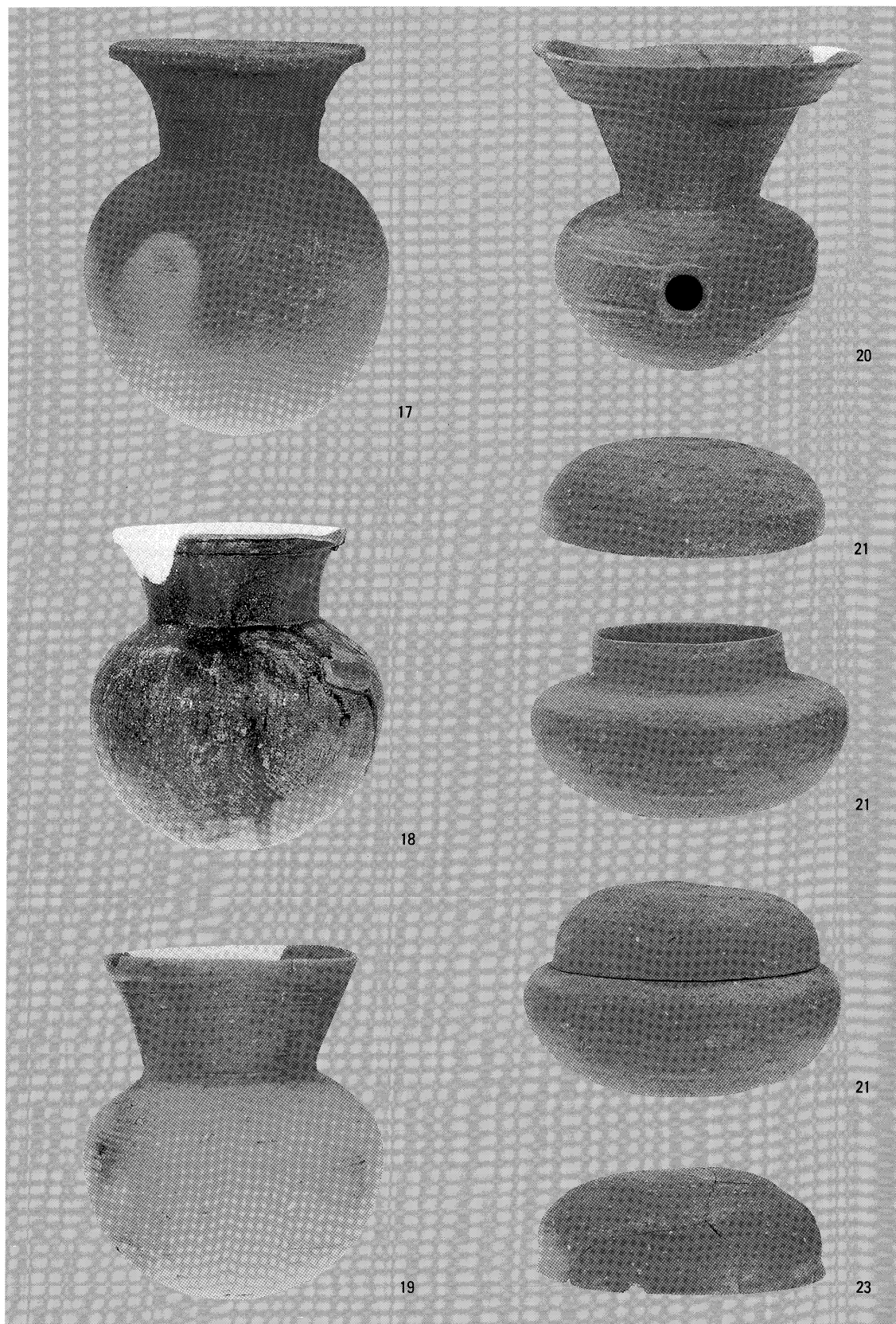
辻ノ田 1号墳封土内出土土器 ②



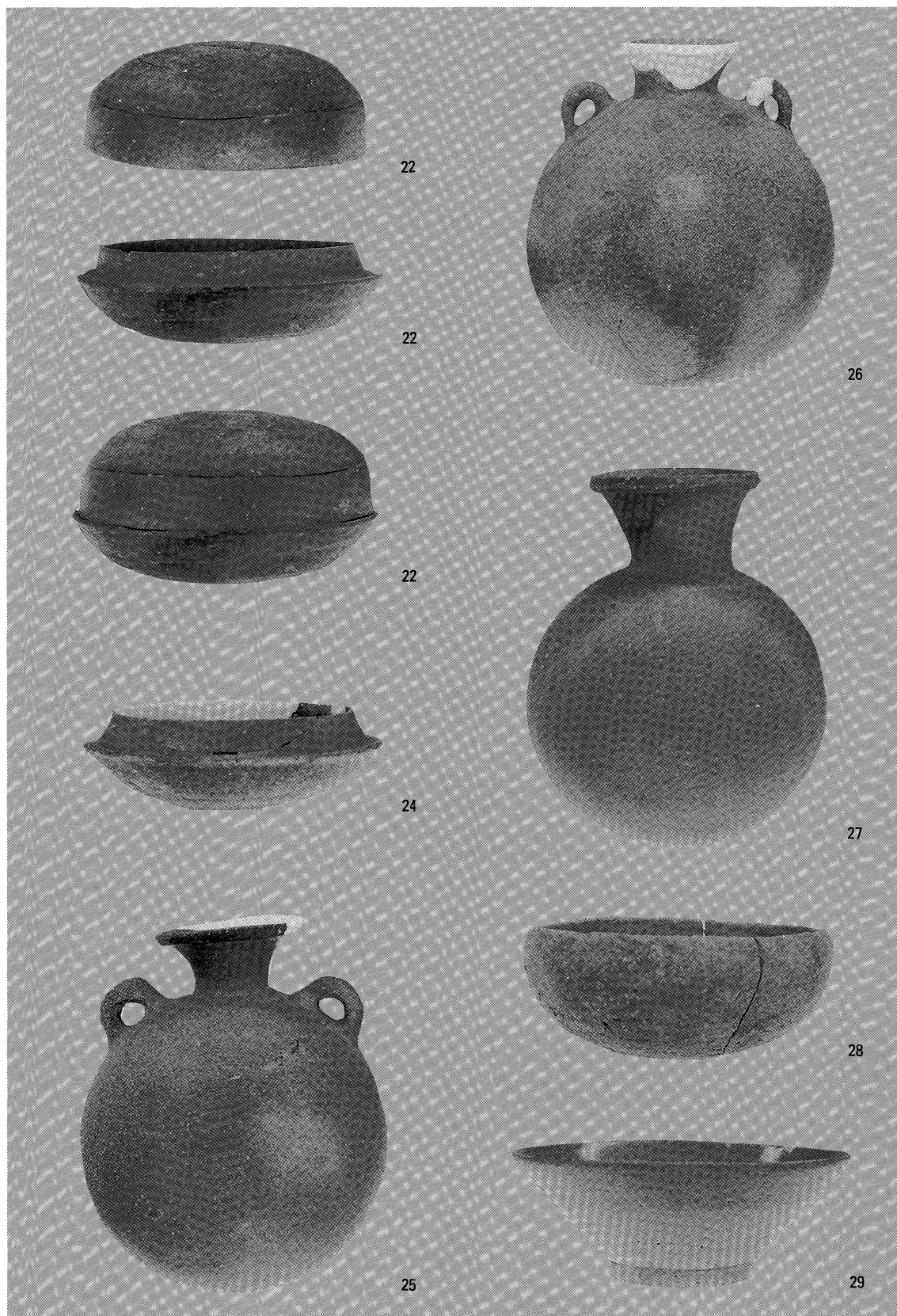
辻ノ田 1号墳墳丘上出土土器 ①



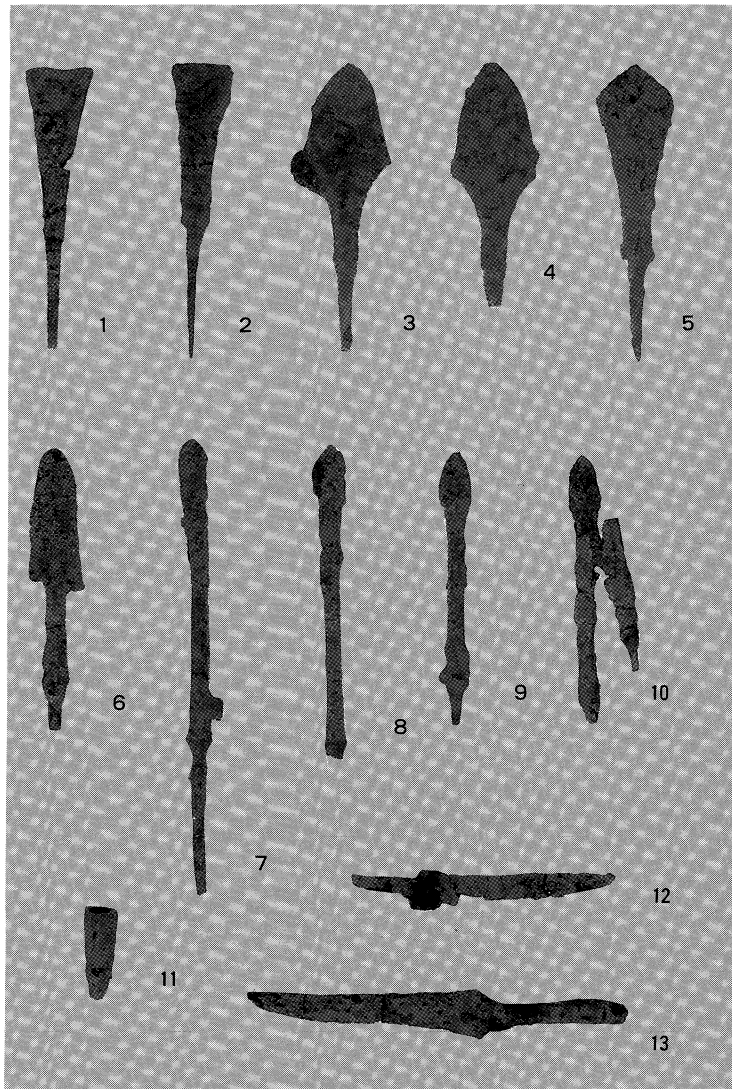
辻ノ田1号墳墳丘上出土土器 ②



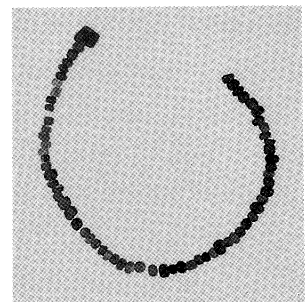
辻ノ田1号墳石室内出土土器 ①



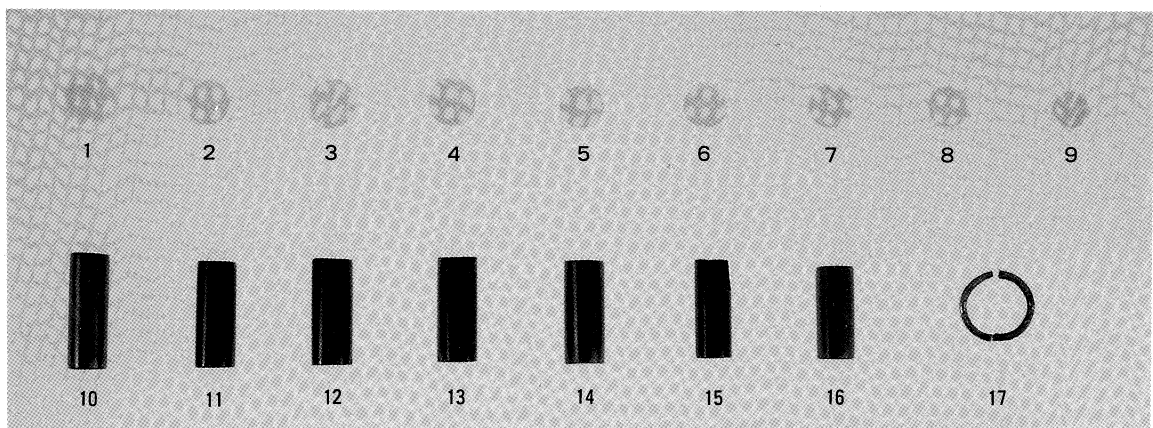
辻ノ田1号墳石室内出土土器 ②



辻ノ田 1号墳出土鉄器



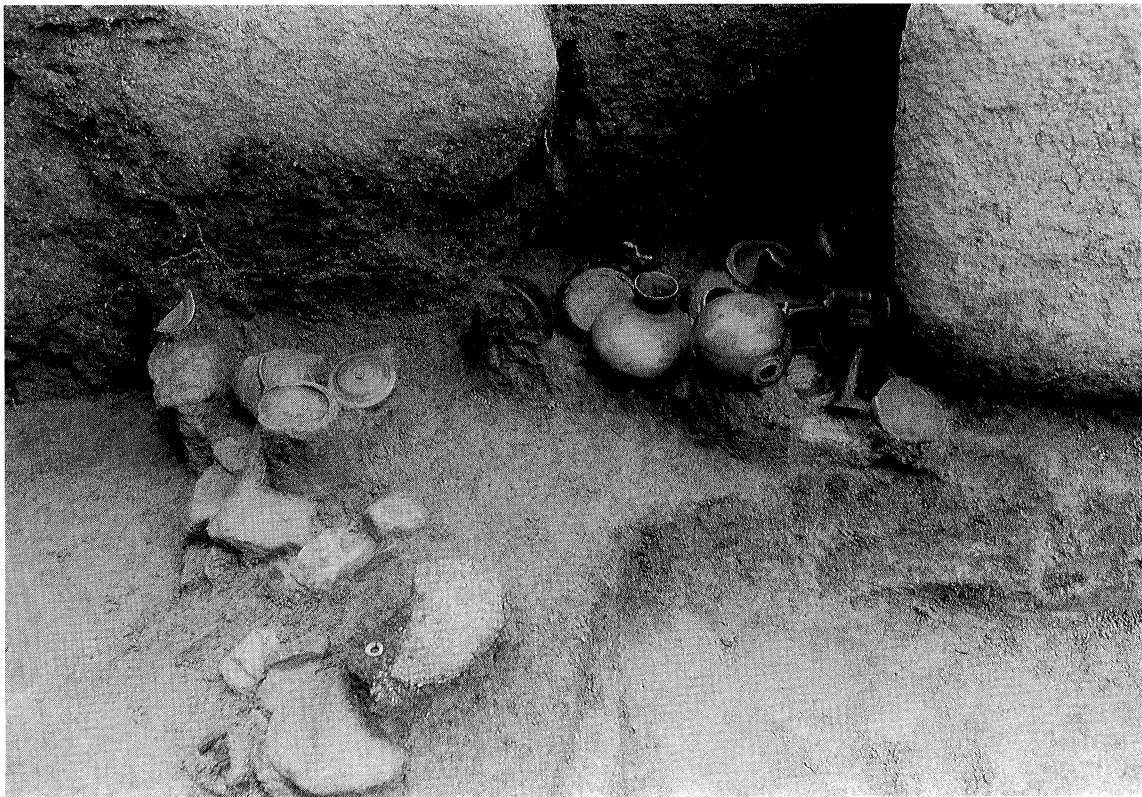
辻ノ田 1号墳出土ガラス小玉



辻ノ田 1号墳出土装身具



辻ノ田 2 号墳石室全量



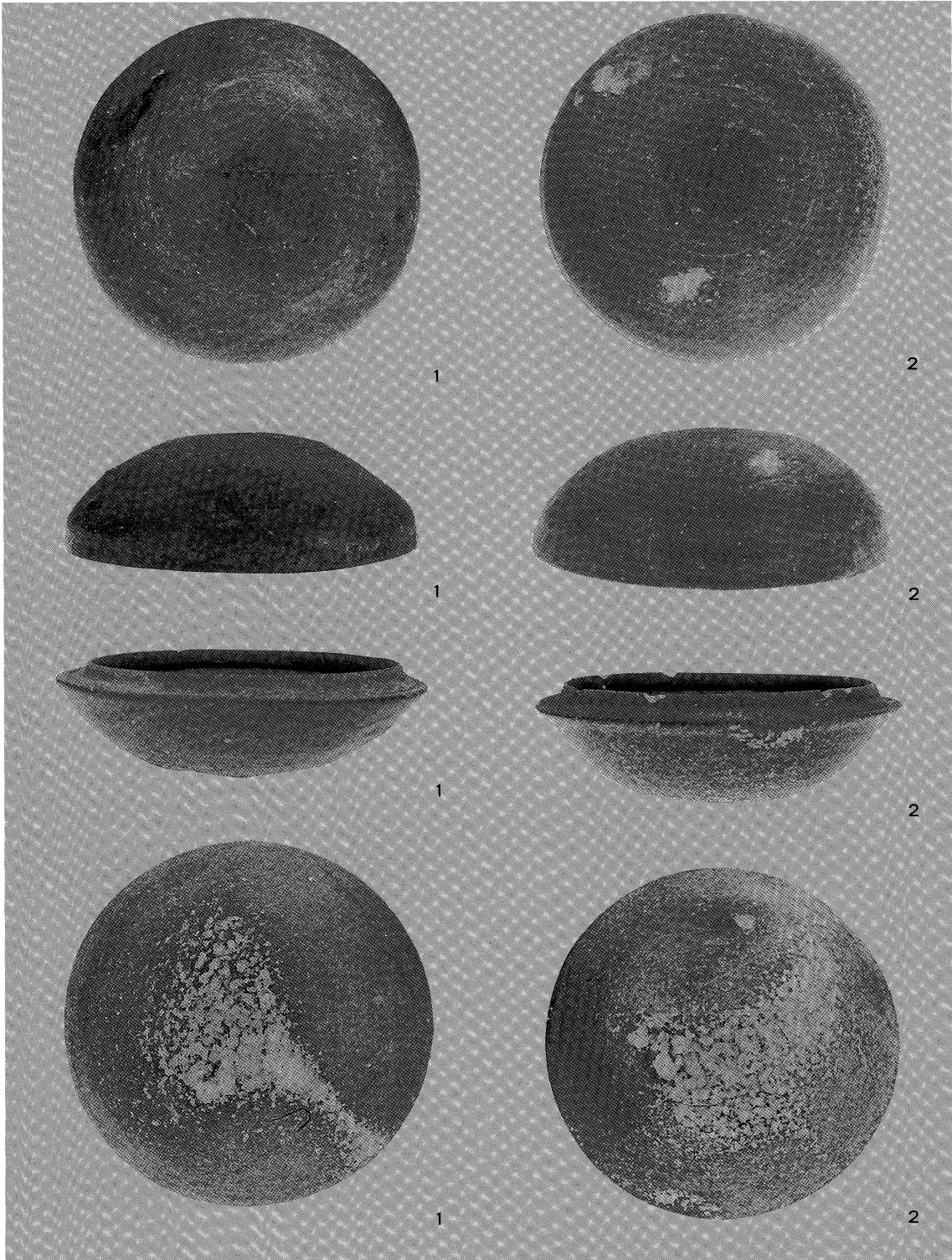
辻ノ田 2 号墳土器出土状況



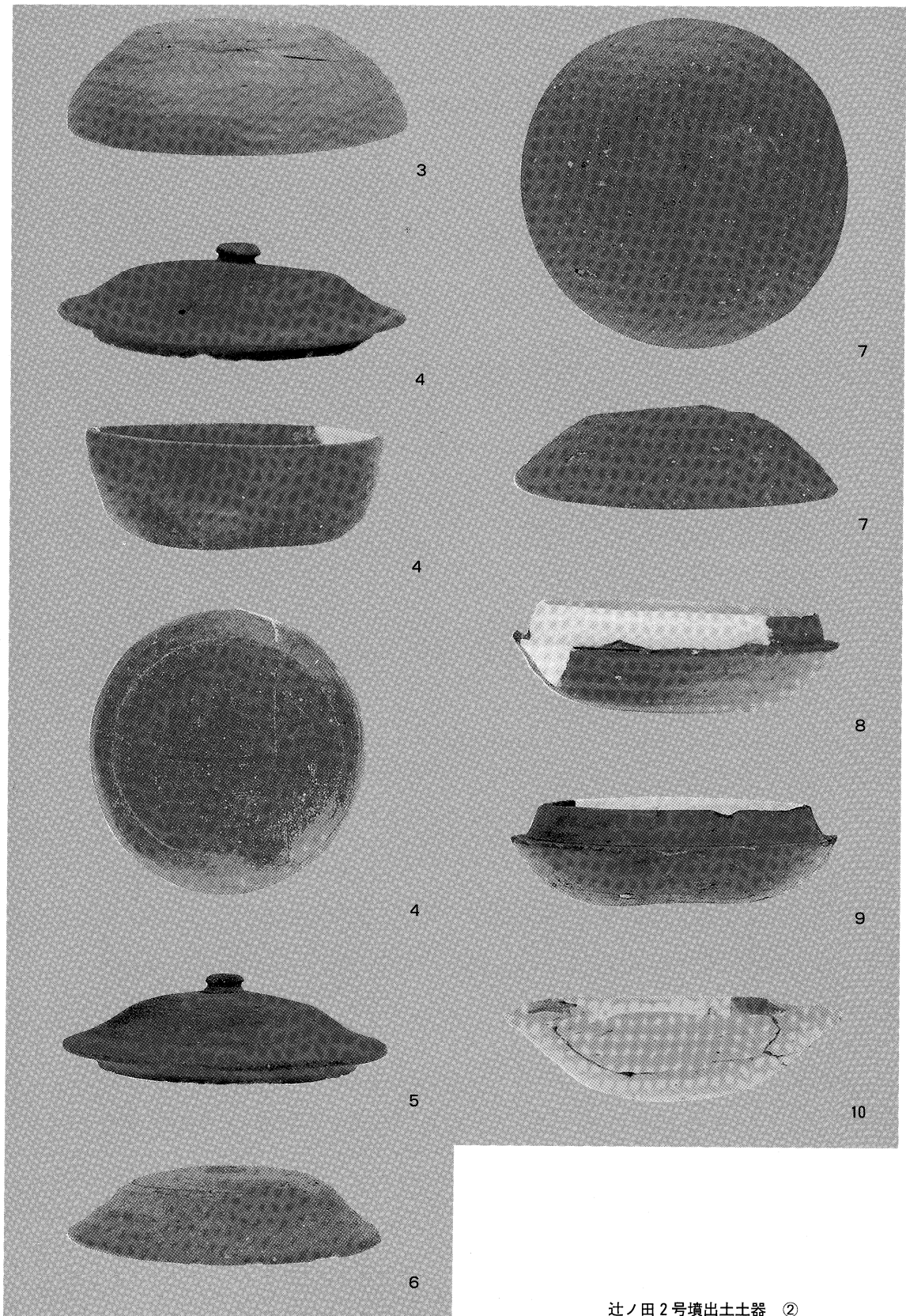
辻ノ田 2 号墳右袖部土器出土状況



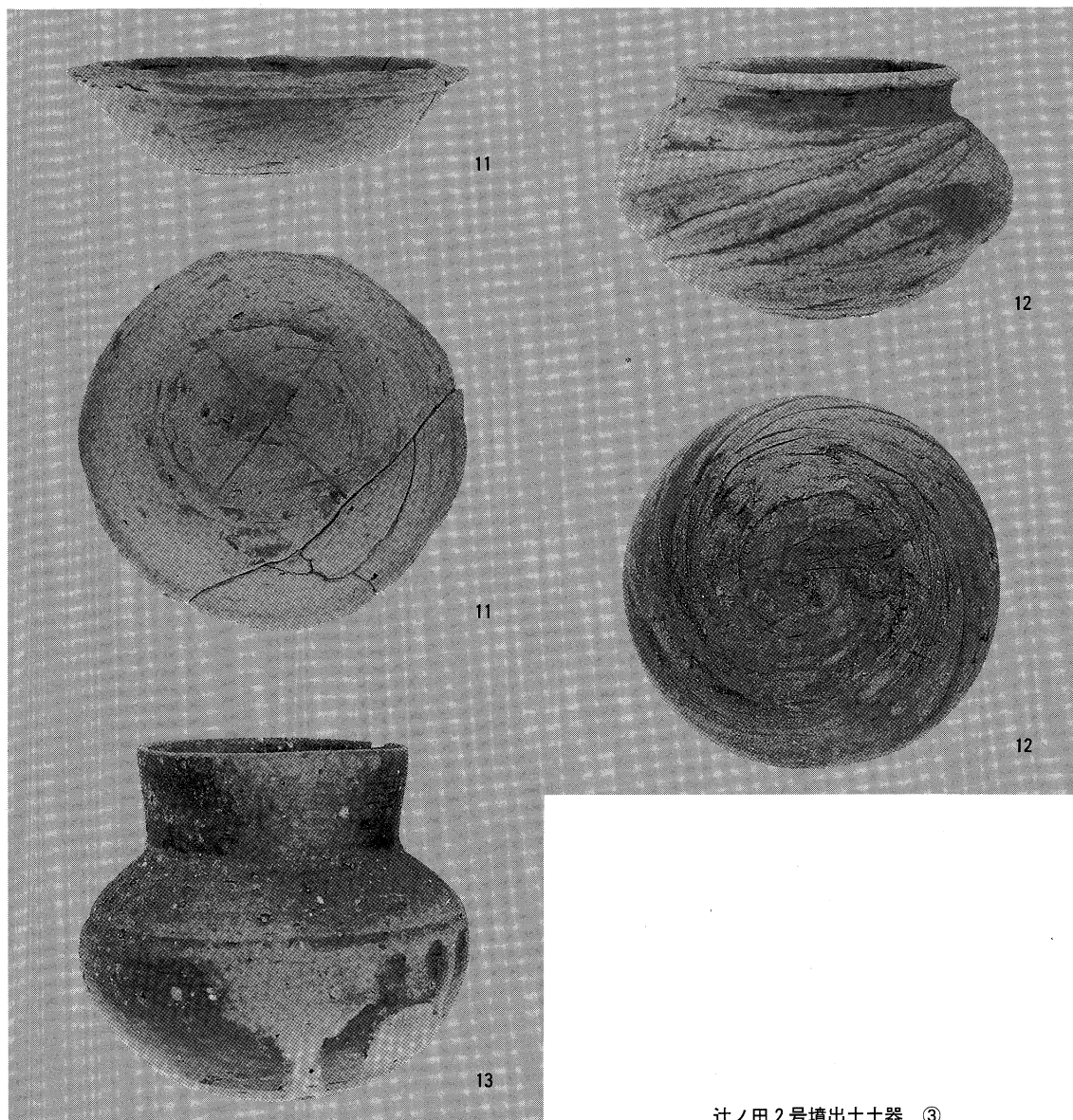
辻ノ田 2 号墳大刀出土状況



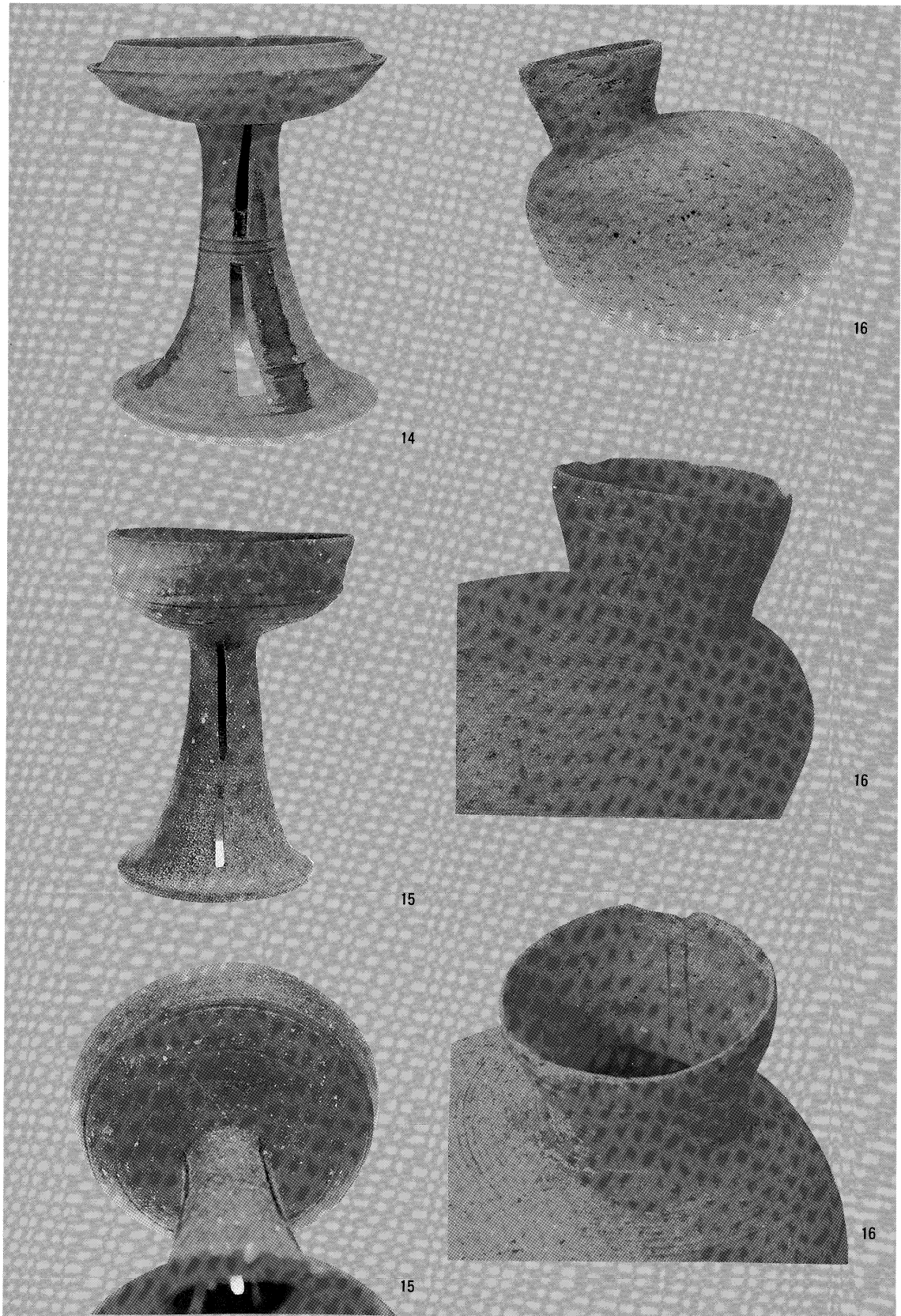
辻ノ田 2 号墳出土土器 ①



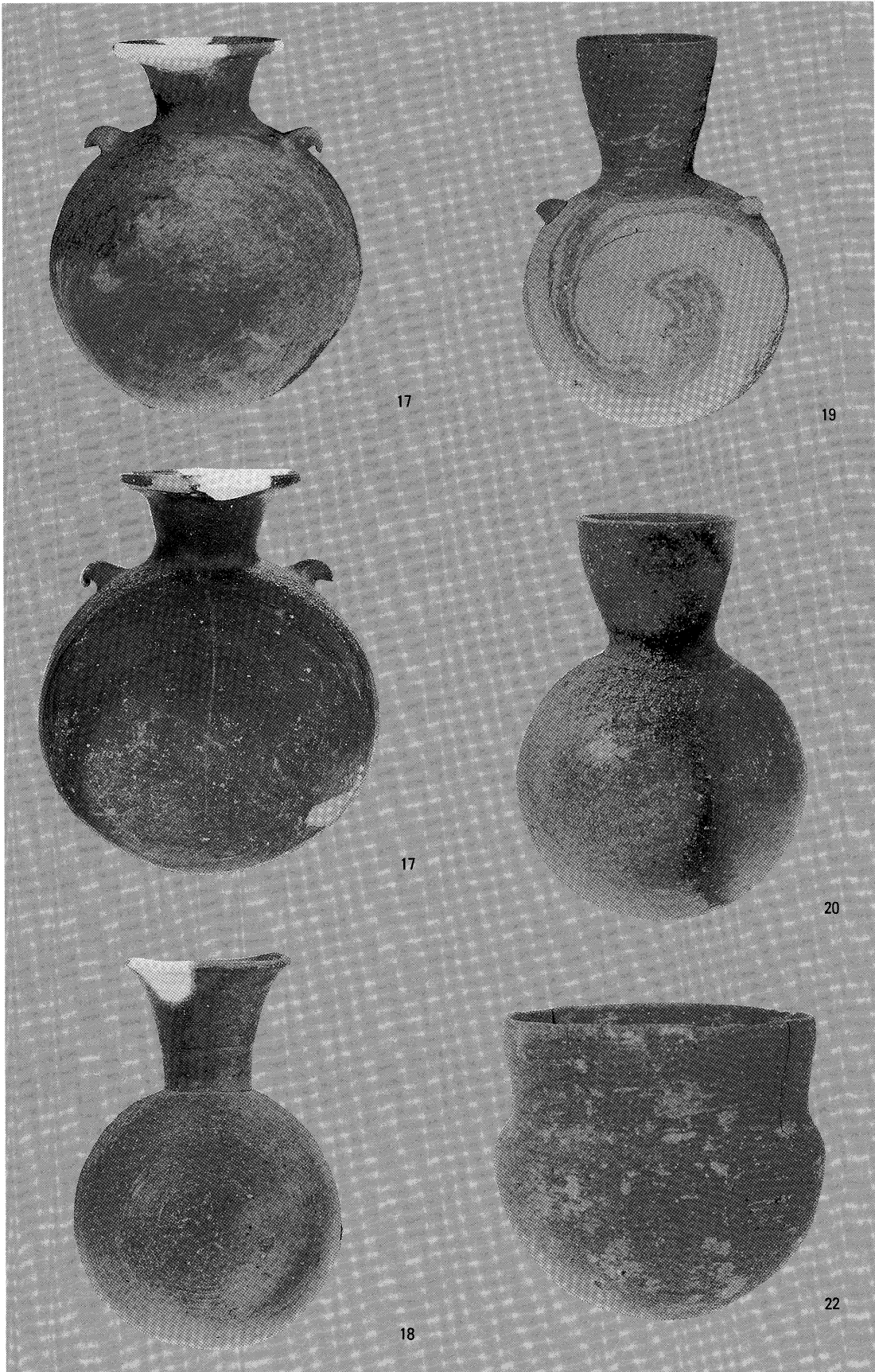
辻ノ田2号墳出土土器 ②

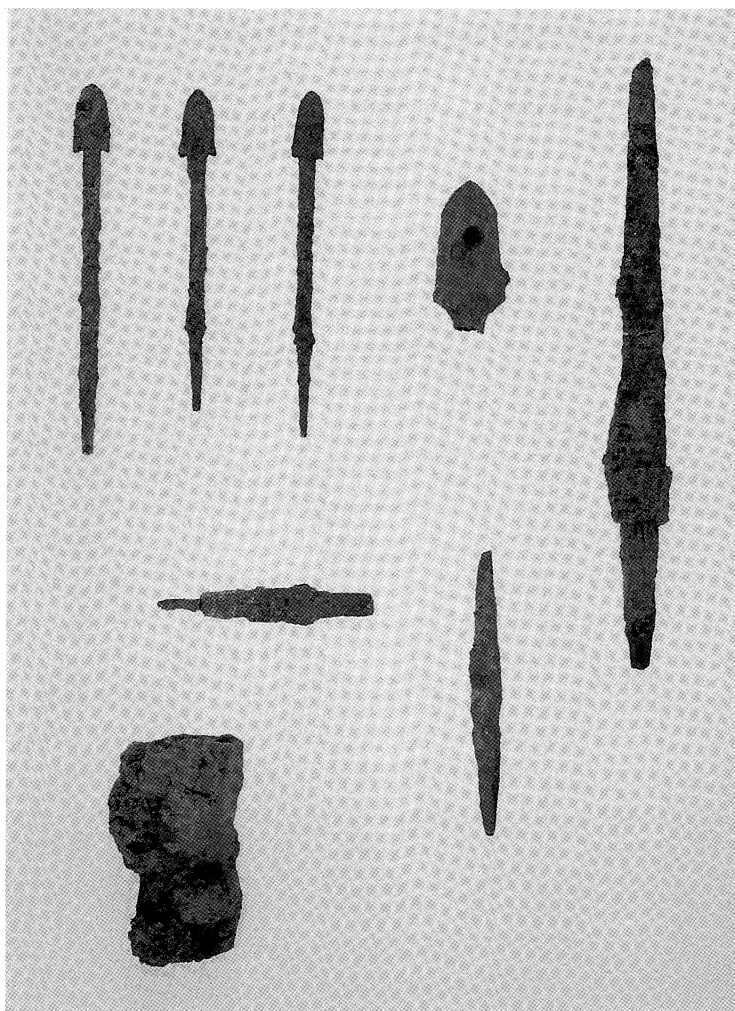


辻ノ田 2 号墳出土土器 ③



辻ノ田2号墳出土土器 ④

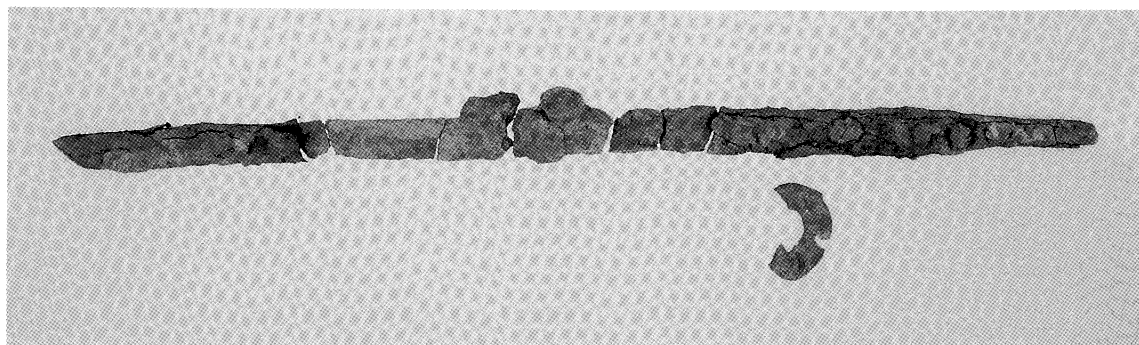




辻ノ田 2 号墳出土鉄器



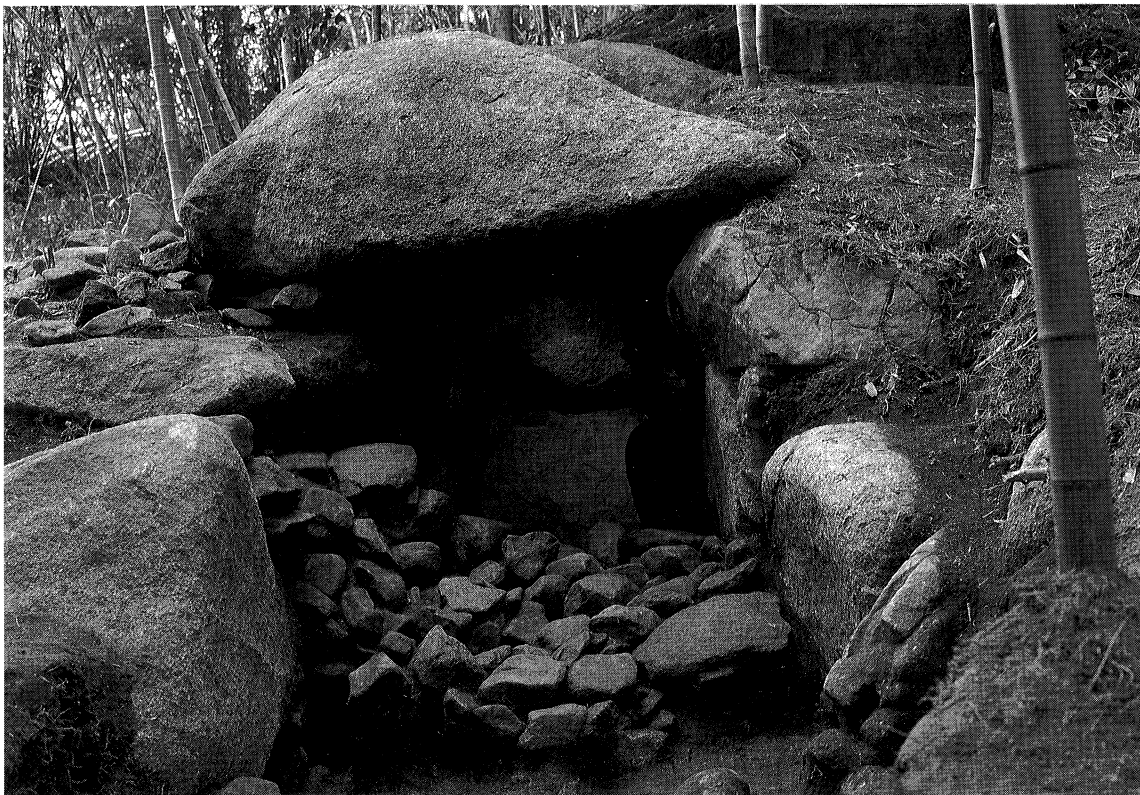
辻ノ田 2 号墳出土装身具



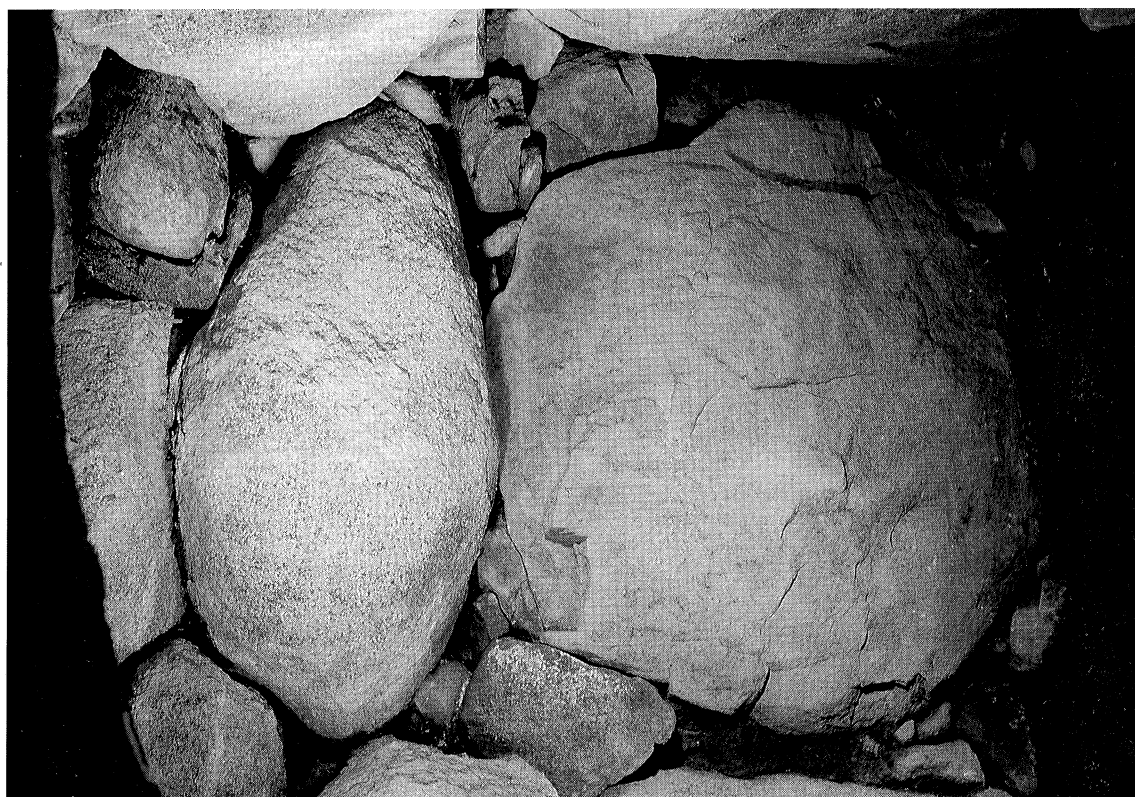
辻ノ田 2 号墳出土大刀



辻ノ田 3号墳調査前近景



辻ノ田 3号墳石室全景



辻ノ田 3号墳奥壁



辻ノ田 3号墳北トレンチ検出状況



辻ノ田 3 号墳西トレンチ検出状況



同上近景



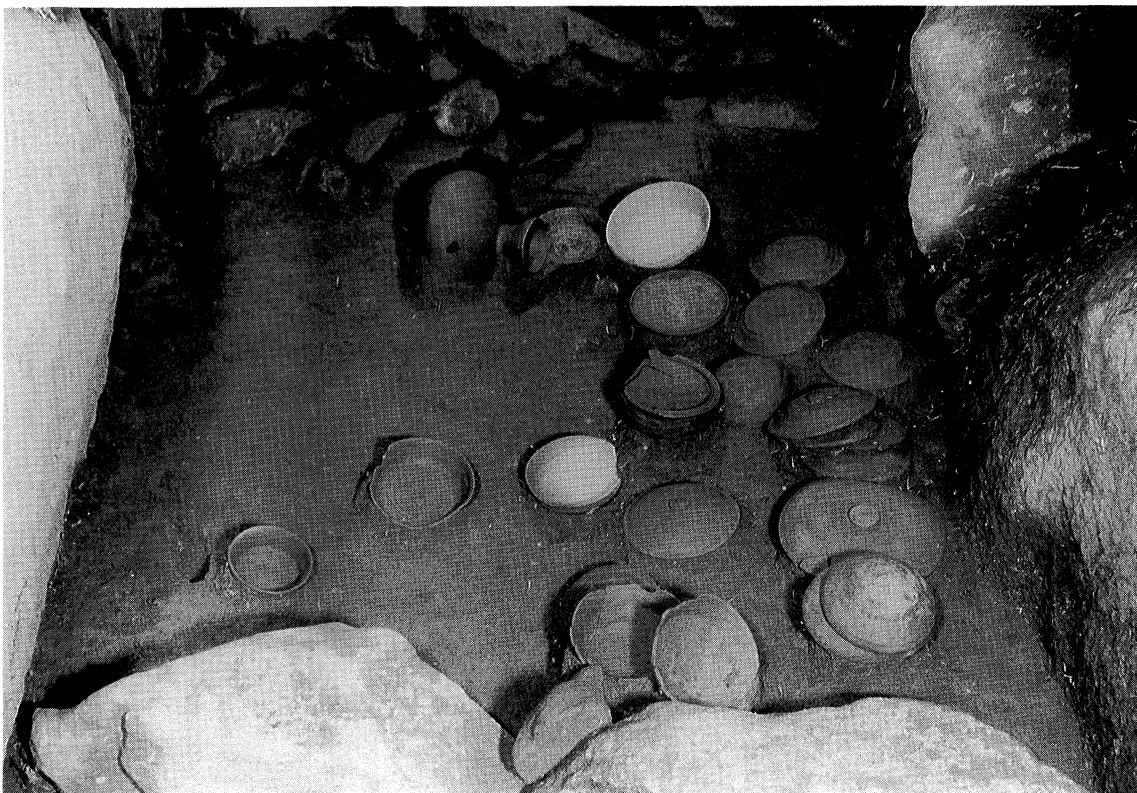
辻ノ田3号墳東トレンチ検出状況



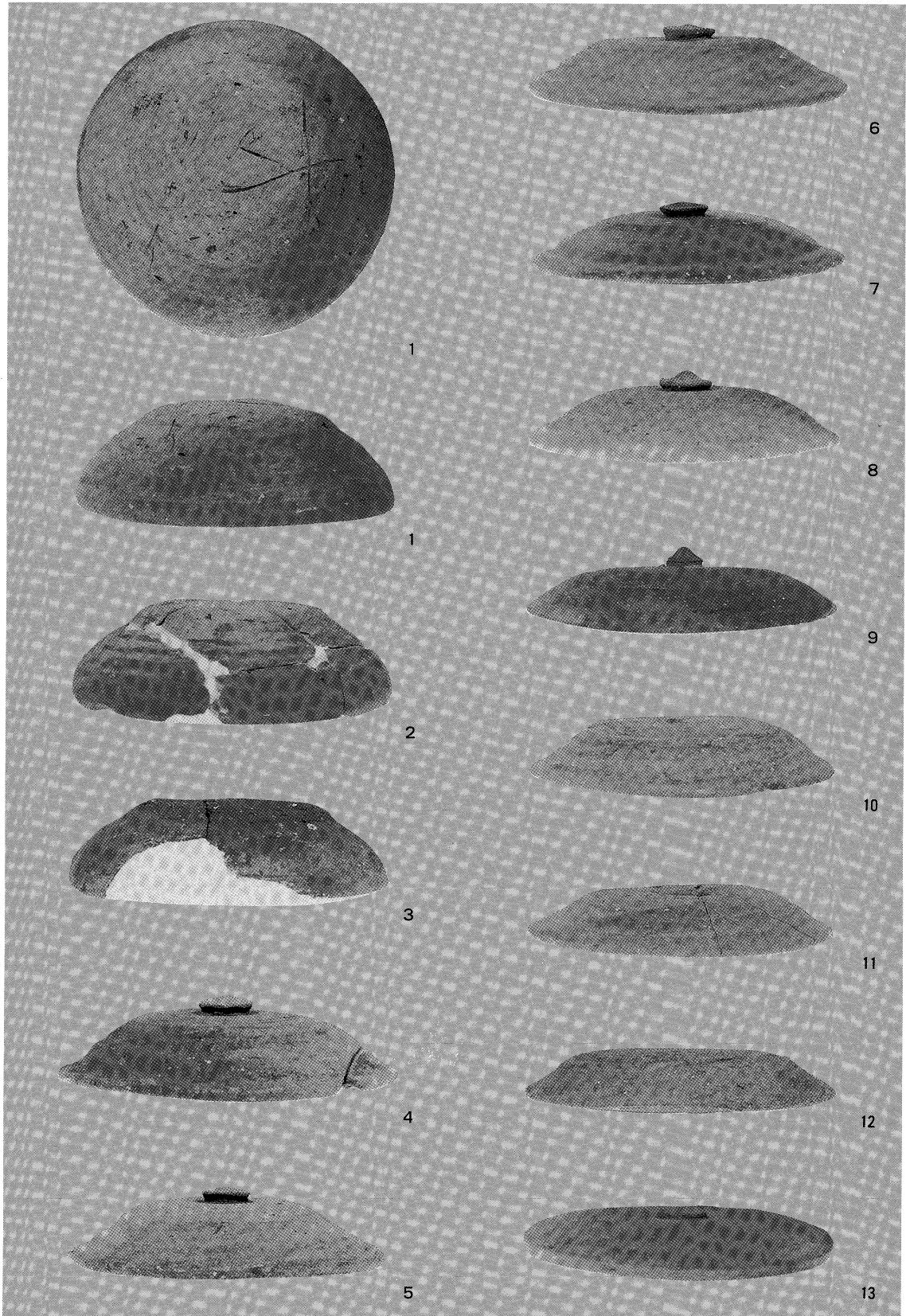
同上（上から）



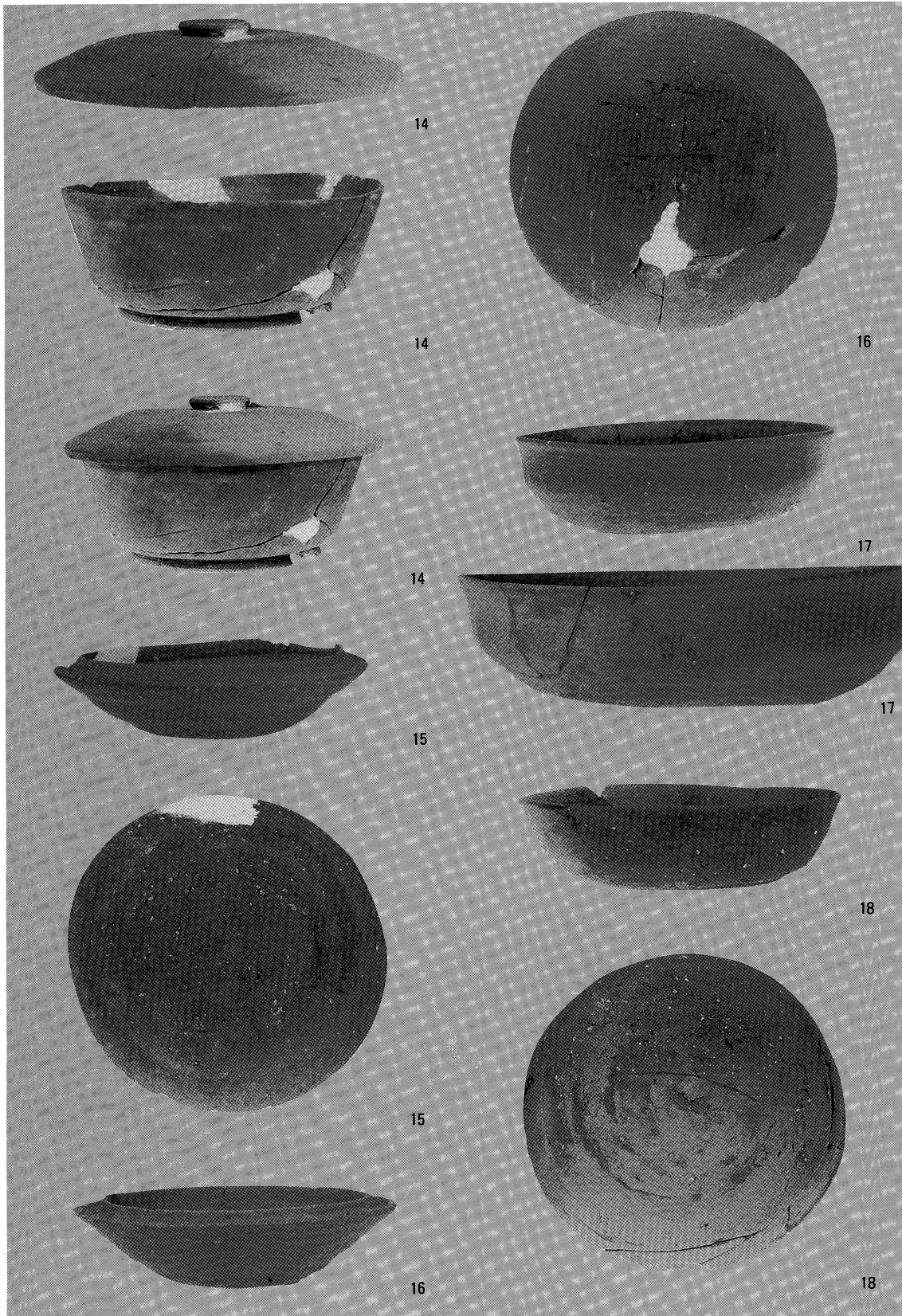
辻ノ田3号墳土器出土状況（羨道部から）



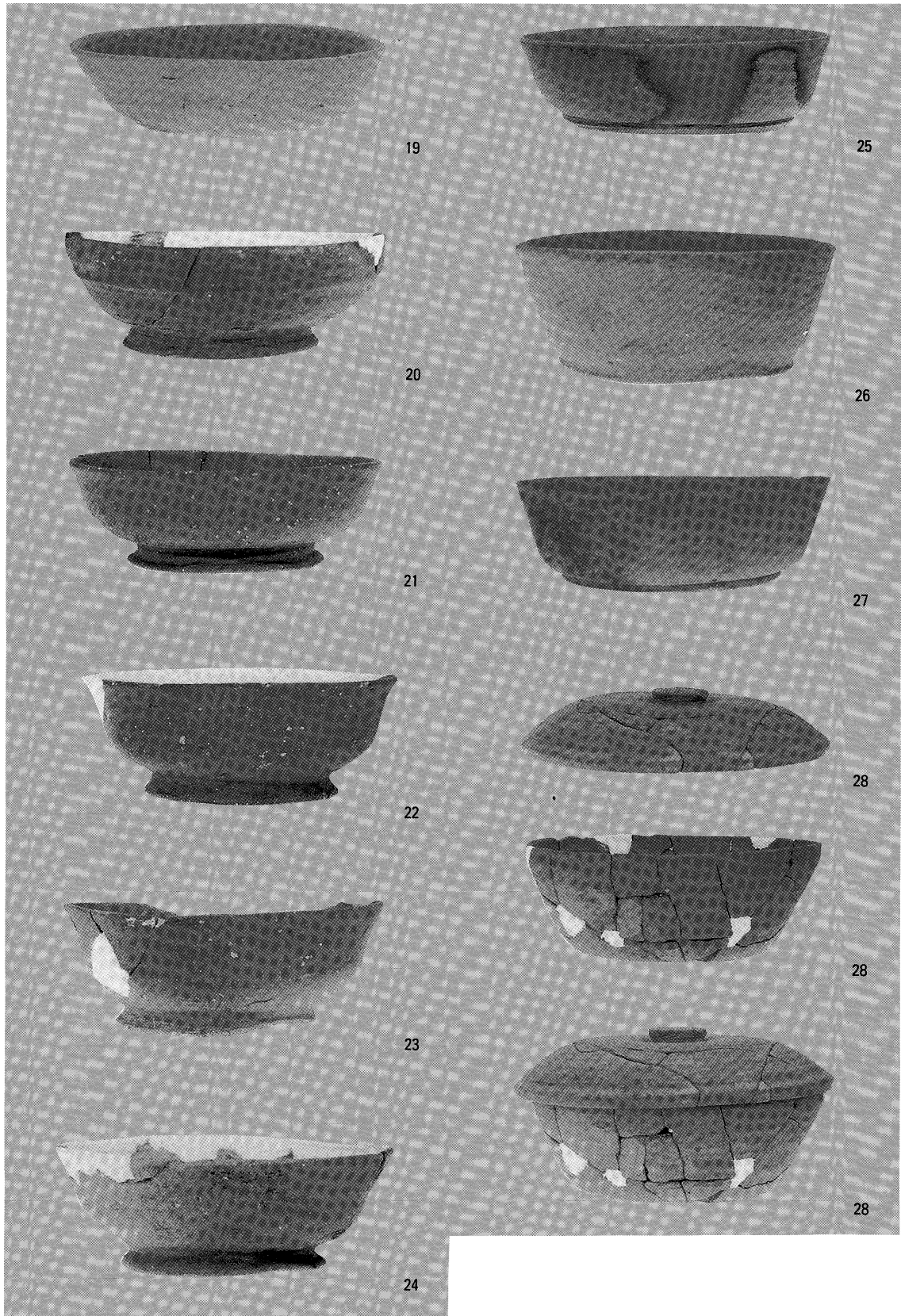
同上（玄室から）



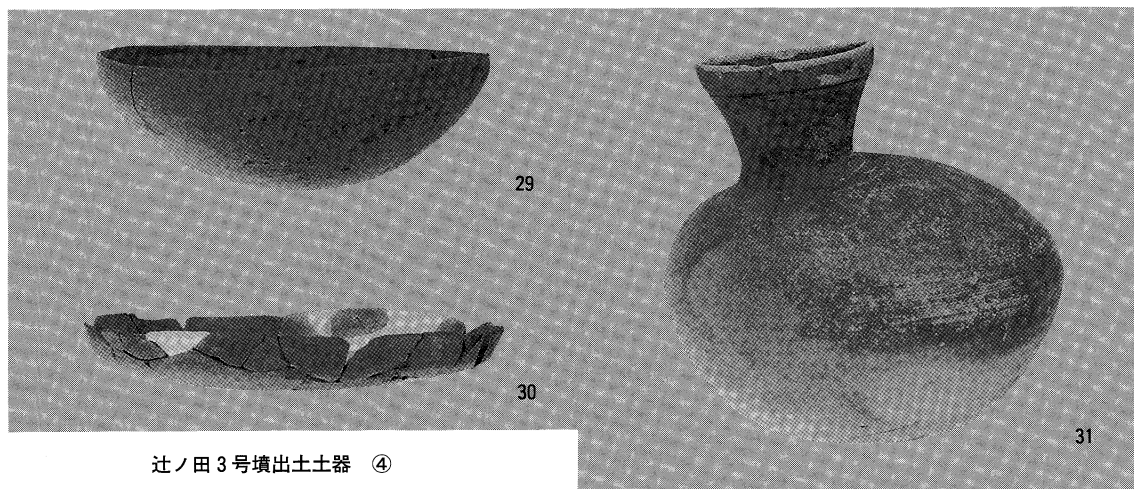
辻ノ田3号墳出土土器 ①



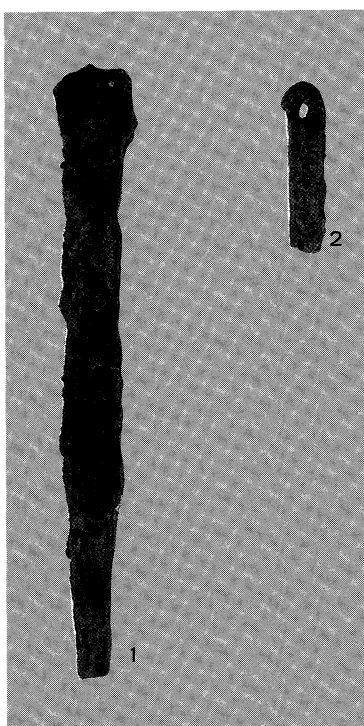
辻ノ田 3号墳出土土器 ②



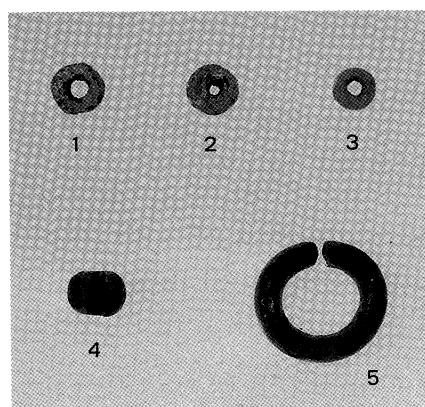
辻ノ田3号墳出土土器 ③



辻ノ田 3号墳出土土器 ④



辻ノ田 3号墳出土鉄器



辻ノ田 3号墳出土装身具

井ノ浦古墳・辻ノ田古墳群

前原市文化財調査報告書

第 53 集

平成 6 年 3 月 31 日

発 行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623

印 刷 (株) 津 村 愛 文 堂
福岡市早良区室見 2 丁目 16-8

